

日本写真家協会会報

NO.173
(2020. Feb.)

- 展望 国の分野横断統合ポータル「ジャパンサーチ」の取組
- 座談会 表現の多様・多極化した時代
- フォトフォーラム「撮るべき、時代。」

JPS 70



Photo Otsuru Tomonori

fp

Deconstruction of
digital camera



SIGMA

sigma-global.com

Canon

make it possible with canon



誰も見たことのない世界へ。

「1」という言葉のほかに、この一眼レフを形容する言葉があるだろうか。

プロフォトグラファーから選ばれ続ける理由は、

決定的瞬間を刻み込んできた膨大な写真の中にある。

そのフラッグシップは今、さらなる限界を打ち破り新次元へ到達。

意志に応え想像を超える、EOS-1D X Mark III。

世界にはまだ、見たことのない瞬間が待っている。

NEW

EOS-1D X Mark III



TOKYO 2020



TOKYO 2020



東京2020ゴールドパートナー
(スチルカメラ)



EOSは2019年9月20日に累計生産台数1億台*、交換レンズ(EF, RF, CN-E)は2018年12月19日に累計生産本数1億4,000万本を達成しました。*映像制作用シネマカメラを含む



©キヤノン EOS-1D X Mark III ホームページ

canon.jp/1dxmk3

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

■ Gallery	JPS ギャラリー 高尾啓介、武並完治、伊藤孝司、山本治之 5 近藤太智、小林正明
■ First Message	スマホの時代 野町和嘉 11
■ Telescope	国の分野横断統合ポータル「ジャパンサーチ」の取組 中川紗央里 12
■ Exhibition	第3回「笹本恒子写真賞」受賞記念展 16 吉永友愛写真展「キリシタンの里・祈りの外海」 第15回「名取洋之助写真賞」受賞作品写真展
■ Zooming	写真×写真(連載21) 写真の価値 河野和典 18
■ Wonder Land	<座談会> 創立70周年記念写真展「日本の現代写真1985～2015」 20 表現の多様・多極化した時代 出席者：飯沢耕太郎(評論家)、上野 修(評論家)、多田亜生(編集者)、 鳥原 学(評論家)、田沼武能(常務理事) 司会：松本徳彦(副会長)
■ Congratulation	おめでとうございます 写真家初の文化勲章を受章 田沼武能さん 27
■ Workshop	著作権研究(連載48) 著作権法改正で「授業目的公衆送信補償金制度」が決定。 28 補償金を分配する「教育利用写真アーカイブ」がスタート!
■ Archives	「日本写真保存センター」調査活動報告(32) 松本徳彦 30 写真撮影の初心をまとめた写真原板と教育利用のための写真の収集
■ Forum	第13回 JPS フォトフォーラム 「撮るべき、時代。」 32 基調講演：野町和嘉 パネリスト：大西みつぐ、HARUKI、熊切大輔 司会：佐々木広人
■ Comment	写真解説 37
■ Convention	第45回「日本写真家協会賞」贈呈式 38 受賞者：「日本写真文化協会ポートレートギャラリー」 第15回「名取洋之助写真賞」授賞式 受賞者：和田拓海、藤本いきる(奨励賞) 第3回「笹本恒子写真賞」授賞式 受賞者：吉永友愛 2019年度会員相互祝賀会
■ Challenge	第29回「日本製鉄音楽賞」特別賞 舞台写真家 林喜代種さんが受賞 42
■ Topics	賛助会員トピックス 44
■ Digital Topics	進化を続けるカメラの 手ブレ補正機能を探る 46
■ Report	セミナー研究会レポート 第1回著作権研究会報告 48 第1回国際交流セミナー報告、page2020 オープンイベント日本写真保存センターセミナー報告
■ Message	Message Board 50
■ Books	JPS ブックレビュー 52
■ International	日本写真家協会の沿革(英文) 54
■ Infomation	追悼 = 名誉会員・白旗史朗、常盤とよ子 正会員・寺崎瑞穂 55 田村仁志、鴨志田孝一、和田靖夫/経過報告/編集後記
■ Gallery	X ギャラリー 細田満夫、服部辰美、林 義勝 64 表紙・大鶴倫宣、表4・武下 巧

広告 案内

- | | | |
|----------------------|------------------------|---------------|
| ■ (株) シグマ | ■ (株) ニコンイメージングジャパン | ■ (株) 堀内カラー |
| ■ キヤノンマーケティングジャパン(株) | ■ リコーイメージング(株) | ■ (株) ヨドバシカメラ |
| ■ オリンパスギャラリー | ■ (一社) 日本写真著作権協会(JPCA) | ■ 富士フイルム(株) |
| ■ (株) タムロン | | |

OLYMPUS

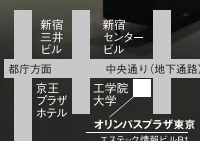
Your Vision, Our Future

オリンパスギャラリーのご案内

オリンパスギャラリーでは、写真文化の普及・向上に貢献することを目的に、さまざまな写真展を行っています。

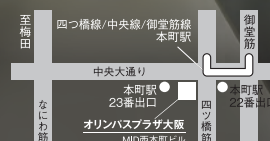
オリンパスプラザ東京

営業時間11:00～19:00
木曜定休
〒160-0023
新宿区西新宿1-24-1
エステック情報ビルB1
Tel: 03-5909-0191



オリンパスプラザ大阪

営業時間10:00～18:00
日曜・祝日定休
〒550-0011
大阪市西区阿波座1-6-1
MID西本町ビル
Tel: 06-6535-7911





「今」を生きるアマチュアボクサー達の肖像・竹原ピストル——高尾啓介
写真集『AFTER THE GONG 「今」を生きるアマチュアボクサー達の肖像』



山麓の春———武並完治

写真集・写真展「伯耆大山—神宿る山の博物誌」



在朝日本人——伊藤孝司

写真集『ドキュメント朝鮮で見た＜日本＞知られざる隣国との絆』



年の暮れ———山本治之

写真集・写真展「丹波篠山美しき里の四季」



Pontcysyllte Aqueduct ————— 近藤太智

写真展「フランス・イギリスの橋を旅する HERITAGE Eifel & Telford」



ダム水没予定地に暮らす尾方さん夫妻——小林正明

写真集・写真展「土と生きる 川辺川ダム水没予定地に暮らし続けた夫婦」

スマホの時代

会長 野町 和嘉

昨年ある県展の写真部門審査を担当した。第73回を数える県美術界の一大イベントであり、渡辺義雄、濱谷浩を筆頭に写真界のお歴々が審査を担当してきた。私も10年ほど前にも呼ばれている。近年は応募数を増やすことを狙って審査は2次に及び、1次では四つ切りプリントで行われる。

審査を開始して当惑させられたのは、あまりにレベルの低い作品が次々に出てくることだった。ノイズが目立ったり、構図にも光にも無頓着で、そして屈託のない家族写真も多かった。画質からしてスマホで撮ったものが少なくないようだった。入選のあかつきには、全紙サイズのパネルにして人様に鑑賞していただくという想像力が、まるで欠如していると思えないのだ。

担当者に尋ねると、例年のことであり、後半には写真クラブ単位の応募作がまとまって寄せられているので心配ご無用とのことだった。果たして指導の行き渡っているクラブの作品レベルは申し分なく、結果的には安堵したことだった。

それにしても、スマホを手にした初心者がそれなりの応募料を払って県展に応募してくるとは、写真も舐められたものである。シャッターを押しさえすればとにかく写ってしまう。そこで判断停止してしまえばこれが写真なのだ。常に身近にあるスマホで、今や瞬きする程度の感覚で写ってしまえば、写真とはその程度のものなのだ。

スマホ機能の急速な進化によって写真を巡るあらゆる環境が激変した。大きなイベントなどでは、肉眼で見ようとする前におびただしい数の群衆が反射的にスマホを向けている。昨年11月の新天皇皇后のお披露目パレードでも、沿道はどこもおびただしいスマホの列と化していた。距離感からして、また人垣に遮られまともに写るはずはないだろうと思うのだが、スマホの呪文にかけられ、世紀の一瞬を肉眼でしっかりと見る

より、スマホを覗かないことには取り残された気分になっているのだろうか。撮るという行為によってイベントに参加した高揚感に浸っているのであろう。

あるいはスマホを手にしたことで、判断停止の野次馬の群れと化してしまっているとも言える。

年明け早々1月6日の真昼間に、新宿駅南口の歩道橋で首つり自殺があった。それを何人もの野次馬が撮影し、そしてSNSにまで上げている。ネット上には、思慮に欠ける行動を強く批難する声が集まっていたが、時すでに遅く、無慈悲なことにその悲惨な写真は世界に拡散してしまっていて、1月20日現在、私が滞在中のミャンマーでも閲覧ができる。ネットに国境はなく拡散してしまえば取り返しがつかないのだ。ネット時代の感覚麻痺極まりである。誰もがスマホという記録装置を手にしたことで、世相までが変わってしまった。

今や誰もが暇さえあればスマホ画面をのぞき込んでいる。電車の中、空港待合室、世界中どこに行ってもこの習性だけは、どんな辺境に行っても浸透している。大げさに言うなら、スマホが人類の行動様式を変えてしまったとも言える。そしてスマホ、ネットの進化により“情報はタダ”という常識がすっかり定着してしまった。私のHPにも写真を使用したいので許可がほしいという問い合わせがしばしば届く。タダで使えるものと思い込んでいるのだ。昨日のこと、気球からの空撮を終え地上に降り立つと、パイロットが名刺を差し出し、ウェブに使いたいのでこのアドレスに画像を送ってくれないかと、悪びれる様子もなく言う。記念写真をやりとりする感覚で、対価を支払うという発想がまるでないのだ。

デジタルの進化と共に様変わりした世界で、プロ写真家はともかく生きてゆくのである。

「ジャパンサーチ」の取組

中川 紗央里（国立国会図書館 電子情報部 電子情報企画課）

「ジャパンサーチ」は、日本の文化機関が保有する書籍、文化財、メディア芸術、放送番組等、多種多様な資料の情報をまとめて検索できるポータルサイトである。2019年2月に試験版を公開し（図1）、2020年夏までの正式版公開を目指して、システム改善及び連携拡大に取り組んでいる。2019年10月には、日本写真保存センターの「写真原板データベース」と連携した。本稿では、ジャパンサーチの概況を紹介するとともに、ジャパンサーチとの連携による写真資料情報の利活用可能性について触れる。

■はじめに：デジタルアーカイブの意義

写真は歴史的、文化的な事象を記録し表現する上で優れたコンテンツである。しかし、貴重なフィルムが作者の死没等によって散逸・破棄されたり、劣化によって使えなくなったりするケースが発生している。このようなリスクは、写真に限らず、分野によって態様や対策の取り方は異なるものの、あらゆるコンテンツについて存在する。

こうしたリスクへの対策の一つとして、貴重なコンテンツ＝情報資源をデジタル情報として記録し、保存するとともに、データベースなどで提供する「デジタルアーカイブ」の取組は重要である。また、デジタルアーカイブは、文化の保存・継承・発信に有効であると同時に、デジタルアーカイブを通じてコンテンツが活用されることにより、観光や地方創生、教育、新たなビジネスの創出等に貢献し、社会の活性化にも繋がるのが期待されている。コンテンツ保有者にとっても、デジタルアーカイブを構築することにより、収蔵品管理業務の効率化、防災対策、展示サービスの充実等の効果があるとされている。内閣府知的財産戦略本部が毎年策定する「知的財産推進計画」では、2014年以降、デジタルアーカイブの推進に国全体で取り組む方針が盛り込まれており、国全体でデジタルアーカイブを促

進する機運が高まっている。

■ジャパンサーチとは

ジャパンサーチは、多様な分野のデジタルアーカイブと連携し、その情報を統合的に検索できるポータルサイトである。ジャパンサーチが集約するのは、「メタデータ」（コンテンツの内容、外形、所在等について記述したテキストデータ。例えば、写真のタイトル、撮影者名、写真のサイズ、撮影年月日、撮影地等の情報）であり、画像や映像等のコンテンツそのもの

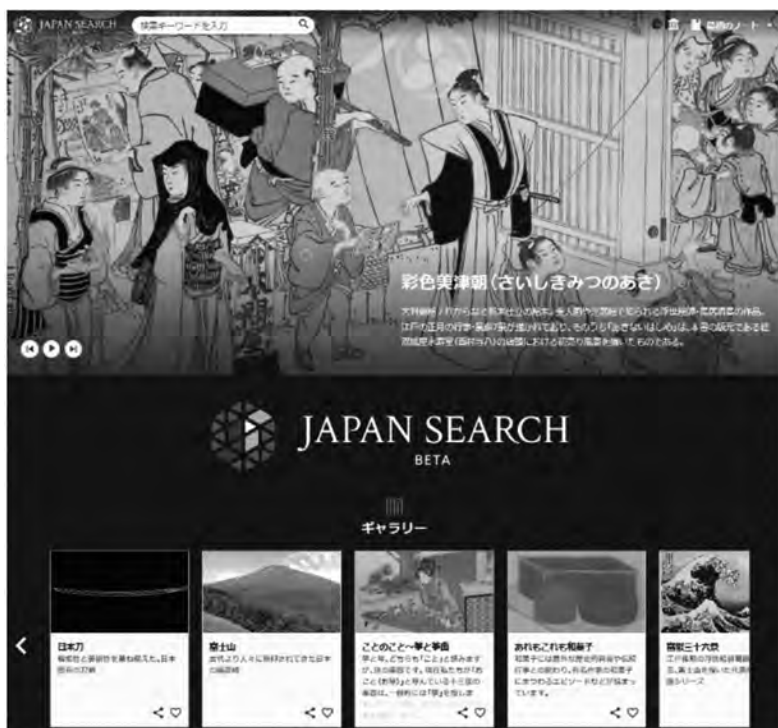


図1 ジャパンサーチ（試験版）トップ画面 < <https://jpsearch.go.jp/> >

- 1、日本写真保存センター web サイトより
<https://www.jps.gr.jp/archive/>（最終アクセス日：2020-1-8）
- 2、デジタルアーカイブの構築・共有・活用ガイドライン

（デジタルアーカイブの連携に関する関係省庁等連絡会・実務者協議会、平成29年4月）p.7, p.24
https://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeiki2/digitalarchive_kyougikai/guideline.pdf

は、リンクを辿って、連携元のデジタルアーカイブのWebサイトに移動して閲覧する仕組みになっている。

ジャパンサーチの運営主体は、「デジタルアーカイブジャパン推進委員会及び実務者検討委員会（事務局：内閣府知的財産戦略推進事務局）」であり、国立国会図書館はこれらの委員会に参加するとともに、システムの構築・運用（連携に係る実務を含む。）を担当している。

■ジャパンサーチ（試験版）の機能

試験版で現在提供している機能を、「探す」「楽しむ」「活かす」という3つの視点から紹介する。

（1）「探す」機能

通常のキーワード検索の他に、例えば葛飾北斎の作品や、刀剣に関する資料等、特定のテーマの資料のみを対象にした検索ができる「テーマ別検索」の仕組みを用意している。また、「画像検索」では、サムネイル画像やユーザがアップロードした画像を元に、それと似た特徴を持つサムネイル画像を検索することができる（図2参照）。

（2）「楽しむ」機能

「富士山」「江戸名所百景」「伊勢神宮」等、様々なテーマに沿って、ジャパンサーチの連携コンテンツを解説付きで紹介する「ギャラリー」を作成・公開している（図3参照）。検索を行わなくても、コンテンツの魅力を感じてもらいたいがある。

（3）「活かす」機能

ジャパンサーチが集約した多様なメタデータを、「ジャパンサーチ活用スキーマ」という形式に変換し、リンク・オープン・データとして提供している。このデータは、ジャパンサーチ上で取得することができ、より高度な検索やデータ分析、アプリ開発等に利用することができる。

■ジャパンサーチにおける利用条件表示

ジャパンサーチは、ユーザの利便性向上と権利保護の両方を実現するために、連携データベースのメタデータ、サムネイル画像及びデジタルコンテンツの権利状態や利用条件を分かりやすく表示することを目指している。デジタルアーカイブの利用条件表示の在り方は重要な検討課題であるため、実務者検討委員会でも議論が行われてきた。2019年4月には、利用条件設定にあたっての基本的な考え方やデジタルアーカイブに關係する著作権法の整備状況についてまとめた文書「デジタルアーカイブにおける望ましい二次利用条件表示の在り方について」が公開された。ジャパンサー



図2 画像検索の一例
写真原板データベース「ガーデン・テニス（画像①）」の類似画像として「羽根突き（画像②）」がヒットした ※画像はいずれも著作権あり



①『ガーデン・テニス』
ID: photo-00045_00034_0020



②『羽根突き』
ID: photo-00045_00034_0005

3、https://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/digitalarchive_suisiniinkai/index.html

4、詳細はジャパンサーチ「開発者向け情報」<<https://jpsearch.go.jp/api/introduction/>>を参照。

5、第二次中間取りまとめ（実務者検討委員会、平成31年4月）pp.45-67

https://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/digitalarchive_suisiniinkai/jitumusya/2018/torimatome2.pdf

チの利用条件表示もこの文書を元に設計されているので、関心のある方はぜひ参照いただきたい。なお、複数の連携機関から、ジャパンサーチとの連携がデータの利用条件の明確化の契機になったという意見も寄せられている。

■写真原板データベースとの連携

ジャパンサーチ（試験版）は、日本写真保存センターの協力を受け、2019年10月に「写真原板データベース」（図4）と連携した。これは、同センターで調査した写真原板のうち、53の写真家及び団体の写真原板情報6,753コマ（2020年1月8日現在）を検索、閲覧できるデータベースである。ジャパンサーチにとって、写真を中心に扱うデータベースとの連携は初めてだったこともあり、ジャパンサーチを利用したイベントやSNSを通して、ユーザからは連携を好意的に受け止めるコメントが多く寄せられている。

今回の連携により、写真原板データベースの情報がどのように活用される可能性があるか、考えてみたい。まず一般論として、連携によってジャパンサーチ経由でのアクセス数が増加することが考えられるが、その他に考えられるメリットとして、特に次の2点を挙げたい。

1点目は、ジャパンサーチ上で他の分野の資料との横断検索が可能になることで、資料利用や研究が促進されることである。

写真原板データベースのメタデータの特徴的な項目として、掲載媒体（当該写真が掲載された出版物の巻号及び掲載ページ）の情報が含まれている。また、写真のカテゴリ、被写体画像キーワード、解説等の情報もあり、非常に充実している。これらの情報と、関連する書籍、文化財、美術作品等の情報を一緒に検索できるため、写真資料だけでなく、写真に関する様々な切り口の情報を一度に入手することができる。また、画像検索機能を用いることで、予想外の資料との関連性の発見に



図3 ギャラリーの一例 「もう一つの東京オリンピック」（国立国会図書館作成）より
<https://jpsearch.go.jp/curation/ndl-VGJ20mk11zbk>



図4 写真原板データベース < <http://photo-archive.jp/database/> >

- 6、<https://pro.europeana.eu/>
 写真コレクションのトップページは <https://www.europeana.eu/portal/en/collections/photography>
- 7、<https://github.com/metmuseum/openaccess>

- 8、ジャパンサーチ「開発者向けAPI」でクエリ例を公開している。
<https://jpsearch.go.jp/rdf/sparql/easy/>

つながる可能性がある。

2 点目は、「活かす」機能で紹介したように、ジャパンサーチに集約されたデータが利活用しやすい形式に変換・提供されることで、他のデータベースや情報源とつながったり、ユーザから発見・利用されたりする可能性が高まることである。

他のデータベースとつながる例として具体例を挙げると、ジャパンサーチと海外のデータベース、例えば、欧州の文化資源の統合ポータルである Europeana や米国のメトロポリタン美術館の所蔵作品情報等を、横断検索することができるようになる。

また、データ利活用の例としては、変換時に正規化（＝データ等を一定のルールに基づいて変形すること）されたデータを活かし、データベースの内容や特徴を分析できる点が挙げられる。「ジャパンサーチ利活用スキーマ」では、コンテンツに関する人物・時間・場所等の情報を、昔の地名を今の地名に変換したり、和暦のデータを西暦に統一したりする等の正規化をして、可能な限り表現を揃えている。例えば、写真原板データベースの「撮

影地情報」を正規化したデータを件数が多い順にソートすることで、どこで撮影された写真が多いかを調べることができ、三重県伊勢市が 257 件と最も多く、2 位：埼玉県浦和市（167 件）、3 位：新潟県佐渡市（96 件）、4 位：チェコ・プラハ（85 件）と続くことが分かる（図 5 参照）。同様の分析を、撮影者や撮影年等の切り口から行うことも可能である。

今後、写真原板データベースの優れたコンテンツがより広く知られ、かつ活用されていくために、ジャパ

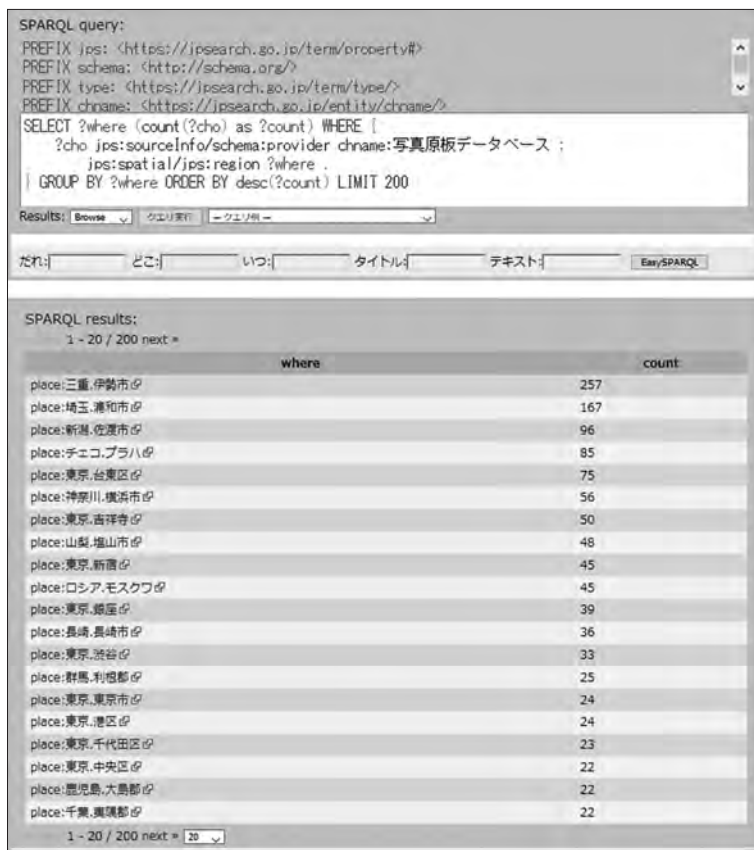


図 5（上）写真原板データベースの場所情報のトップ 20 件を表示するクエリ例
（下）クエリの実行結果一覧

ンサーチとして役に立てることは何か、写真保存センターをはじめとする関係者の方々からのフィードバックをいただきながら、引き続き検討していきたい。



中川 紗央里（なかがわ さおり）

1992 年香川県生まれ。国立国会図書館司書。専門は図書館情報学（デジタルアーカイブ論）。2017 年からジャパンサーチの連携協力を担当。

■「日本写真保存センター」の活動

「ジャパンサーチ」との連携を進めるうえで、「日本写真保存センター」の活動内容をお伝えしますのでご利用ください。

まず日本写真家協会（JPS）のホームページをご覧いただき、その中の「日本写真保存センター」をクリックすると、センターの活動実績や写真原板データベース、資料保存（温度湿度等）、アーカイブについて解説があります。さらに詳細は文化庁委嘱に

よる調査研究の 2007 年度以降の報告書全文を PDF で掲載していますので参照してください。

センターでは、写真原板（フィルム、ガラス乾板等）の収集保存とメタデータの作成、データベースの構築（データベース化）を行い、どなたでも検索・閲覧ができるように努めています。また写真原板の利活用に関しては、必要とされる写真を特定して申込んでいただくことで提供もいたします（撮影者、著作権者の許諾を得た上で）。こうした活動を通して写真の利活用を促進しています。（記／松本徳彦）

第3回「笹本恒子写真賞」受賞記念展 吉永友愛写真展「キリシタンの里 - 祈りの外海」

2019年12月19日(木)～12月25日(水) アイデムフォトギャラリー「シリウス」

第3回笹本恒子写真賞の受賞を記念した、公益社団法人日本写真家協会主催・吉永友愛（ともなり）写真展「キリシタンの里 - 祈りの外海」が2019年12月19日（木）から25日（水）まで、アイデムフォトギャラリー「シリウス」（東京都新宿区）にて開催した。

笹本恒子写真賞は、日本写真家協会が報道写真家として活躍した笹本恒子氏の業績を顕彰し、その精神を受け継ぐ写真家の活動を讃え、助成することを目的として創設された。今年度が3回目の授賞となる。

今年度の受賞作となった「キリシタンの里 - 祈りの外海」は、長崎市の外海（そとめ）地区に今も残るキリシタンによって築きあげられた生活様式や、そこで生きる人たちの日々の姿を記録した作品群で、美しい風景の中で生きる人々の朴訥な姿が見る者に強烈な印象を与える。

「この作品を撮るきっかけになったのは、1977（昭和52）年に仲間たちと、深堀という長崎市南部の集落に撮影に出かけたことでした。撮影をしているうちに、この集落に他とは異なる独特の雰囲気があることに気が付いたのです。家に入れていただくと、そこにはマリアさまの像が飾られている。カルチャーショックを受け、自分自身でもキリシタンのことを勉強して、深堀の撮影を2年の間続けました」キリシタンの里との出会いを、吉永さんはこう振り返る。撮影を続けているうちに、現地の人たちとも親しくなり、撮影は深みを増していった。

「私たちが江戸時代のキリスト教徒への弾圧であるとか、隠れキリシタンについて学校で教えられることは、島原・天草の乱くらいしかないのではないかと思います。けれども、長崎にはあちこちに隠れキリシタンの里があり、独特の文化を築きあげてきました。こ

の作品の舞台になった外海（そとめ）地区もその一つで、ここは迫害を受けた人々が船を使って海の側から辿り着いた場所なのです」。

今日とは異なり、吉永さんが撮影を始めた昭和末期までは、まだ昔日の生活ぶりが随所に色濃く残っていたという。撮影した写真をプリントし、今回の探訪の折にお世話になった人に手渡す。そんな日々が続いた。

「地元の人からも写真を撮り続ける理由を訊かれました。その時には、『この場所の暮らしを記録に残したいからです』と返事をさせていただきました」。いつの日にか、この作品をまとまった形にしたいという思いは、撮影を始めてからおよそ40年の後に、笹本恒子賞受賞という形で結実した。

「撮影を始めた頃は、何故写真を撮るのだ？という目で見られました。けれどもこうして記録を残せたことで、今は地元の人にも喜んでもらえています」と吉永さん。写真ジャーナリズムの神髄が、短い言葉の中に滲み出ている。

（記・撮影／出版広報委員：池口英司）



展示作品をバックに吉永友愛さん



写真展は新宿区の「シリウス」で7日間にわたり開催された

2019 年第 15 回「名取洋之助写真賞」受賞作品写真展

2020 年 1 月 24 日(金) ～ 1 月 30 日(木) 富士フイルムフォトサロン 東京

2019 年第 15 回「名取洋之助写真賞」の受賞者 2 名による受賞作品写真展を、公益社団法人日本写真家協会主催により富士フイルムフォトサロン(東京都港区)で開催した。

名取賞受賞の和田拓海さんの作品「SHIPYARD ～翼の折れた天使たち」は、バングラデシュの首都ダッカで、世界中から運ばれて来る廃船の解体作業に従事する少年たちの姿を中心に撮影したドキュメンタリーフォトである。名取賞奨励賞受賞の藤本いきるさんの作品「おじりなりてい」は、写真学校で出会った年上の友人青木さんがモデル。定年退職後に写真を学び始めた青木さんは、家族に先立たれ、末期がんに罹り死の影を背負いながらも写真を続けた。その彼の 10 年間の日々を追ったドキュメントである。

カナダで出会ったホームレスの人を撮ったのがきっかけで写真を始めたという和田さんは、ギャラリートークで撮影場所の説明、取材開始までの経緯や撮影時のエピソード、1 日 1 ドルで働く少年たちの厳しい現実などを真摯に話された。30 枚の写真の 1 枚 1 枚の裏にあるストーリーを伝えようとする熱のこもった話しぶりに、30 名程の参加者が静かに聞き入った。

タイトルに使った「翼の折れた天使たち」を思いついたエピソードは、特に強く心に残った。撮影した写真をパソコンで見返しているとき、ある少年の写真にインスピレーションを得たという。「その少年が飛び立とうとしてもがいている天使の姿に重なったのです」。ことばの天使が和田さんに舞い降りた瞬間だった。

写真展の会場で和田さんに受賞写真展の感想等の話を伺った。「今までグループ点などで 8 枚ぐらいは展示したことがありますが、今回のように 30 枚の展示は初めてです。次は違うテーマで個展を考えているので、セレクトや構成を考える上でとても役に立つ大切な経験です。また来場者の様々な感想や意見を聞けるのも役に立ちます。感想ノー

トに『私も写真を撮っているが、和田さんの写真を見て涙が出た』と書いてありました。このテーマで撮影して良かったとやりがいを感じました」。

今後どのような写真を撮りたいですかと聞くと、「ストーリーのある報道写真を撮りたいが、アートの要素も大切と考えています。現在は 3 カ国で計 5 つのテーマで取材を続けていますが、それを順次、雑誌や写真展で発表したい。『うまい写真ではなく、すごい写真』を撮りたいと思っています」との返事が返ってきた。

藤本さんとは会うことが出来なかったが、展示された作品からは、末期がんという切迫した状況の中で生きる年上の友人と向き合う芯の強さと覚悟が感じ取れた。

フェイクニュースや巧妙に加工されたフェイクフォトがあふれる今日だからこそ、現場に立ち時間をかけて事実を捉える写真家の役割は重要性を増している。反面、その写真をきちんと発表する機会が減少しているのが現実である。このような時代に「名取洋之助写真賞」とその受賞作品写真展は、今後の活躍が期待される若手写真家たちに大きな励みとなっていると実感した。

(記・撮影／出版広報委員：飯塚明夫)



ギャラリートークでエピソードを語る和田拓海さん



受賞作品を見る来場者

写真の価値

河野和典 KOUNO Kazunori (編集者)

2019年の写真界のビッグニュースと言えば、何といたって田沼武能さんの文化勲章受章であろう。大変喜ばしいことには違いないのだが、文化勲章が1937(昭和12)年に制定されてから実に82年経って初めて写真家に授与されたことには驚く。内閣府のホームページには、「文化勲章は、我が国の文化の発達に関して顕著な功績のあった者に対して授与される勲章です。受章者は、文化審議会に置かれる文化功労者選考分科会に属する委員全員の意見を聴いて文部科学大臣から推薦された者について内閣府賞勲局で審査を行い、閣議に諮り、決定されます。」とある。歴代の文化勲章受章者をみると、学者、日本画および洋画家、小説をはじめとする文学者、歌舞伎などの古典芸能に属する人たちが多い。

◎歴史を記録する貴重な写真

ここで思い出されるのが、日本を代表する写真家のひとりで、木村伊兵衛写真賞をはじめ土門拳賞、日本写真協会賞、紫綬褒章など多くの賞に輝く江成常夫さんがかねてから「写真の地位は、ほかの分野に比べて低くみられていますね」と語られていたことである。

1839年にフランスでルイ・ジャック・マンデ・ダゲールが銀メッキを施した銅板を感光材料として使用するダゲレオタイプを発明し、ほぼ同時期にイギリスでウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボットが硝酸銀溶液を染み込ませた紙を使用するネガ・ポジ方式のカロタイプを発明したこと誕生した写真であるが、またたく間に世界中を席卷し、日本へは1848年に長崎の貿易商・上野俊之丞がオランダ船からダゲレオタイプ一式を輸入して薩摩藩の島津斉彬に献上したのがはじまりと言われている。いまさら言うまでもないが、それ以降、日本でも海外でも、有名無名を問わず無数の写真が撮られ、今日までそれぞれの地域において貴重な歴史を記録してきている。フランスではウジェーヌ・アッジェ(1857-1927、フランス)のように、20世紀初頭の失われゆくパリの街並み、建築、物売り、大道芸人などを精密なプリントで記録表現したり、アメリカではアルフレッド・スティーグリッツ(1864-1946、アメリカ)のように、カメラの機能に即したストレート・フォトグラフィーを提唱し、写真を新たな芸術表現として位置づけ、「近代写真の父」と呼ばれた世界的に名高い写真家も存在している。もちろん“カメラ王国”とも“写真王国”とも言われる日本にも、木村伊兵衛や土門拳を筆頭に幾多の著名な写真家がいる。「写真なくして歴史を具体的に知ることはできない」と言っても過言ではない。

余談になるが、ノンフィクション作家の故・黒岩比佐子さんがその著書『編集者国木田独歩の時代』(2007年、角川選書)で明らかにした驚きのひとつに、1900年代はじめに独歩が編集していた



親授式後、宮殿前庭での文化勲章受章者の記念写真(左から)吉野章、甘利俊一、田沼武能、野村萬、佐々木毅、坂口志文の6氏。2019年11月3日

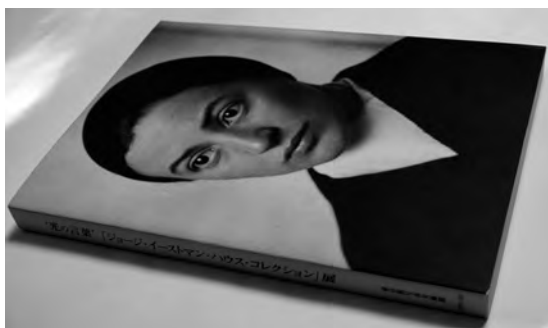
撮影：朝日新聞社提供

『近時画報』や『戦時画報』で、それまでの挿絵に加えていち早く写真を採用し、しかもそこに日本初と言っても良い女性写真師・日野水ユキエを採用したという事実にとどりに着いたことであったが、それはとりもなおさず、それまでの絵画に取って代わる写真の精緻で忠実な記録性と、独歩の先見性にほかならないだろう。

◎海外と日本の「写真の保存」

日本と海外の写真に対する評価の差、それを如実に物語るのは、写真を保存する国の姿勢にある。まず、象徴的に思い出されるのが、2015年秋に来日したメキシコの国立写真美術館 FOTOTECA (フォトテカ) の館長ファン・カルロス・バルデス氏が在日メキシコ大使館で行った講演会で語ったことである。

「FOTOTECA は1845年から今日までの写真を収集し、保存しています。収集した写真は現在約100万点あり、その数は増え続けています。スタッフ62人は様々な部門に分かれて仕事をしています。例えば、コレクションの保管室では、光・温度・湿度を管理して写真を保管しています。なお、これらの写真は研究者に限



東京都写真美術館で1995年に開催された「光の言葉「ジョージ・イーストマン・ハウス・コレクション」展」図録
表紙写真はアルフレッド・スティーグリッツ〈ドロシー・ノーマンの肖像〉1932年

り、特別に出して見せることができます。修復部門では、年間3万点ほどの写真を修復しています。収集された作品は分類され、目録に登録されます。収集に際しては、メキシコの歴史の一部を保存することになりますので1枚1枚、研究部門で研究しています。画像のデジタル化は1990年頃に始め、現在では約60万枚のデータが検索可能です。写真制作部門では、古いネガやプリントを撮り直しています。その他に、広報活動と教育の部門もあり、写真の普及もFOTOTECAの必要な役割だと考えています。』（『日本写真年鑑2016』より）

また、「フランスには文化省所管の写真保存センター（Mediatheque Patrimoniale Arc hive Photographique）があり、1851年以降の『写真ガラス原板』を保存し、活用しています。ル・グレイ、ナダールやアッジェ、ラルティエグ、ケルテスなど日本でも知られている写真家の写真原板が数百万点も収蔵されています。」という。（『日本写真保存センター』調べ）

1995年11月から翌年の1月にかけて東京都写真美術館で開催された「光の言葉「ジョージ・イーストマン・ハウス・コレクション」展」における図録には、「ここに、光の言葉で書かれた名作が集まった。ジョージ・イーストマン・ハウス国際写真博物館の数百万の所蔵作品から選んだ名作である。」とあり、別項には「新しい資料館は1989年1月に一般公開され、写真40万枚、ネガ15万枚、映画1万5千本、スチール写真300万枚、書籍4万冊、装置など機器類1万5千点を収蔵している。」とある。

いっぽう日本では、日本写真家協会が管理・運営し、2007年から文化庁の委嘱事業として認められ本格的に活動を開始した「日本写真保存センター」があり、相模原の国立映画アーカイブ（旧東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館）にある収蔵棟の一部（500㎡）が貸与され、「日本写真保存センター」の沿革によれば、2012年の第1回目の写真原板8,901本収蔵から2019年の第17回目の3,216本まで、これまでに収蔵さ

れた写真原板は88,404本以上になるという。また「日本写真保存センター」には、収集・保存した写真原板を広く活用することを目的とした『写真原板データベース』があり、現在53の写真家および団体の6,753コマの写真原板情報を検索・閲覧できるという。

さらに、日本における唯一の写真美術館である東京都写真美術館では2018年発行の東京都写真美術館概要によれば、2018年3月現在の収集点数は34,673点で、内訳は国内写真作品22,810点、海外写真作品5,695点、映像作品資料2,443点、写真資料3,725点となっている。

このほか東京国立近代美術館をはじめ全国各地の美術館においても各種写真がコレクションされているのは周知のことであるが、その実体はどの程度集約されているかは分からない。

◎令和元年をこれからの写真元年に

2019（令和元）年12月11日、第45回「日本写真家協会賞」贈呈式、第15回「名取洋之助写真賞」授賞式、および第3回「笹本恒子写真賞」授賞式、そしてJPS恒例の2019年度会員相互祝賀会が東京・市ヶ谷のアルカディアで開催されたのだが、その祝賀会冒頭、田沼さんは、「この章は私個人というよりも写真界全体で受章したものです」という主旨のスピーチをされた。さもありなん、田沼さんの師匠・木村伊兵衛をはじめ、土門拳、植田正治、渡辺義雄、石元泰博などなど錚々たる偉大な先輩を前にして、1937（昭和12）年に制定された文化勲章を写真家として初めて受章されたのである。その小はさしきはないであろう、と察せられた。

しかし、これからの大きな問題は、いかに貴重な写真を保存していくかということにある。「日本写真保存センター」を国の全面的バックを受けて、いや、国家的事業として国立の「日本写真保存センター」にしていかなければ、「カメラ王国」「写真王国」も笑

いぐさとなろう。今回の田沼さんの受章が、写真の価値をさらに発展させる第一歩になればと願うばかりである。



日本写真家協会が管理・運営する「日本写真保存センター」設立を呼びかけた冊子No.2
表紙は土門拳「近藤勇と鞍馬天狗」

<座談会> 創立 70 周年記念写真展「日本の現代写真 1985～2015」

表現の多様・多極化した時代



出席者：飯沢耕太郎（評論家、「日本の現代写真」編纂委員）、上野 修（評論家、「日本の現代写真」編纂委員）、多田亜生（編集者、「日本の現代写真」編纂委員）、鳥原 学（評論家、「日本の現代写真」編纂委員）、田沼武能（常務理事、「日本の現代写真」監修）

司 会：松本徳彦（副会長、「日本の現代写真」編纂委員）

進 行：JPS 出版広報委員会

2019 年 10 月 22 日（火）於：JCII 会議室

■ 90 年初頭の「写真終焉論」

松本 日本写真家協会創立 70 周年記念事業である『日本の現代写真 1985～2015』に関する懇談会も、今日で 3 回を迎えました。写真集の編纂も進みつつありますが、再度、作品の見直しも必要かと感じています。というのも、本というのは、作家の命が記録されるわけですから。そういう意味では、それぞれの作家の代表作、あるいは代表作に近いものを取り上げたほうがいいだろうと感じます。

今日は主に 1995 年以降を中心に話を進めたいのですが、この時期、デジタルカメラがどんどん進化して広まっていった。ちょうどフィルムからデジタルに変わる時期に当たります。プロの写真家がデジタルに移行するのは 2000 年以降だと思います。多少とまどいながらも、新しいメディアにどう挑戦していったのかも、ぜひお話いただければと思います。

鳥原 デジタル化もそうですが、この時期、美術館のオープンもひじょうに多かった。95 年以降は、出版メディアが右肩下がりになっていくのと反比例するよ



松本徳彦氏

うに、デジタルでの展開と美術館での展開が増え、前面に出ていく状況だったと思います。平成初期の資料を読んでいると、飯沢さんや上野さんもお書きになっていますが、デジタルカメラはどう使うかより、アーカイブを作ることが大事だという論が、90 年初頭にあったみたいです。

飯沢 えっ、そんなこと書いていたっけ（笑）。

鳥原 当時、写真が終焉を迎えたという論調がけっこう一般的だった。

飯沢 89 年にダゲレオタイプ 150 周年という大イベントがあって、それをきっかけに写真の歴史を総括するという動きがあったんですよ。

上野 この前読み返したら、伊藤俊治さんなども「非物質的なメディアへの時代の移行」と書いていました。

鳥原 いわゆる写真のフォーマリズムみたいなものがなくなって、個別化されたものがたくさん出てくるだろう。それを包括して、蓄積をアーカイブ化するには、デジタルがふさわしい、という議論もありました。

上野 当時は、漠然とした話だったんでしょうね。

鳥原 まだインターネットもなかった時代ですから。デジタルカメラも、どうやって使っているかわからない状況があった。それが 95 年に Windows95 が出て、パソコンにブラウザが装備され、実用的なカメラとしてカシオの QV - 10 が登場する。

飯沢 そこが分岐点でしょう。それまでデジタルカメラをどう捉えたらいいかという具体的なイメージを、

みんなそれほど持てなかった。記録メディアはCD-ROMで、それを使って作った五味彬さんの写真集『YELLOWs』などが出て注目を浴びた。そして96年のアトランタオリンピックが大きな転機となって、デジタルが本格的に始まった。

キヤノンもニコンもそこでデジタルカメラを出して、オリンピックの公用カメラにデジタルが使われ出した。同時期、新聞社の暗室がなくなったわけです。鳥原 新聞社はその前から、ホットなプロセスからコールドプロセスに変わり、デジタルで製版する時代にきていた。そういう下地が整っていた上で、デジタルカメラの時代が本格的に来るわけです。

■ 90年代後半から変化が急速に

飯沢 デジタルカメラが本格的に普及し始めたのは、90年代後半以降ですね。

鳥原 そうですね。QV-10はまだ、25万画素しかないですし。

上野 そもそもパソコンが、まだそれほど普及していなかった。僕は99年にコンパクトデジタルカメラを買いましたが、けっこう早いほうでした。写メールで注目されたカメラ付き携帯電話J-SH04も買いましたが、そんなオモチャを買うなんてとバカにされました(笑)。

鳥原 2001年、バブル崩壊後の不景気を跳ね飛ばす意味もあって、政府がe-Japanという構想を打ち出します。これによってADSLが全国に普及し、インフラが整うわけです。僕の記憶では、デジタルカメラを初めて現場で使い始めたのは富山治夫さんです。富山さんは永平寺の撮影の際、暗いので、デジタルカメラを取り入れた。それが97年頃だったと思います。

飯沢 同じ頃にたぶん東松照明さんや川田喜久治さんが、全面的にデジタル化を開始した。その世代の写真家のうち何人かが、すごく早くデジタルカメラの可能性にチャレンジしていた。

鳥原 富山さんがよく言っていました、最初に実用化したのはプリクラなんだ、と。95年に登場したプリクラは、デジタルムービーから画像を落とすという

ものでした。シャープの写メールも、プリクラをヒントに開発したと言われています。そういう底辺の広がりと、社会的実用の広がりが、パラレルになっている。それが如実に表われるのが、97、8年です。雑誌がピークを迎え、そこから落ちていき、2000年に入ってインフラを支えるプラットフォーム企業が出てくる。

2004年、写真共有サイトのflickerが出てきますが、これは写真を共有するサイトとして当時世界最大のものでした。

飯沢 日本では同じ年にmixiが始まった。

鳥原 いわゆるウェブ2.0と言われる時代が来た。企業が、みんなが集まって写真で交流できるサイトを作り始めたことで、状況が大きく変わってきました。出版文化が右肩下がりになると、大手出版社が主催する写真賞が消える。かわりに、小出版社がたくさん出てきました。デジタルのいいところは、印刷コストが低減した、ということです。一概にデジタルになったから印刷文化がダメになったわけではなくて、今もブックフェアなどが活況を呈しているのは、印刷がひじょうに手近になって、数百部単位での印刷が可能になった。

■ デジタルは、はたして「誰でも撮れる」のか

飯沢 田沼さんは、いつ頃からデジタルカメラになりましたか？

田沼 使い始めたのは、わりと早いんです。というのも、僕は『アサヒカメラ』でニューフェースのページを担当していたので、新しい機種はすべて試してみる。自分自身がデジタルに切り替えていったのは、2005年から10年の間です。ちょうど世の中が、デジタル主流になる時代だと思います。多くの写真家はそのあたりで移行したんじゃないでしょうか。カメラ自体も、



飯沢耕太郎 氏



森山大道 「下高井戸のタイツ」 1987年



星野道夫 「夕暮れの極北の河を渡るカリブー」 1988年

その時代にすごく進化した。それまでは、半分オモチャといったら語弊があるけれど、フィルムカメラの他にデジタルを持ち歩いて、オモチャをテストしていた、という時代です。

飯沢 これは写真家の方たちそれぞれによって違うとは思いますが、カメラがアナログからデジタルに変わること、仕事のあり方や表現のあり方において、具体的にどういう変化がありましたか？

田沼 僕は、デジタルもフィルムもそんなに変わるものではないという言い方をずっとしてきました。ただ、デジタル化が進むことによってカメラ自体が一般化し、大衆化していくわけです。昔は、写真が写せるだけで「先生」と言われましたが（笑）、誰でも写せる時代が来て、写真家が経済的に苦しくなっていく。いまや新聞の投稿写真は、ほとんどスマホによるものです。

鳥原 500万画素を超えると、実用に耐えられるようになる。何か事故や事件が起きたとき、写真家はだいたい後から行くことになります。たまたま現場にいた人が、スマホで写真を撮れるような時代になった。YouTube も、インドネシアのアチエの津波の際、プロのカメラマンはいなかったけれど、その場にいた素人が携帯で動画を撮り、それをCNNなども採用した。そこからYouTubeなどのプラットフォームが、大きな社会的意味を持つようになったわけです。

田沼 フィルムは撮ってすぐ見るわけにいかない。熟成時間があってもものを見たわけだけど、デジタルになって現場でその場で確認できるようになったのは大きな違いですね。

鳥原 ただ、はたして誰でも撮れるのか。たぶん撮れないだろうということが、最近分かってきた。写真学校の生徒数が、2000年代のガールズ写真同時受賞の



鳥原 学 氏

頃にピークを迎え、その後がた減りするんですよ。ところが最近また、上がってきている。それは、インスタグラムなどの普及でみんなが写真を撮るようになった一方で、やはりビジュアルコミュニケーションの専門家がちゃんと撮らないと訴求力が弱いということが明らかになってきた。たとえばネットで商品を販売するサイトなどでもカメラマンを募集し、写真学校を出てそういうところに就職する生徒もいる。

それまでは写真学校や写真の大学を出れば、まず広告があって、報道の現場があった。報道の現場がなくなった代わりに、一般の人たちの間でいい写真を撮ってほしいという需要も増えています。フォトクリエイトという会社では、たとえば社交ダンスを専門に撮影するカメラマンを、ダンス競技会に派遣する。撮った写真をネットに上げて、買ってもらう、というビジネスがあります。

田沼 その一番大規模なのが、東京マラソンですね。

鳥原 そういうところに、プロのカメラマンが出向くようになった。あと、ロケーションウェディングとか、ライフイベントに寄り添った写真も増えています。

田沼 フィルムの時代は、写真家は創造性を背景にした仕事だったけれど、ある時期から職人的な仕事になっていった。でも僕自身は、もう少しすると、また変わると思います。写真家でないと撮れないものがあると分かってくるし、写真家の存在がまた確立すると思います。やっぱり、プロが撮った写真とアマチュアの写真は違うと認識してもらわないと困るので。

ちょっと危惧しているのは、経産省がバックアップし、観光写真をタダで使えるという取り組みがある。それも過渡期の問題かとは思いますが、過渡期の間に写真家人口が減ってしまうのが悩みです。

鳥原 2006年に、PIXTAが登場します。これはアマチュアが写真を撮影して副業にするというもので、ビジネスの裾野は確実に広がっている。2008年にはEOS-5D Mark IIが出て、動画が撮れるようになった。今は静止画と動画の両方が撮れて、初めてカメラマンだというふうに変わりつつありますね。



上田義彦 「AMAGATSU 1990」 1990 年



長島有里枝 「Self-portrait(family#1)」 1993 年



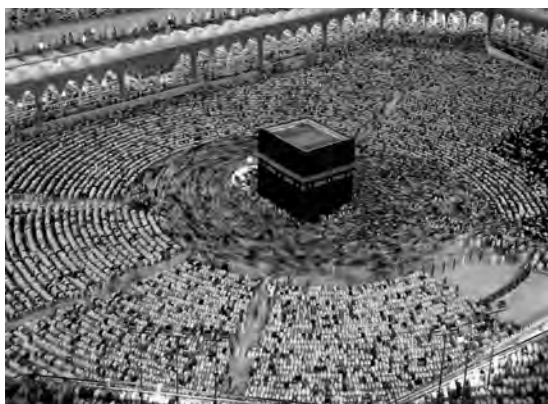
■ アート化とデジタル化がパラレルに進行

飯沢 話を戻しますが、1995年から2005年くらいの間に、デジタルカメラの技術的な確立と普及があります。先ほどから話が出ているように、そのことによってある意味、均質化という状況が片方にある。もう一方で、冒頭で鳥原さんがおっしゃったように、この時期は写真美術館が各地にでき、写真をアート作品として扱うギャラリーも増えていった。アート化とデジタル化がパラレルに進行する時期であることは、間違いありません。そのなかで、アーティストとしての写真家が社会的なレベルで認知されてくるのが、まさにこの時代ではないかと思います。

東京国立近代美術館の写真部門が93年にでき、94年に奈良写真美術館、95年に東京都写真美術館が開館する。それ以前から土門拳記念館はありましたが、植田正治写真美術館や、奈良の場合は入江泰吉とか、個人の名前に関したものが全国レベルでできあがってくる。要するに、写真家を固有名詞化させて、作家として検証していこうという動きが出てくるのがこの時期ですね。

鳥原 ただこの後、東京都写真美術館の場合、石原都政になって潰すか潰さないかというところまで行っ

飯沢 入場者数が減ったんですね。それを救ったのが2000年に館長に就任した福原義春さんです。彼は企業家なので、経営者的な発想で改革した。



野町和嘉 「メッカ巡礼」 1995年

田沼 石原都知事の時代は、収集予算もゼロになり、ひじょうに厳しかった。福原さんは経団連を巻き込み、スポンサーを集めたわけです。

鳥原 もうひとつよかったのは、福原館長時代、収蔵作品による個展が開かれるようになった。けっこういいものを所蔵しているので、多くの人を楽しめる内容でした。

飯沢 おかげで年間10万人くらいに落ち込んでいた入場者数が、40万人くらいになった。

鳥原 それと、日本の写真家が海外で評価されるようになったのが97、8年くらいから。その影響も大きいですね。たとえば森山大道さんがパリのカルティエ現代美術財団で個展をやったり。

飯沢 荒木経惟さんがウィーンで展覧会をやるとか。

鳥原 そういう成果もあって、2008年のパリフォトでは日本特集が行われた。

多田 2008年のパリフォト会場で紹介された日本人作家は、のべ120名くらいです。

飯沢 日本の写真の独自性が海外で評価されるようになったのは、確かにこの時代でしょうね。

鳥原 ひとつには、インターネットの普及が大きい。インターネットは、今ある写真を流通させることとともに、古い写真の発掘にもものすごく貢献した。また、インターネットでさまざまな美術館の写真コレクションを見ることができる。それが、古い写真の発見や評価にもつながっている。

上野 やはり2000年頃にGoogleが出てきてから、状況が変わりましたね。それまでの検索エンジンでは、コンテンツがあっても、簡単にはたどりつけなかった。今はググれば、すぐ出てきますから。

鳥原 ただデジタル化とともに、あまりプリントしなくなる、という流れがあります。



田沼 武能氏



広川泰士 「BABEL ORDINARY LANDSCAPE #4」 2002年

田沼 それが困る。

鳥原 ネットで完結する世界が生まれたおかげで、写真が大きく変わったかもしれませんが。もうひとつ気になるのは、デジタル化になって、1冊あたりの写真量が増えていませんか？

飯沢 それはどうだろう。昔も分厚い写真集はあったし。

上野 ただ、印刷コストが下がったおかげで、何百万円も使って、写真集に自分のすべてを賭ける、みたいな意識は、明らかに変わっていったでしょう。逆に言うと、写真集に凝縮できた時代は、幸せだったのかもしれない。

飯沢 以前は、出版社が間に入らなくては写真集が作れなかった。だから高いハードルがあり、それを乗り越えて初めて作れたわけです。その壁がなくなり、誰でもどこでも写真集を作れるようになると、当然、数が増えます。でもある意味、インフレ状態とも言える。自費出版写真集は一見華やかに展開しているようだけど、ここにきて、どうも足元がやや揺らぎ始めている。

鳥原 展覧会も、ものすごく増えました。平成の初めは、コマーシャル写真ギャラリーは3つくらいしかなかったけれど、今は10いくつある。自主ギャラリーも増えましたし。

飯沢 もうひとつは、カフェギャラリーと本屋と一緒にするなど、異業種とギャラリーがくっついたものが増えている。

上野 昔はシリアスな写真展は月に数件探すのがやっとでした。今は、写真を展示する場所がたくさんでき、写真集も簡単に出版できるようになったけれど、その結果どうなったのか。公募展や登竜门的な賞も増えたし。

飯沢 公募展の持っている影響力は、2000年以降、低下しているという印象を持っています。90年代の「写真新世紀」や「ひとつば展」などはエネルギーが結集していたし、社会的に与えた影響はかなり大きか



多田 亜生 氏

った気がします。両方とも木村伊兵衛写真賞を何人も出しているし。ところが実感として感じるのは、2000年以降、応募される作品に熱がなくなってくる。

上野 たとえば、飯沢さんが95年に創刊した『déjà-vu』（デジャ＝ヴュ）という雑誌を見直すと、その後の企画のアイデアの原型は、ほとんど『déjà-vu』で出ている。みんながハイクオリティな写真雑誌を見たいと言っていて、それが具現化した。

飯沢 『déjà-vu』がなくなった後、いろいろな雑誌が出たけれど、エネルギー的にどうなのか、ちょっと疑問です。

田沼 多田さんは海外の出版社とも、写真集を作ってこられたんですね。

多田 岩波書店では、海外の写真家を海外の出版社と共同で出版していくという事業が、80年から始まりました。とくに 85年以降、ひとつには出版マーケットが縮まっていった。そこで海外と協力してマーケットを開拓しようということで、国際共同出版というのを行ったわけです。

鳥原 具体的なお仕事としては？

多田 たとえばアンドレ・ケルテスの写真集を岩波書店が作り、フランス、ドイツ、イタリア、アメリカの出版社に働きかけて、共同で出版した。そういう動きが、85年から10年くらい続きました。

鳥原 岩波書店が、『日本の写真家』シリーズを出したのは、いつ頃でしたっけ。

多田 98年からです。

飯沢 40人くらいの写真家を選んで、1人1冊の写真集を作ろう、と。僕も編集に参加しましたが、あのシリーズの出版も、作家主義の流れですね。

鳥原 写真美術館ができていく流れの中で、日本の写真の見直しがけっこう行われた。そういうものとリンクしている気がします。

■ 時代と社会の流れで写真のありようも変わる

上野 もう一度85年から俯瞰してみると、85年に国際科学技術博覧会に併せてつくば写真美術館が半年間だけ運営された。作家主義的な見方がここで確立し、



前川 貴行 「争うハクトウワシ」 2008 年



林 典子 「キルギスの誘拐結婚」 2012 年

かかわった多くの人が第一線で現場に入っていた。鳥原 それこそ JPS の活動で著作権が確立して、ドキュメンタリーの人たちも作家としての意識が強まってきた。

田沼 やはり、時代と社会の流れで、写真のありようも変わっていく。ドキュメンタリーの時代があり、その次にコマーシャルの時代があり、自然主義的な写真、それから現代アートに属する作家も出てきた。写真そのものが、誰でも簡単によく写るという時代から抜け出していくための時代性が、そこにあるのではないかと思います。今回の写真展と写真集ではわりと、新しい人たちも入っていますが、やはり時代によって変わってきているというのははっきり出ている。それを出さないと、現代写真史にはならないだろうなと思っています。

鳥原 デジタル化によってもっとも恩恵を受けたのは、ネイチャーフォトの分野です。ネイチャーフォトの撮影範囲が、圧倒的に広がりましたから。星野道夫さんはデジタルの前に亡くなっていますが、その後の岩合光昭さんや今森光彦さんなどの展開を見ていると、明らかにデジタルでないと撮れない対象を捉えている。ジャンルでいえば、天体もデジタルのおかげでまったく変わった。新しい世界観がそこに提示されているかどうかは、疑問がありますが。

田沼 今まで撮れなかったものが撮れる、表現できるようになったというのは、大きいのではないのでしょうか。

鳥原 画素数が増え、感度が上がったことで、暗所撮影や超クローズアップやトリミングの自由がある。あるいは鳥にカメラをつけて放して撮るとか。

飯沢 赤外線センサーやドローンを使ったり。ただ、それが実際の表現の世界として新たな領域まで行っているかという、そうでもない。



上野 修氏

上野 ドローンの映像も、最初は驚きがあるけれど、あっという間に飽きてしまいますから。

田沼 技術的な面白さでいくと、飽きてしまう。やはり内容が大事です。

■ ジェンダーによる表現の違い

上野 先ほど田沼先生がおっしゃったように、銀塩とデジタルで撮る時のスタンスは変わらない、と。現状の作品概念は、やはりフィルム時代の広義のアナログをベースにしている気がします。鳥原さんがおっしゃったように、ライフイベントの写真などを、こういった文脈ですくいとれるかという……。

鳥原 たぶんもう少し、時間がかかるでしょう。新しい技術や分野というのは、少し成長を待たなくては行けない。

長島有里枝さんの家族スード等、女性の展開を見ていると、やはりライフイベントをかなり積極的にテーマにしようとしています。男性のライフイベントは、たかが知れていますから。就職して結婚しようが、あまり変わらない。でも女性は、妊娠出産なども大きく作用するし、年齢によってライフステージが変わる。

飯沢 90年代に女性写真家が多く出てきて、2001年に長島さんとHIROMIXさん、蜷川実花さんの3人が木村伊兵衛写真賞を受賞したのは象徴的です。ライフイベントというより、それを含めた現実世界を相手にするような女性写真家の取り組みというのは、質的に変わってきている。

鳥原 最初は私写真だったんですね。

飯沢 そのうち、私写真を超えていった。

鳥原 以前、女性写真家について「当時者としての視点だ」と書いたことがあります。今の社会構造のなかのどこに自分がいるのかと問いかけるとような写真で、それを支持しているのが、同じ当事者としての視点を持っている女性という、ひとつの構造が見えてきます。

飯沢 いわゆる「ガリーフォト」の象徴であった長島さん自身、変わりましたね。自分の記憶や家族といった問題を、それまでのドキュメンタリースタイルから、より構造的に捉えるようになっている。



北野 謙 「our face, 宮川町「京おどり」で舞う舞妓さん」 2013年
舞妓さん30人を重ねた肖像



白鳥真太郎 「Yellow B」 2014年

鳥原 それを意識的に始めたのは、おそらく石内都さんでしょう。『1・9・4・7』という写真集では、自分と同じ1947年生まれの女性たちの手足を撮る。その後、『マザーズ 2000 - 2005 未来の刻印』『ヒロシマ』など、常に女性としての視点で作品を展開し、それが国際的に評価された。

飯沢 このところ、伊奈信男賞というニコンサロンの最高賞が、4年くらい続けて女性写真家ですよ。2016年度が藤岡亜弥さんで17年度が菅野ぱんださん、18年度がインベカヨリ★さん、19年度が岩根愛さん。彼女たちの写真のあり方は、男性よりも能動的でロジカルです。

鳥原 たぶん女性写真家たちは、男性社会の中で鍛えられたんでしょう。多くの女性写真家にとって、^①ガーリーフォト、というのは傷なんです。実際にインタビューすると、この呼称が嫌だという女性写真家が多い。そのことが、彼女たちを育てたんだと思います。私の写真はガーリーフォトと呼ばれるようなものではないはずだ、と。どちらにせよ、男側も時代を見直さなくてはいいなと思います。

上野 写真の歴史は、ある意味、すべて非対称性の産物でもある。カメラが身近になるにつれ、それまで撮られる側だった人間が撮る側にまわる。そうすると、今までの欺瞞も露わになるわけです。

鳥原 デジタルによって、パンドラの箱が開いたのかもしれない。

■ 写真体験を通しての自己の変革

上野 今の時代、何を基盤に写真を見ていけばいいんでしょう。

飯沢 インターネットに上げられた写真をすべてフォローすることは不可能です。

上野 それにネットはフィジカルじゃないから、経験として残っていかないですよ。こういうことを言うと、「昔はよかった」みたいになりますが、探していた本をあそこの本屋でやっと見つけたとか、写真展も見たか見ないかで評論も変わった。今はネットに情報

があるから、記述もフラット化している。

鳥原 作家より一般の人がやっていることのほうが、面白いケースもある。みんながやっていることを洗練させたものが、作品として出てくる。そういう社会の中で写真はどうか、これからの課題でしょうね。

飯沢 今SNSで大量に拡散されている写真の中から、洗練されたものが出てくる可能性もあると考えているんですね。

鳥原 そう思います。

飯沢 わりと、ポジティブに考えているんですね。

上野 写真というのは、見せるだけではない。撮ることで自身が変わる、自己に関する技術であり、実践でもある。歴史的にも、多くのアマチュアが、それに惹かれてきた。そういう意味では、今、さらに多くの人々が、写真的体験を通して自己を変えつつあるのが日常になっている。それが作品として残るかどうかは、全く別ですが。

鳥原 ヴィヴィアン・マイヤーみたいな人を^②発見、する人がいて、死後、いきなり「写真家」の扱いを受けるようなケースもある。同時代の予想を超えた範囲から新しい人も作品も登場する。それを写真の歴史が示していると思うからです。

上野 世界報道写真展に行くと、全部HDRがかかっているみたいで、写真がよすぎて印象に残らない。できごとに直面し、それをダイレクトに身体性に伝えていくメディアではなくなっている気がします。デジタルはそれをほんの数時間で、露わにしてしまった。

鳥原 今、フィルムに注目する人が出てきたのは、そういうことでしょうか。

飯沢 身体性への回帰かもしれません。

松本 フィルムからデジタルに変わったことで、何が起きたのか。また社会環境によって、写真の立ち位置が変わってきたことが今日よく分かりました。それによって、作られる写真も変わっていくそのことが、今回選ばれた写真にも如実に表われていると思います。

——本日はどうもありがとうございました。

(構成／篠藤ゆり、撮影／出版広報委員：伏見介介)



林 明輝 「ドローンで迫った吹き割りの滝」 2014年



竹沢うるま 「Kor La」 2015年

おめでとうございます

——この度は「文化勲章」受章おめでとうございます。長きにわたって写真家としての活動が継続できたのは「健康であること」が大きいように思いますが、心がけていることなどあるのでしょうか。

田沼：最初から身体が丈夫だったわけではないんです。小学校低学年の頃は病気がちで休むことが多く、母がいつも学校に謝りに行っていたくらいでした。しかし小学3年生の頃から体質が変わり、それ以後は中学校卒業まで休みなく通うことができました。健康のために何か特別なことをしているわけではないんです。強いて言うならば、写真を撮り続けていることが健康につながっているのではないのでしょうか。今も下調べをしていて夜更かししてしまうときもありますが、自分が撮りたいものを撮るために早起きすることは苦になりません。JPS会長時代、午前中に撮影してから午後の会議に出ることも普通にありましたし、それは今も変わっていません。ただし今年、運転免許を返納しました。3～4年前から運転はしていなかったのですが、事故を起こしたら家族や周囲の人に迷惑をかけてしまうので。撮り続けている武蔵野の撮影の際は、友人達の車に乗せてもらったり、電車やバスなどの公共交通機関を利用しています。

——写真家として優れた作品を世に出し続けてこられました。それぞれのテーマにどのようにして出会ったのでしょうか。また続ける上でのさまざまな道程など教えてください。

田沼：「世界の子ども」を撮るきつ

かけとなったのは、タイムライフ社の研修休暇でパリを訪れたときの体験が基になっています。日曜日の朝、ブローニュの森に行ったら、森に向かって一目散に駆けていく子ども達の姿を見て思わずシャッターを切ったのですが、このときちょうど自分のライフワークを何にするか？を考えていたときに「世界の子ども」をテーマにできないかと甘く考えたのです。最初はライフの仕事のついでに撮ればいいと考えていましたが、ロンドンに行っていざ子ども達を撮ろうとしたら、日本のように路地で遊んでいるわけではない。アパートメントに囲まれた中庭で遊んでいて、そこに入るためには許可がいる。自分の作品として撮るためには何かのついでではなく、そのために自分が動かなければいけないとはっきり認識しフリーになりました。

そして今も、武蔵野を撮り続けています。下町育ちの私にはふるさとと呼べる場所がないだけに、武蔵野に対する憧れをずっと持ち続けていて、旧武蔵国の範囲だった埼玉県、東京都、そして神奈川県のエリアを撮り続けています。広範囲を移動しながら撮らなければいけませんが、ライフワークとして考えたときには国内にいるときは武蔵野、海外に出たときは世界の子ども、と2つのテーマを持つことで、年間を通じて作品を撮り続けることができます。



写真家初の「文化勲章」受章



田沼 武能 さん

(日本写真家協会常務理事、
日本写真著作権協会会長)

——JPSも創立70周年を迎える一方で、草創期のことを知る会員がほとんどいなくなってしまうました。創立当時の思いや写真著作権のことなど、次の世代へと伝えたいことがありましたらお願いします。

田沼：著作権が死後起算に変わったのは、写真家は創作をしているということが認められるようになったからです。これは私たちJPSが言い出してから認めてもらうまでに44年かかりました。映画は機械を通さなければ見られませんが、写真ならいつでも見ることができます。それこそが写真の特色であり、主役だけでなく周りの景色に情報が含まれている、そこが大事なんです。どんな優れた小説家でも、それを描写することはできません。今を100年後の未来に伝えることができるのは写真だけです。スマホの時代になり、写真

の持つ意味を軽く考える風潮も強いようですが、撮った作品をきちんとプリントして残していかなないと未来に伝わりません。名取洋之助写真賞を創設したのも「ドキュメントを撮る人がいなくなったら困る」からであって、しっかり撮った写真を残す必要性や重要性を業界内だけでなく、一般の方にも広く知ってもらう必要があります。写真著作権も運動を続けてきたから得られたもので、最初からあったわけではありません。これからも写真家が自主的に動き、写真を取り巻く環境をみんなで良くしていこうという気持ちを忘れないでほしいと思います。

——今日はどうもありがとうございました。

(2019年12月27日 田沼事務所にて、聞き手／出版
広報委員・小城崇史、撮影／出版広報委員・川上卓也)

著作権法改正で「授業目的公衆送信補償金制度」が決定。 補償金を分配する「教育利用写真アーカイブ」がスタート!

2018 年の著作権法改正で学校などでの「教育目的で著作物を無償利用できる範囲」がデジタル機器を使用する公衆送信まで拡大された。そして、この改正による著作権者への影響を補充する目的で「授業目的公衆送信補償金制度」が新設された。日本写真著作権協会 (JPCA) は、この補償金の制度に対応するために「教育利用写真アーカイブ」を準備中。瀬尾太一 JPCA 常務理事にシステムの概要を取材した。 (著作権委員会)

Q. 教育利用写真アーカイブとは、どのようなものですか？

著作権法には、写真を教育目的で使用する場合には著作権が制限されるというルールがあります。「公表された著作物 (写真) を学校の授業などで使用する場合には、必要と認められる範囲内で教師や生徒などが無償で利用できる (著作権法 35 条)」とされています。

今までも教育目的の写真の使用は無償とされていたのですが、2018 年 5 月の著作権法改正でデジタルデータの公衆送信も可能になりました。この権利制限の拡張部分に対して著作権者に補償金 (授業目的公衆送信補償金) が支払われることが決まり、「授業目的公衆送信補償金制度」がスタートします。しかし、教育目的での写真使用は雑誌や書籍、インターネットなどからの利用が多いため、写真の使用履歴を把握できず個々の写真家に公正に補償金を支払うことが難しい状態にあります。

そこで、教育現場で使う写真を無料でダウンロードできる「教育利用写真アーカイブ」を作ることになりました。写真家が登録した写真を教育関係者が無料でダウンロードできる仕組みです。著作権法で認められた教育目的の使用に該当するため料金は支払われませんが、ダウンロード履歴に応じて写真家に補償金が分配されます。これは著作権法上、無償で使うことが許された使用なので、写真マーケットへの影響はありません。

Q. 補償金とはどのようなものですか？

2018 年 5 月の著作権法改正で新しく作られた制度です。以前から教育目的の場合、著作物は自由・無償で使われていたのですが、デジタルデータの使用 (公衆送信) に制限がありました。今回の改正で公衆送信での使用も可能になり、授業で生徒の PC やタブレットにデジタルデータを送信できるようになりました。これに合わせて、授業目的公衆送信補償金制度が始まります。

著作権の権利制限が拡大することに対して、補償金を設定して権利者への影響を補充しようとする意図があります。補償金は写真を利用する教育機関の設置者 (公立小中学校であれば教育委員会) が文化庁長官から指定された団体である SARTRAS (授業目的公衆送信補

償金等管理協会) に支払います。SARTRAS は独自の調査に基づいて著作物の分野ごとの権利者団体 (写真は JPCA) を通じて補償金を分配します。

Q. システムを教えてください。

写真家が「教育利用写真アーカイブ」に写真をアップロードし、教育関係者は ID とパスワードでログインのうえ、ダウンロードして使用します。「教育利用写真アーカイブ」から一元的に写真がダウンロードされることによって、JPCA は写真の使用履歴を把握し、使用点数に応じた補償金を分配します。補償金は SARTRAS の調査資料とアーカイブの使用履歴をもとに計算されます。写真の使用者は小・中・高・大学・高専や専門学校・各種学校など、非営利の教育期間に限られ、参考書や問題集、塾やカルチャーセンターなどの商業利用は含みません。また、写真の使用者にはアーカイブの規約への同意が求められ、その範囲内での使用が許諾されます。このアーカイブは公衆送信補償金制度に対応したもので PC やタブレット、電子黒板などで使うデジタルデータでの使用が対象となります。

Q. 学校教育が変わるのですか？

近年の AI (人工知能) の進歩には目を見張るものがあります。人間の仕事が AI にとって代わられる事例が多く出現しており、教育行政では AI 時代に対応した教育の改善が急務とされています。そのため、学校教育は記憶を中心とした詰め込み型から好奇心をもって考え、論理的な思考を訓練するアクティブラーニング (双方向授業) へと移行します。

文部科学省は来年度から実施される新指導要領のなかで「ICT 教育の推進」を掲げています。ICT 教育とはインターネット・コミュニケーション・テクノロジーの略語で「身近なコンテンツを使って新しいものを作り出す」ことを意味します。PC やタブレットなどのデジタル機器を使って授業を進めることが増えるので、たくさんのコンテンツ (著作物) が必要になります。昨年の著作権法の改正は、この教育現場での変化に対応するためのものなのです。

JAPAN PROFESSIONAL PHOTOGRAPHERS SOCIETY 173

「日本写真保存センター」調査活動報告(32)

写真撮影の初心をまとめた写真原板と教育利用のための写真の収集 松本 徳彦 (副会長)

写真家はこういった動機から、写真撮影の道に入ったのであろうかを探ることも、保存センターの仕事である。ある人は家業を継ぐためであったり、街中に氾濫する写真から興味を抱いたり、趣味として始めたり、職業意識をもって撮影意図を明確にして取り掛かった人もおられるだろう。

■島内英佑さん

島内英佑さんは1937(昭和12)年、高知県幡多郡佐賀町の造り酒屋の次男として生まれる。父圀蔵は日中戦争が始まったころ流行っていたアマチュア・カメラマンとして町で知れ渡っていた。ドイツのツアリス・アイコンが製造したアイコンタ・シックスはスプリングカメラの名器として誰もが持てるカメラではなかった。長兄吉康も家業を継ぎ、傍らでアマチュアとしてカメラ雑誌に投稿し数々の賞を得るなど、写真一家といった環境で英佑は育った。

1955(昭和30)年、日本大学芸術学部写真学科に入学し本格的に撮影に励む。在学中渡辺義雄氏の推薦で『サンケイカメラ』〈ルーキー登場〉欄に「光る川」(58年)を発表する。卒業制作のテーマを「四国三郎-吉野川-」に定め、約2年間かけて吉野川流域で暮らす人々と風景を、上流から河口までを地図を片手に自転車で踏破し、フォトストーリーとした。

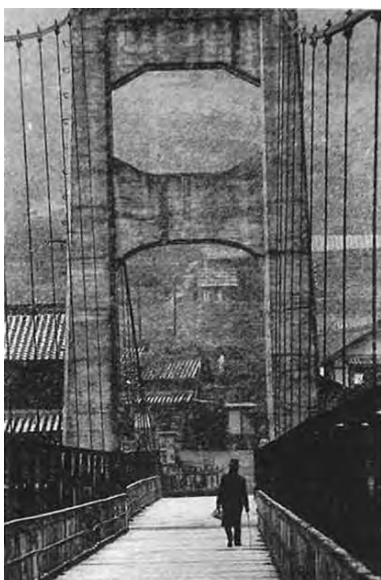
1959(昭和34)年光文社写真部に入社。『少年』『少女』『面白倶楽部』『カップノベルズ』等の撮影に従事する。1962(昭和37)年フリーとなり、平凡社の雑誌『太陽』の囑託。1964(昭和39)年『アサヒカメラ』〈新人〉欄に「ある典型-東京駅-」を発表するなど、雑誌メディアでの活動が光る。個展に「ボンジュール・パリ」(新宿ニコンサロン72年)、「フランスの詩」(三菱オートガーデン74年)、「南の風-パラオ・セブ紀行-」(キヤノンサロン78年)などがあり、1979(昭和54)年個展「吉野川ふたむかし」(ニコンサロン)を催す。主な撮影は国内外の旅紀行、食文化を諸雑誌に発表する。

今回収蔵した写真原板は処女

作である写真集『吉野川ふたむかし』(教育出版センター79年発行)に掲載された写真から選んだ。モノクロフィルム201本がコンタクトプリントとともに整理されており、学生時代の取材メモなどを収集した。

この写真集には作家の森村誠氏が「川と人生」と題して、「川はよく人生に譬えられる。内陸の奥深くに源を発し、急流にもみしだかれ、滝つ瀬となって落下し、淵に激み、平原に出でて川幅を広げ、紆余曲折しつつ、遂に河口より海に至る。この変転の過程は、まさに人生である。まことに「行く川の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある人と栖とまたかくのごとし」であると記し、島内の写真について、「氏は、吉野川(四国第一の長流)」という日本の美しい川の一つを生命ある被写体として凝視し、その源の誕生から海に注ぐまでを有機的にとらえ、卓抜したカメラアイによって見事によみがえらせた。

写真は大雨が降ると氾濫を繰り返す「四国三郎」の源流を求めて高知、愛媛の県境付近から始まり、最奥の集落、伝説では壇之浦の合戦で敗れた平家の落人が住み着いたといわれる寺川の雪道を歩む。水資源の宝庫である上流域には複数のダムが造られ、発電と水がめで都市用水と農業用水、道路も整備される。和紙の



土地の有力者が金婚記念に贈った大川つり橋
(雪が舞う3月)



現在は欄干が造られ、涼を求めて子供たちは読書に夢中(8月)

原料コウゾの生産も盛んである。大歩危・小歩危の溪谷には観光客が絶えない。兩岸は絶壁で手漕ぎの渡し舟で渡る。待望のつり橋ができ人の交流が盛んになる。阿波の人形浄瑠璃の頭はこの地で作られる。次第に川幅も広がり徳

島市へと流れ紀伊水道へ。全長 194 キロメートル、流域 3650 平方メートルの大河で人の暮らしと川の景観を捉えた旅は終わる。

1958 (昭和 33~34) 年ごろに記された『吉野川撮影旅行日記』と、源流から河口までの 5 万分の 1 地図 9 枚があり、吉野川筋に沿って踏破した折々の様子や出会った人々との会話、食べ物、取材日誌などが地図の周辺に書き込まれ、写真集とともに見ると写真を撮った時の印象が手に取るように分かる旅紀行となっている。保存センターの原板台帳のメタデータを整えるのに大変参考になる。今後は『吉野川』を起点としてご家族の協力を得ながら順次残されている原板の整理を進め、島内さんの業績をまとめていく予定である。

■高野伸二さん

日本写真保存センターでは、文化庁が「著作物の教育利用」に関する補償金制度の改定を行い、教育利用のための写真の収集、利活用の促進を図っていることを見据えて、この状況を有効に活用するために、写



カメラを通しての島内さんの川に寄せた限らない愛情と郷愁がある。『吉野川ふたむかし』教育出版センター 1981 年

真収集の範囲を自然科学、動植物の生態などを学術的に捉えた写真にまで拡大することにした。その第一弾が財団法人日本野鳥の会理事の高野伸二著の『日本産鳥類図鑑』や『日本の野鳥』などから、野鳥を捉えたカラー写真を約 450 本収集した。

高野が初めてカメラと望遠レンズを購入して撮影を始めたのは 1955 (昭和 30) 年からという。水鳥の渡来地は千葉県行徳あたりだったが、近年、干潟が埋め立てられマンションや住宅が建ち並び、野鳥を観る機会がどんどん少なくなってきた。反面、マスメディアが自然志向を強く打ち出せば出すほど、野鳥を撮ろうとする人は増え続けた。しかし、自然環境保護への関心が乏しく、野鳥生息地への環境破壊が進み、その上、珍しい瞬間だけを撮ろうとするマナーの悪い人が増えて困っているという。それだけに野鳥の生態を捉えた写真は貴重で残す必要がある。

高野氏は 1926 (昭和 1) 年東京四谷で生まれ、小学校に入る前から、庭に来る鳥を毎朝晩眺め、中学生のころには鳥類生態写真の先駆者として知られる下村兼史 (1903~67) の写真に憧れ、冬鳥のふるさと大陸満州 (今の中国東北) の学校に進学 (44 年)、現地でツルやノガン、ヤツガシラなどの観察を続けた。国立吉林師道大学から招集され、敗戦でシベリア抑留生活を経験。帰国後東京教育大学、大学院理学研究科博士課程を終え (58 年)、白金の国立自然教育園に勤務 (60 年)、日本鳥類保護連盟を経てフリー (72 年)、日本野鳥の会理事を歴任。鳥の生態写真集や野外図鑑などの出版に関わり、多くの著作をあらわし関係者からは「生きた図鑑」と呼ばれていた。(84 年没)

この度の収集 (35 ミリカラー 450 本約 8,000 コマ) と書籍、資料等には、日本野鳥の会常務理事の塚本洋三氏の多大なお世話をいただいた。



シロハラ (Turdus pallidus) 東京日野
トキワサンザシの赤い実を飲み込もうとする瞬間



アマザモ (Bubulcus coromandus) 北海道根室
放牧されている馬が追い出すカエルを狙って、一緒に行動する

第13回 JPS フォトフォーラム

(2019年11月17日(日): 有楽町朝日ホール)

主催: 公益社団法人 日本写真家協会、朝日新聞出版「アサヒカメラ」 後援: 文化庁

今回のテーマ:

「撮るべき、時代。」

毎年恒例となったフォトフォーラムを2019年11月17日(日)、有楽町朝日ホール(東京都千代田区)で開催した。常連の方々も多くみられるなか今回は429名の参加者でうまり、第1部は野町和嘉会長による基調講演(後半は対話形式)を行った。第2部からはパネリストによるステージ上での写真講評会、第3部は大西みつぐ氏、HARUKI氏、熊切大輔氏を招いた「スナップそれぞれの流儀。」というテーマでパネルディスカッションの3部構成で行った。

朝日新聞出版社雑誌本部長・佐々木広人氏の司会進行のパネルディスカッションでは、「光、影、色、静、動、モノクローム、音、時間、感情、時代」という10の共通お題について、各氏独自の写真談議が繰り広げられた。

開会挨拶: 会長 野町和嘉

JPSフォトフォーラムはこれまで、それぞれ時代に即したテーマを掲げてやってきました。今回は「撮るべき、時代。」。「撮るべき」の後に「、」が入っていて、なんとなく意味深です。今、デジタル技術が予測もつかないスピードで進行し、スマートフォンが普及しています。変化のスピードを考えると、5年後、10年後に写真がどういう形で継続されているのか、誰しもが考えずにはいられない時代です。

写真展の審査を頼まれると、全紙に伸ばして人様に見ていただくという思いがないまま応募されている作品が少なくないことに戸惑います。我々が葛藤しながら撮っ



ていた写真と、女子高生がカフェなどで撮るインスタ用の写真の落差というか。これではいけないし、まさに「撮るべき、時代。」をもう一度思い起こし、写真と向き合っていないといけないと、改めて痛感した次第です。

基調講演: 野町和嘉 (日本写真家協会会長)

半世紀ちかく写真を撮ってきましたが、ほとんどが海外の辺境というか、地域文化の撮影です。初めてサハラ砂漠を訪れたのは1972年、25歳の時でしたが、とにかく圧倒されました。過酷な自然のなかで何世代も生きてきた人たちの強靱な生き方を見て、生きる糧とはなんだろうと思ひめぐらし、イスラムという宗教が想像もつかないスケールで広がっていることを理解した。そこから、さまざまな宗教が濃密に受け継がれている土地を巡る取材を続けてきたわけです。

1974年、ロンドンでランドローバーを購入してアフリカ大陸に渡り、長期取材をしました。リビアの砂漠では264頭のラクダを連れたキャラバンを追跡していて、歩調が遅れた1頭のラクダを屠殺する場面と遭遇。360度

地平線の中、縛って身動きできなくなったラクダの喉を切る。すると赤茶けた砂の上に花が開くように血が広がり、あっという間に乾いていった。こういうシャッターチャンスがあるのかと、自分でも驚嘆しました。熱風のサハラで干上がった河を見ているうちに、同じサハラを流れている永遠に枯れることのないナイル川があることに閃き、全ナイル流域の取材を始めます。

1981年、南スーダンのディンカ族という牧畜民のキャンプで、牝牛の性器に口をつけて息を吹き込む少年を撮影しました。牛が性的な刺激を受けて、お乳をよく出してくれる。家畜のことを知り尽くした習性です。その後、内戦が始まり、取材ができなくなります。

長い内戦後、2012年から翌年にかけて取材に行くと、



「岩窟教会の祈り」 エチオピア
(2012年) 撮影：野町和嘉

さすがに全裸の男たちはいなくなっていました。しかし驚いたことに、牛の性器に息を吹き込む風習は受け継がれていた。その1年後に再び内戦がおこり、撮影した牧畜キャンプが今も残っているかどうか分かりません。

エチオピア南部には、男子の通過儀礼として並ばせた牛の背中を跳躍する民族がいます。その通過儀礼を祝福するため、女性たちは男たちから鞭で打たれる。血を流し、背中に無数の鞭傷が残っていることが彼女たちの誇りなのです。これがアフリカの伝統の底力なのかと納得させられました。エチオピアは十数回取材していますが、北部の岩窟教会を最後に撮影したのは2012年、高性能デジタルでしたから、暗い中 ISO25600 という以前にはあり得なかった高感度で撮影できました。

イスラムの聖地メッカでは、ラマダン月の27日目、100

万人のムスリムが徹夜で礼拝しカーバ神殿のまわりを巡回する様子をスローシャッターで撮りました。また年に一度の大巡礼では、200万人が白い巡礼着をまとって巡礼するところを撮影。人間ってなんだらうという思いにきかたえられる、すごいシーンでした。

きっかけは1994年、聖地メディナの写真集を作りたいから撮影に来てほしいとサウジアラビアに呼ばれた際に、イスラム教徒になることを決心しました。メッカもメディナも、異教徒は立ち入り禁止です。それでは肝心な場所での撮影ができないし、長い間の経験からイスラムに対し違和感はありませんでした。

チベットを撮影し始めたのは1988年。広大なチベット高原のほぼ全域を旅しました。文化大革命時代、チベットの寺院はほぼすべてが壊された。1991年には、叩き壊された仏像の撮影もしました。2014年には、東チベット(四川省)のラレンガルゴンパを撮影しましたが、ここも今は入れません。チベット仏教の勢力が大きくなったため、中国が破壊にかかっています。

今まで撮影してきた地域文化というか、宗教文化は、急速に変化が進んでいます。そこで最近は撮影対象を風景に移していますが、地球上にはまだまだ未知の世界が広がっていることを実感させられています。

【佐々木広人氏との対談】

佐々木 今の時代、海外の珍しい場所に行っただけでくる写真は、ネットやSNS上でも溢れています。ただ、ここまで現地の人たちに入り込むのは、なかなかできないと思います。よく言葉も通じずに入り込めるなどというのが、率直に言って驚きです。

野町 若かったし、好奇心に溢れていた。それに80年代から90年代初め頃までは、社会が背中を押してくれた。雑誌の編集部も、「お前、行け」と取材費を助けてくれましたから。

佐々木 アマチュアの方でもアフリカや中東で写真を撮る人がいますけど、ポツと行って撮れるものと体験してきたからこそ撮れるものは違う。その違いを分かっただけですね。

野町 ここ数年、カメラを向けるとイヤな顔をされることが増えました。昔と比べて何十倍もの観光客が押し寄せ、みんなカメラやスマホで写真を撮ろうとする。我々はプロセスを踏んで人情の機微を考慮するけれど、それもまったくない。だからカメラを持っているだけで、抵抗感が生まれるわけです。

佐々木 文革で破壊された仏像の写真。あれは、撮って残してあるから意義がある。もしかしたら、今はもうないかもしれない。一方、最近チベットで撮られた写真では、小僧がスマホを持っているところが小僧

らしいですね(笑)。

野町 そうやって世界中が平準化していく。

佐々木 最近は自然風景も撮られています。ああいう圧倒的な風景はどうやって見つけるんですか？

野町 今、インターネットでいろいろ調べられますから。世界遺産なんか、このアングルからこの時間に撮ればこうなると、ほぼ分かる。もちろん、そういったものは参考にしかありません。実際には現場に立ってどう感じるか。そこからです。

佐々木 砂漠の写真などを見ると、音がしないんだらうな、と感じますね。

野町 だから惹かれたんでしょうね。夜明けに高台に立って、誰もいない空間で、地平線から太陽が昇ってくるのを身体で感じる。やはり自然の荘厳さを思わずにはいられない。我々の時間とは違う、悠久の時間が流れている。その時間を体現できるのが、この仕事をしていてありがたいと感じます。



【のまち・かずよし】1946年高知県生まれ。写真家・杵島隆氏に師事し、1971年に独立。1972年、20代半ばでサハラ砂漠に旅したことを契機に、極限の風土を生きる人々の精神世界、信仰をテーマに地球規模で取材を続ける。2000年代以降は、アンデス、インド、イラン等を中心に取材。「サハラ」「ナイル」「地球巡礼」等多くの写真集が国際共同出版される。東京、ローマ、ミラノ他で「聖地巡礼」展を開催。土門拳賞、芸術選奨文部大臣新人賞など受賞。2009年、紫綬褒章受章。

パネルディスカッション

「スナップ それぞれの流儀。」

パネリスト

大西 みつぐ

HARUKI

熊切 大輔

司会：佐々木 広人

佐々木 今年は写真家の皆さんのスナップの流儀ということで、「光」「影」「色」「静」「動」「モノクローム」「音」「時間」「感情」「時代」というお題を用意しました。それぞれのテーマに合致する自分の作品をお三方に選んで語っていただく、いわば写真大喜利です。

「静」

大西 路地でたまたま紙ヒコーキがひゅーっと飛んで、そこに止まった。そこに物語性があります。路地には人の生活があり、子どもも大人も細かく動いていますが、その動きより全体の静けさや穏やかさを記録したい。

佐々木 穏やかな下町の風景の中に紙ヒコーキが横たわっているの、静けさを増幅させる感じがありますね。

大西 深川富岡八幡の水かけ祭りの写真は、消防団の人がいつ神輿が来るかと固唾をのんで待っている。

佐々木 爆発数秒前ですね。

熊切 そこにドラマを感じるの、大西さんならではのですね。普通だったら、どばーんと放水している瞬間を撮りたくなる。

佐々木 ここは大事な点です。盛り上がりの前の一瞬の静けさ。騒がしさを相対化しているから、人が大勢いても「静」が表現できる。町をよく見ていないと、出てこない発想です。

大西みつぐ(おおにし みつぐ)

1952年東京深川生まれ。東京総合写真専門学校卒業。東京下町や湾岸を中心にスナップショットを撮り続けている。第22回太陽賞、第18回木村伊兵衛写真賞、2017年日本写真協会賞作家賞受賞。東京造形大学、武蔵野美術大学非常勤講師、大阪芸術大学客員教授などを歴任。日本写真協会、日本写真家協会会員。ニコールクラブ顧問。



熊切 「東京動物園」の中の1枚、夜の公園です。昼間は騒がしい場所が、夜中の静寂の中で違うドラマが生まれてくる。静かな空間は、ものの見方に変化をもたらしてくれます。

「モノクローム」

大西 浅草木馬館は、モノクロを集中的に自分の作品として浮上させていた時代の写真です。場の濃厚な情緒性みたいなものを気持ちよく撮る。それがモノクロで表現されていた時代です。

HARUKI 冬のパリでエッフェル塔の下から撮影した写真は、実はモノクロではなくてカラーです。モノクロを意識し、空と人物の陰と鉄という造形だけで構成しました。自分の中でフィルムが終わり、デジタルになると同時に、モノクロは撮らないと決めた。でも2年ほど前プラハでデジタルでモノクロを撮影したら、写真を始めた頃の感覚が蘇ってきた。モノクロが面白くなってきました。

熊切 托鉢の写真は、景色をどう見ているのかが分かりやすい。カラーをモノクロにしたら面白くなるわけではなく、モノクロに似合う被写体を選ぶというひとつの例です。

佐々木 アマチュアの方で、カラーで撮ったけれど、イマイチだからモノクロにしてみました、と。後で処理することがあるじゃないですか。でも、根本的に違うと思います。

HARUKI 後で変えるのは、考え方としては好きではありません。潔くないので。

「時間」

佐々木 だんだんテーマが抽象的になりますが、今度は「時間」です。

HARUKI(ハルキ)

1959年広島生まれ。九州産業大学芸術学部写真学科卒業後、上京。主にポートレート作品を雑誌・広告・音楽・映像メディアで発表。「第35回・朝日広告賞、グループ入賞&写真表現技術賞」、「PARCO 期待される若手写真家展3」他多数受賞。オリジナルプリントはニューヨーク近代美術館などに収蔵。近年は旅先でのスナップ作品を作品集や個展で精力的に発表。白写真雑誌への原稿執筆やモデル撮影会での指導も務める。長岡造形大学視覚デザイン学科・非常勤講師。JPS会員。



大西 渋谷の道玄坂に、ライオンという、昭和26年に再建された名曲喫茶があります。この喫茶店に入ると、濃厚に過去「深川 日々の叙景」より (2019年)



撮影：大西みつぐ

の時間の堆積が感じられる。それを、どう表現したらいいのか。最終的に、今のオーナーを撮らせてもらった。過去の時間と向き合う僕の時間があったところを大事にした。

佐々木 背景にも、時間を感じさせるものがたくさんある。最初は人物に目が行きますが、2度見、3度見すると、どんどん背景に写っているものが目に入ってきて、繰り返しみていると味が深くなっていく。

大西 そういう写真が好きです。商店街の写真も、魚屋のステンレスの上に何も置かれていない。つまり、廃業間近なわけです。隣のクリーニング店も、看板が古い。僕はそれを、ちょっと遠くからじっと眺めている。

佐々木 大西さんの写真は、今風の言葉でいうと「じわる」。じわじわ来ます。

HARUKI 僕は、ヴェネチアの写真を選びました。海軍の施設のそばなので、たぶん写っている女性は海軍関係でしょう。彼女たちが着ている外套が、昔の日本のインパネスに似ている。それが僕にとって「遠い時間」。ノスタルジーを感じて撮った1枚です。

熊切 僕のは、さびれた港で老人が歩いている。とぼとぼした歩みの時間が、人生と重なる感じがして。それをしっかりと表現するため、ガードレールの遠近法を利用しています。「時間帯」を意識して撮ったのが、夕方の、子どもの時間と大人の時間の狭間。路地で子どもが遊び、そばで大人がお酒を飲んでいる。雑然とした中でいろいろなドラマが生まれる、マジックアワー的な時間帯ですね。

佐々木 熊切さんの写真はいろいろな瞬間を多重に重ねて撮っている。ウエハース型だね。

熊切大輔(くまきり だいすけ)

1969年東京生まれ。東京工芸大を卒業後、日刊ゲンダイ写真部を経てフリーランスの写真家として独立。ドキュメンタリー・ポートレート・食・舞台など「人」が生み出す瞬間・空間・物を対象に撮影する。スナップで街と人を切り撮った作品表現を主として2018年写真集「利那東京で」発売と共に写真展「利那東京で」を開催。「東京美人景」「東京動物園—アンリアルな動物たちの生態」の三部作で東京の今を撮り続けている。公益社団法人日本写真家協会理事。



「感情」

佐々木 目に見えないテーマだからこそ、それを可視化するのは、写真の面白みではないか。作家として写真を撮る時は、その作家性を1枚の中に入れて込まなくてはいけない。そういった時、感情をどのようにして1枚に入れていくのか、見ていきたいと思います。

大西 感情はイメージでしかない。しかしそのイメージの中に、僕ら写真を撮る人間はいろいろなものを込められると思っています。たとえば、荒川放水路の岸に立ちつくしているホームレス。このお父さんが、スカイツリーを見ながら何を思っていたのか。そこにとめどもなく流れる人の生き方や、これまでの時間がすべて盛り込まれているだろう、と。

佐々木 そのへんは、写真ならではのよさかと思えます。この人が何を思っているのか、言語化したら野暮になりかねない。

HARUKI 昨年夏はイギリスも猛暑で、避暑地のブライトンビーチもめっちゃくちゃ暑かった。そこで見かけた親子ですが、お父さんは日陰で休んでいたいけれど、子どもは遊びに行きたくてその前駄々をこねていたみたいで。そのまったく逆の感情が面白い、と。

熊切 9・11の後ニューヨークを撮るようになり、ちょっと悲しみを背負っているのが今の姿だろうと、あえてそういう部分を狙っていた。雨の日にたまたま古いメリーゴーランドで、少女が一人だけポツンと乗っていたので、象徴的な、と。「東京動物園」の中の1枚は、薬局の前のSATOちゃん。SATOちゃんは昭和っぽいし、取り残された感じがあって。無視されている孤独感を出すため、人の足の間から見えているSATOちゃんを撮りました。

佐々木 ハロウィンの格好しているんですね。



「1世紀前に建てられたポルトガルの市民市場にて」
撮影：HARUKI

佐々木広人(ささき ひろと)

朝日新聞出版雑誌本部長(アサヒカメラ前編集長) 1971年、秋田県生まれ。リクルートの海外旅行情報誌「エイビーロード」編集部を経て99年に朝日新聞社に移籍。週刊朝日副編集長、アサヒカメラ副編集長などを経て、2014年4月から5年間、アサヒカメラ編集長を務める。肖像権や著作権、撮影マナーの問題の講演も多く、「写真界の断家」の異名を持つ。今年4月から現職。2012年新語・流行語大賞トップテン入りした「終活」の生みの親でもある。



熊切 せっかくおめかししたのに、誰も見てくれない。
孤独な SATO ちゃんです。

「時代」

佐々木 最後のお題です。

大西 中島さんは、「時代は回る」と歌っていますが、僕が撮っている近所の風景さえ、時代は回っています。80年代の葛西臨海公園は、新しい場所ができたということでこぞって人が集まっていた。30年以上たち、着ているものや髪型からも時代性が見えます。ほぼ同じ場所で最近、サハリンからやってきた新婚カップルを撮りました。今は、外国人がこんな東京の端っこに来る時代。ちっばけな空間でも、三十数年の中で、時代性がきちっと写真の記録性の中に残っている。

佐々木 大西さんは、ずっとそこを見続けてきたからこそ、それが分かる。

HARUKI 時代の中で変わるものと変わらないものということで、2枚用意しました。まず変わらないもの。6、7年前のカンボジアで、日没の1時間後くらいに撮った写真です。丘の向こうの湖を指さしているお坊さんがいて、後ろに付き人みたいなお坊さんがいる。100年前も200年前もずっとこういう風景だったのでは、と感じました。実は撮影しながら、ずっと涙を流していた。自分の想像の中の、悠久の時間みたいなのを感じたのでしょう。一方、変わるものということでキューパ。「なぜ君たちはアルマーニのTシャツを着ているんだ」と(笑)。資

本主義を否定していたはずなのに、彼らは今そちらに流れている。

熊切 渋谷の公園通りで PARCO の工事をし 「刹那 東京で」より (2018 年) 撮影：熊切大輔
ていて、工事現場の壁に大友克洋のマンガ「AKIRA」が描かれている。このマンガは2020年が舞台です。工事現場は一時期のもので、変化する途中の東京を表現できるのではないかな。

佐々木 最後に何かひとことありますか？

大西 「撮るべき、時代。」というテーマは、言葉を変えようと、「立ち会うべき、時代。」ではないか、と。撮るからには、現在に立ち会っているという自覚のもと、過去からつながる現在、そして未来に、カメラのレンズを活かすべきではないかと思います。

HARUKI 僕は、スナップはただ撮るのではなく、自分の中でストーリーを作って撮っています。皆さんも、そういうことをしたら面白いのではないかと思います。



パネリストによる写真講評会

午後の初めは、パネリスト大西みつぐ氏、HARUKI 氏、熊切大輔氏の各氏による写真講評を行った。事前に申し込んだなかから選ばれた16点の写真愛好家作品がステージ上で順次投影され、客席前列に控えた講評応募者と対話を交えながら進行した。限られた時間内で1枚1枚丁寧に講評され、応募者、聴講参加者とも充実した講評会となった。

各休憩時間には協賛会社の動画によるスクリーン広告を上映、ロビーでは『アサヒカメラ』最新号の販売コーナーが設けられた。最後に松本徳彦副会長による閉会挨拶と JPS についての案内があり、盛況のなかフォトフォーラムは閉会した。

(記／篠藤ゆり [講演、パネルディスカッション]、出版広報委員：小野吉彦[概要、イベント]、撮影／今井孝弘)



ロビーでの販売コーナー



スクリーンに投影しての写真講評会



閉会挨拶を述べる松本徳彦副会長

フォトフォーラム協賛：エプソン販売（株）、オリンパス（株）、キヤノンマーケティングジャパン（株）、（株）シグマ、（株）タムロン、（株）ニコンイメージングジャパン、富士フイルムイメージングシステムズ（株）（7社50音順）

写真解説

Illumination Train (表紙写真) ————— 大鶴倫宣

クリスマスシーズンのハンガリー、ブダペストで撮影。無数のLED(発光ダイオード)を散りばめたトラム(路面電車)に出会い、それをより効果的に見せたいと思いこの撮影を発案。停留所に止まった瞬間から露光開始。乗降中もシャッターは開けたままで、ドアが閉まり発車して目の前を通過した瞬間にシャッターを閉じる。余談だが、この時は三脚は持参しておらず停留所のゴミ箱にカメラを固定して撮影した。
(写真展「Christmas Train きらめく街へ」写真集「Christmas Train」)

月光の弁財天鳥 (表4写真) ————— 武下 巧

この写真は、月光に浮かび上がる弁財天鳥です。撮影場所は今治市小浦町で、造船所の拠点となっている波止浜湾の入り口にあります。糸山から海岸に下りる釣り人が通る道があり、その途中からアングルのいい位置を狙います。月は一日天気が悪いと次の日は時間及び位置は大幅にずれるので、写真を写すのに何年ものかかる時もあります。フィルムはRVP50、ペンタックス67 II、300mmでF5.6、2分前後で何枚も写しました。
(写真集「海の時刻」)

◆ JPS ギャラリー

「今」を生きるアマチュアボクサー達の肖像・竹原ピストル ——— 高尾啓介

元アマボクシング選手達の今を訊ね2年で約200か所以上を取材。その一人竹原さんは、高校時代県大会以外出場すらできなかった。卒業後ミュージシャンへの夢を持つも、親の勧めで已む無く大学へ進学。そこには鬼先輩らが待っていた。「毎日ポコポコにしごかれた頃を思い出せば歌っていてキツイなあとと思う時どうって事ないですね」。全日本選手権へ出場するまでになる。そんな過酷な辛き苦しみは時を経て音楽となり、全国各地で多くのファンを魅了し続けている。

山麓の春 ————— 武並完治

中国地方の最高峰大山(鳥取県1,729m)。南北両面は荒々しい崩壊壁をなすが、西側は「伯耆富士」の名のトロイデが優美に裾を引く。見る方向で印象が大きく異なる山である。

大山に通い始めて随分となる。四季を通じてその多彩な表情には目を見張るものがあるが、ブナの新緑や花やチョウなど、春はこの山がひとときわ光り輝く季節である。山裾に広がる畑の傍らでひっそりと満開を迎えた一本桜。雪の大山とつむぐ季節の妙の一枚である。

在朝日本人 ————— 伊藤孝司

朝鮮民主主義人民共和国の地方都市・咸興(ハムン)市に、日本人の親睦団体「咸興にじの会」がある。会長は、戦前から朝鮮半島で暮らす荒井琉璃子さん(前列中央)だ。他の女性たちは1959年に始まった在日朝鮮人の帰国事業で、夫と共に渡った日本人妻である。中本愛子さん(前列左)は、私の取材で音信不通だった肉親と連絡がとれ、訪ねて来た妹と58年ぶりの再会を果たした。誰もが、日本へ里帰りして両親の墓参りをしたいと望むが、最悪な日朝関係がそれを拒んでいる。

年の暮れ ————— 山本治之

毎年、年が押し詰まるとやって来る伊勢太神祭。各家々を訪問し舞を奉納する。昔は丹波篠山市でもあちこちで見るこ

ができた年末の恒例行事であったが、今では珍しくなっている。この地区で最後に舞を奉納する家はまだ茅葺の残った家であり趣がある。その庭で行われる舞は各家庭で行われる舞よりも時間が長く、かつ優雅な舞であり、年々見学者・撮影者も多くなっているが、毎年楽しんで撮影させていただいている。

Pontcysyllte Aqueduct ————— 近藤太智

テルフォード・エッフェルを題材に橋を撮り歩く。その中で出会った数少ない世界遺産に登録されている橋。運河用の細長い船(ナローボート)が、観光客を乗せ橋を渡る。何回も行き来する姿を撮り続けていると、雨が降ってきた。橋を渡る人は居なくなり、私だけが世界遺産の橋を独占できた。横を船が通りすぎた瞬間、ふと船長は私に手をふった。私はシャッター音で答えた。

ダム水没予定地に暮らす尾方さん夫妻 ——— 小林正明

川辺川ダムに沈むとされた熊本県五木村の水没予定地に、ただ1軒残り、昔ながらの暮らしを続けていた尾方さん夫妻を2002年から足かけ16年追いつけた。これまでと変わらぬ暮らしを続けたい、というささやかな願いを持って尾方さんは移転を拒み続けた。ダム計画は2009年に中止になったが、暮らしを一変させる国の政策に非情を感じ、誰もいなくなった水没予定地で、淡々と生きる夫妻の姿を伝えようと撮影を続けた。

◆ FUJIFILM X ギャラリー

Twilight ————— 細田満夫

梅雨末期の夕暮れ、雨が上がったアジサイの丘は青く沈んだ暮色に溶け込もうとしていた。花も空も一体となって、その時を待っている。

日中見れば何の変哲もない風景でも時が移ろうにつれて全てが色あせ、宵闇にのみ込まれて行く刹那を表現しようと試みた。ローコントラストの上に、ほぼ単一色。

撮影条件としては難しい時間帯だったが、何とかその場の雰囲気は再現できたように思う。

インスタ映えを求めて ————— 服部辰美

北陸地方の主要都市である金沢も歴史的な多くの文化遺産があり、大勢の観光客が季節を問わず訪れる。有名な兼六園の近くにある金沢21世紀美術館にも若い人たちが多く立ち寄ります。プールの下に人がいるレアンドロのプールやラビットチェア、そしてこの“まる”などSNSで人気の造形物が若い人たちを惹きつけるでしょう。寒い冬の日にも関わらずレンタル着物で観光をして歩きインスタ映えする場所で記念写真、これが新しい旅行の形を作り始めている気がします。

岐阜地歌舞伎・楽屋にて ————— 林 義勝

本業の役者たちで演ずる本歌舞伎に対して素人役者たちによって演じられる地方に根づいた歌舞伎を岐阜では「地歌舞伎」と呼称されている。日本全国にある地芝居の保存会のうち岐阜県は全国最多の32団体があり、日本一を誇る。2016年「地歌舞伎」取材に岐阜を訪れた際、地方役者の熟演で大いにわく芝居小屋や舞台裏を通じて親子代々に渡って郷土芸能を継承する人たち、風土に魅せられて以来通いつづけている。

第45回「日本写真家協会賞」贈呈式

受賞者：「日本写真文化協会ポートレートギャラリー」

第15回「名取洋之助写真賞」授賞式

受賞者：和田拓海「SHIPYARD ～翼の折れた天使たち」

藤本いきる（奨励賞）「おじりなりてい」

第3回「笹本恒子写真賞」授賞式

受賞者：吉永友愛

2019年12月11日（水） 於：アルカディア市ヶ谷

第45回「日本写真家協会賞」贈呈式、および第15回「名取洋之助写真賞」授賞式、第3回「笹本恒子賞」授賞式が、2019年12月11日、東京・市ヶ谷の「アルカディア市ヶ谷」にて、受賞者、来賓、当協会の賛助会員、および会員参加のもとで、盛大に開催された。すべての会の終了後には、同会場で会員相互祝賀会も開催され、これは例年どおりの催しとなったが、今年も多数の参加を得て、大きな盛り上がりを見せている。

日本写真家協会賞は「写真技術に関する発見、発明、開発において顕著な功績、あるいは貢献、寄与が認められる個人または団体にに対し贈られる」賞で、今回は日本写真文化協会「ポートレートギャラリー」に、名取洋之助写真賞は「新進写真家の発掘と活動を奨励する」ために35歳までの写真家を対象とした賞で、今回は和田拓海さんと、同賞の奨励賞が藤本いきるさんに、笹本恒子賞は「時代を捉える先鋭な眼と社会に向けてのヒューマニズムな眼差しに支えられた写真群を顕彰するため」に設けられた賞で、今回は吉永友愛さんに、それぞれの賞が贈られている。

式の冒頭ではまず野町和嘉当会会長から挨拶があり、併せて当会の名誉会員である田沼武能さんが、写真家としては初めて文化勲章を受章されたことも紹介された。この時には会場から大きな拍手が起こっている。

続いて来賓の代表として文化庁・坪田知広参事官からの挨拶があり、坪田さんからは「写真の持つ力や、変わらぬその魅力を、皆さまの優れた作品や言葉を通じて、より多くの方々にお伝え頂けることを願っております」との言葉を頂いた。

「日本写真家協会賞」贈呈式

2019年度の「第45回日本写真家協会賞」は一般社団

法人日本写真文化協会「ポートレートギャラリー」に贈られた。まず、当会の野町会長から日本写真文化協会の会長、田中秀幸さんに表彰状と記念の盾が贈られ、野町会長は表彰状の授与に際して「日本写真文化協会は平成30年に発足70周年を迎えましたが、この70年の間に、営業写真館の発展のために数々の事業を展開され、ポートレートギャラリーは数多くの写真家、写真愛好家から憧れの展示会場となり、幾多の写真を世に送り出してきました」と授賞理由を改めて紹介。記念撮影に続き、田中さんからは「これまでの44回の受賞者さんの皆さまのお名前を見ますと、私どもが受賞して良いのかなという気持ちにもなり、大変に光栄なことだと感じております。私どものギャラリーでは年間に50回ほどの写真展を開催させて頂いておりますが、作品を出展なさる写真家の方々は、ほとんどが日本写真家の会員の方か、あるいは会員の方に教を乞うた写真家の方々です。そういう意味では、私どもにとっても縁のあ



「日本写真家協会賞」贈呈 記念写真



野町和嘉 JPS 会長による開会の挨拶により式典が開始された



野町会長より受賞者へ表彰状と記念の盾が贈られた



文化庁参事官坪田知広氏の来賓挨拶



受賞者の田中秀幸氏による受賞者挨拶



松本副会長より受賞者へ表彰状と記念の盾が贈られた



「名取賞」受賞者の和田拓海さんによる受賞スピーチ



選考委員・飯沢耕太郎さんによる選考過程の説明と講評



「名取洋之助写真賞」授賞式 会場風景

る賞であると感じています。今後ともご指導のほど、よろしくお願い申し上げます」との挨拶を頂いた。挨拶の最後には、「ポートレートギャラリー」という名前の名づけ親が当会の松本徳彦副会長であるという秘話も披露され、会場を和ませるエピソードとなった。

「名取洋之助写真賞」授賞式

「第45回日本写真家協会賞」の授賞式に続いて、第15回「名取洋之助写真賞」贈呈式の授賞式が行われた。「名取洋之助写真賞」は、新進写真家の発掘と活動を奨励するために35歳までの写真家を対象とした賞で、今回は和田拓海さんの「SHIPYARD～翼の折れた天使たち」が受賞作となり、同賞の奨励賞に藤本いきるさんの「おじりなりてい」が選出されている。

和田さんの作品は、バングラディシュのダッカにある船舶解体工場で働く子供たちの姿を捉えたもので、雑然とした工場の片隅で働く子供たちの純真な表情が印象的な作品群だ。審査員を務めた写真評論家の飯沢耕太郎さんは「歴代の受賞作の中でも完成度が高い」と、この作品を評価している。

和田拓海さんは受賞の喜びを「この作品を撮り始めた時は、ごく一般的なトキュメンタリー作品を撮るつもりでいました。しかし、何度か撮影を続けているうちに、児童労働の問題があることに気が付き、写真の力で何とかこの状況を打開できないかと考えるようになりました。今回の受賞で、自分にも責任があるのだということを感じるようになりました。また新たな気持ちで活動を続けていければと考えています」と語った。そして「これからもご支援、ご期待のほどをお願いします」と挨拶を締めくくった。

社会のひずみがさまざまな形で露呈するようになった現代という時代に、私たちが直面し、回答を迫られている問題は多い。児童労働の問題も、まさにその一つだろう。それでも和田さんは「それぞれの立場にある人が協力し合えば、決して解決できない問題はない」と語る。「これからも、一人でも多くの人に写真を通して伝えられるように精進して参ります」というメッセージも寄せられ、私たちをも励ましてくれた。

そして、「名取洋之助写真賞奨励賞」を受賞した藤本いきるさんの作品は、定年退職後に癌を患いながらもひたむきに生き続ける男性をテーマにした作品であ



「名取洋之助写真賞」授賞 記念写真

る。作品のタイトルは誤植ではなく、作品の主人公となった男性・青木昭さんが、オリジナリティという言葉を使い間違えたことから生まれたという。撮影現場の雰囲気伝わってくるような、微笑ましいエピソードであるが、作品1枚1枚が深いメッセージ性を湛え、飯沢耕太郎さんは「『切実さ』という点では群を抜いた作品。一枚一枚の写真に説得力がある」とこの作品を評価している。

藤本さんからはメッセージが届けられ、「幾多の御苦勞を乗り越えて精一杯生きた青木さんの人生を紹介して頂けたと、ありがたく感じております。私の下手な腕前を長きにわたって受け入れてくれた青木さんを始め、作品を高く評価して頂いた皆さまに御礼申し上げます」という言葉が会場内にアナウンスされている。

「青木さんを元気にしたい気持ちで撮影していたつもりでしたが、人生は突然の連続。どんなに苦しくても、この世界は捨てたものじゃないと、私のほうが元気づけられた10年間でした」と、撮影が続けられた日々を振り返っている。

「名取洋之助写真賞」、「名取洋之助写真賞奨励賞」に選出された2つの作品は、どちらも強い社会性を備えた作品で、人が人として生き続けることの意味ばかりでなく、現代という時代において、写真というメディアがなすべき役割とは何なのかを問いかけてくる。その意味からもこの2作品は、受賞にふさわしいものと言えよう。

最後に受賞者、来賓、審査員を含めての記念撮影が行われ、授賞式が締めくくられた。



山口勝廣専務理事より受賞者へ表彰状と記念の盾が贈られた



「笹本恒子写真賞」受賞の吉永友愛氏によるスピーチ



選考委員・大石芳野さんによる選考理由の説明と講評



笹本恒子さんのメッセージを代読する姪の野村エミ子さん

「笹本恒子写真賞」授賞式

続いて第3回笹本恒子写真賞の授賞式が行われ、受賞作「キリシタンの里・祈りの外海」を撮影した吉永友愛さんに、山口勝廣専務理事から表彰状と副賞が授与されたのに続き、選考委員を務めた大石芳野さんから、選考理由、講評が述べられている。

受賞理由では、「キリシタンの里・祈りの外海」は、長崎県の外海地区で暮らすキリシタンの暮らしを35年以上にわたり撮影し続けた作品で、「徳川幕府によるキリスト教徒の迫害、弾圧が260年も続いた外海の教徒たちは、迫害を逃れて山中に立て籠もり、信仰を守り続けてきた。その集落に住む末裔の敬虔な信徒たちの日常を、素朴な視線できめ細かく記録し、信仰の奥深さを丁寧に表現した力作に対して」というもので、一連の作品には、質素な暮らしを続けながらも、自らが築きあげてきた文化を大切に守り続ける人々の姿が、長崎の豊かな自然、あるいは昔ながらの建築物などを背景にして描かれ、見る者に人が生きてゆくことの意義を問いかけてくる。

講評に続いて、受賞者の吉永友愛さんが壇上に上がって受賞の挨拶をした。吉永さんが受賞作となった一連の作品の撮影を始めたのは1979年のことであったという。最初は写真撮影の仲間と風景写真を撮影するために長崎県北部の山村に出かけ、そこで偶然に昔の「隠れキリシタン」の生活に出会った。そこに住まう人々の暮らしが、部屋の中にマリア像を飾り、あるいは墓標にしても日本で多く見られるものとは形が大きく異なっているなど、仏教に根差した生活様式を守る一般的な日本人のものとはいたる所で大きな違いがあることに吉永さんは衝撃を受け、外海地区での撮影を続けるようになった。何日も繰り返して撮影を続けるうちに、地元の人とも理解し合えるようになり、撮影される写真がより意義深いものになっていったと、受賞の喜びと、撮影の裏話を打ち明けてくれた。

一つのテーマを長い間追いつけることの重要性は、フォトグラファーであれば誰もが理解できることだが、それを本当に実行するには強い精神力が要求される。何気ない出来事から始められた撮影が大きな成果へと結びついた鍵となったのは、クリエイターの作品にかける意志と、たゆまない知的的好奇心であったことが示唆されたような、吉永さんのスピーチとなった。



受賞者や関係者を交えた授賞式記念写真

続いて笹本恒子名誉会員から寄せられたスピーチがご家族の野村エミ子さんの代読によって披露された。スピーチは別掲したとおりで、笹本さん自身も今回の授賞式への出席を望まれていたものの、体調も見極めた上で大事を取られたとのこと。それでも、105歳という年齢になっても撮影への情熱を失わない笹本さんの言葉が、会場を訪れた全員に勇気を与えたように見受けられた。

最後は来賓も受賞者と共に壇上に上がっての記念撮影が行われ、第3回笹本恒子写真賞授賞式は無事終了した。

第3回「笹本恒子写真賞」授賞式に寄せて 名誉会員・笹本恒子

皆さんこんばんは。残念ですが今年も欠席とさせていただきます。少し前に定期的に診ていただいている主治医に今日のことを話したところ「夜の会合はダメ!」と言われてしまいました。

私は9月1日無事に105歳の誕生日を迎えました。記憶力の衰えをのぞけば体調はまずまずだったので、「今回は!」と張り切ってカレンダーに印をつけていたのですが大変残念です。先日かつて通った小学校より創立100年祭に来て欲しいと招待をうけました。参加した大人の大部分は私の孫の世代。しかし自分もこの卒業生の一人なのだと思います。年甲斐もなく胸が少し熱くなりました。105歳といえどもまだ体のどこかに若い頃の血潮が残っているようです。来年もまた新しい誕生日を迎えられるよう頑張ってみようと思っています。また1年、皆さまと一緒にそれぞれの目標に向かって頑張りたいですね。

寒い季節、皆さま体調にはくれぐれも気をつけて下さい。
(代読・野村エミ子 抜粋)

2019 年度会員相互祝賀会

2019 年 12 月 11 日 (水) 於：アルカディア市ヶ谷

写真関係者が一堂にそろう「受賞・出版・写真展」などで活躍された会員を相互祝福

2019 年度の日本写真家協会会員相互祝賀会は、第 44 回「日本写真家協会賞」贈呈式などに引き続き、同日 18 時から、同会場アルカディア市ヶ谷で開催された。例年、大きな盛り上がりを見せ、会員相互の意見交換の場ともなっている祝賀会だが、今回も多くの会員の参加を得たことで、有意義な会となった。

会の冒頭では松本徳彦副会長の挨拶、続いて来賓の櫻井龍子日本カメラ財団理事長からのご挨拶を頂き、新たに名誉会員となられた熊切圭介さんへ金バッジの贈呈が行われた。日本写真家協会の前会長として多方面で活躍を続けてきた熊切さんの登壇には、一層大きな拍手が贈られている。

乾杯のご発声は、賛助会員の西村亨富士フィルムイメージング代表取締役社長から頂いた。写真界への期待を込めた簡潔だが的を得た西村さんの言葉にも会員の誰もが、意を新たにしように見受けられた。

そして歓談の時間は、例年の通り、和やかなひと時となった。久々の再会を喜び、年齢などの垣根を越えて写

真談義に花を咲かせることができるのは、同じ道を志したもの同士だけが味わうことができる大きな愉しみだろう。そして各自が知り得た情報を交換することが、自らの研鑽に繋がるに違いない。

歓談の最中には、これも恒例となった餅つきが行われて、野町和嘉会長らによるつきたての餅が振る舞われ、さらに会の後半では、これも恒例となった福引が行われて、「カメラ雑誌 1 年分」「好きな交換レンズを 1 本」「最新技術によって印刷されたカレンダー」など、いかにも写真業界の人間が集う会らしい、手にすることに大きな喜びのある景品が数多く配られている。

会の最後には、高村達写真展事業担当理事によって第 45 回 JPS 展の開催がアナウンスされ、山口勝廣専務理事の閉会の辞で会が締めくくられた。遠来の会員も多く、参加することに存分な意義のある祝賀会は、こうして予定通り 19 時 30 分に終了した。

(贈呈式・授与式共に記／出版広報委員：池口英司)

撮影／出版広報委員：桃井一至)



会員相互祝賀会の記念撮影 (撮影／磯村浩一)



日本カメラ財団理事長 櫻井 龍子様による来賓祝辞



富士フィルムイメージングシステムズ 西村亨様による乾杯の発声



新名誉会員の熊切前会長と記念写真



受賞者と野町会長による恒例の餅つき



2019 年に受賞、出版、写真展等で活躍された会員



祝賀会会場での来賓の方々



恒例の福引抽選会では豪華景品が多数提供された



2020JPS 展のアピール

第29回「日本製鉄音楽賞」特別賞 舞台写真家 林喜代種さんが受賞

「日本製鉄音楽賞」とは、1990年に新日本製鐵(現・日本製鉄)の創立20周年と「新日鉄コンサート」放送35周年を記念して新日鉄音楽賞として設けられ、クラシック音楽の関係者を対象としている。フレッシュアーティスト賞はクラシック音楽の新人演奏家に贈られ、特別賞は「クラシック音楽をベースにした活動を行っている個人」を対象として贈られる賞であり、この賞を通して日本の音楽文化の発展と将来を期待される音楽家の方々の一層の活躍を支援することを目的としています。2012年度より、旧新日本製鐵と旧住友金属工業が合併し、新日鐵住金が発足したことで(2012年10月1日付)、同賞も「新日鐵住金音楽賞」と改称された。さらに2019年4月の社名変更で「日本製鉄音楽賞」に改称された。

第29回(2019年3月)にこの賞の特別賞を受賞されたJPS会員の林喜代種さんにお話をお聞きました。



特別賞、賞状を前にする林喜代種さん。
(写真提供・林喜代種)

◆特別賞受賞

日本製鉄音楽賞は、フレッシュアーティスト賞として、将来を期待される優れたアーティストを対象とした賞。選考方針としては、技術のみにかたよらず、音楽性、将来性を重視し、広い範囲から選出。その年の最優秀者を決定し、賞を贈られる。

特別賞は、クラシック音楽をベースにした活動を行っている個人を対象とした賞で演奏

家に限定せず、幅広いジャンルのなかから、音楽文化の発展に大きな貢献を果たした方に対して、賞を贈られる。

これまでに受賞されている方々は、ソプラノ歌手、ステージマネージャー、ピアノ調律師、音楽プロデューサー、音響設計者、演出家、写真家など多岐にわたっている。第29回特別賞受賞の林喜代種さんは、第18回特別賞受賞の木之下晃さんに続く2人目の写真家としての受賞になる。

今回、林喜代種さん受賞の経緯として日本製鉄音楽賞では、以下のようにコメントを出している。

特別賞 林喜代種 (舞台写真家)

今や誰もがスマートフォン(カメラ付き携帯電話)

で簡単に日常を撮る時代。そもそもカメラもフィルムからデジタル化となって久しく、機能の進化も驚異的なレベル。そういう時代だからこそ撮り手の情熱は必要不可欠で、林さんの写真から感じる熱量は音楽の現場そのもの。長きに亘って撮って来られた“瞬間”は、楽壇史であり、時に言葉以上の力を持つ。

(上田弘子選考委員)

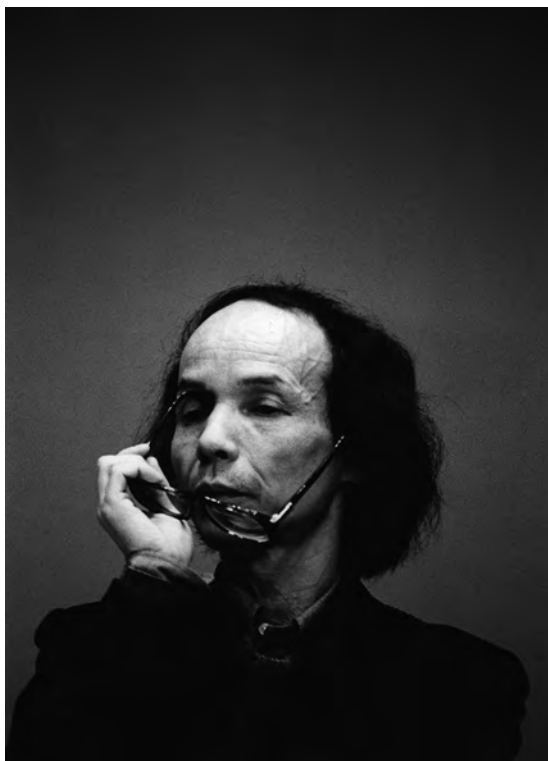
◆音楽分野の賞を写真家が受賞

「日本製鉄音楽賞」は、音楽家に焦点を当てた賞なんです。その中で特別賞として写真家である私が賞をいただけると聞いた時は、びっくりしました。私は、写真家であり音楽家では無いのですが大丈夫でしょうか?と聞き返しました。

音楽の表舞台ではなく、裏方の存在に目を向けてくれたのは本当に嬉しかったです。特別賞も今まで多くの、演奏家でない音楽関係の方が多く、写真に目を向けてくれたのは、第18回の木之下晃さんに次いで2度目の受賞という事もありがたい事だと思います。



1990年 レナード・バーンスタイン指揮者・作曲家「7月PMF国際音楽祭」撮影・林喜代種



1983年 武満徹作曲家「東西の地平音楽祭」撮影・林喜代種

私は最初からクラシック音楽の撮影をしていたわけではなく、報道写真の勉強で東松照明さんのゼミに所属していました。音楽の撮影を始めたのはたまたま音楽の撮影依頼がきた事から始まりました。

最初は、ポピュラー音楽やJAZZや民族音楽の撮影が主な仕事でした。音楽雑誌が中心の撮影で、1980年初頭からクラシックを扱う雑誌の仕事が多くなってきて、これまでに1万人以上の音楽家の舞台撮影をさせていただきました。その経験もあり、信頼していただける音楽家の方たちとも多く知りあえてありがたいと思います。

◆写真の撮り方の変化

今まで撮影してきた中で音楽家の手の動きなどを見ながらシャッターを押していた自分がいました。例えば指揮者の指揮棒の振りがかっこよく見える場面を注意しながら撮っていたんですが、ある時から私は人を撮っているんだと思い、音楽家の決めポーズ的な写真よりその場の雰囲気が出てくる音楽家の表情を撮るようになりました。

自分は可能であれば、音楽家に近寄って撮りたいという意識があります。例えば、その場の息遣いの感じられる距離感などを大事にしたいと思っています。毎回必ずそういった事ができるわけではありませんが、



1993年 エルンスト・ヘフリガーT & オーレル・ニコレfl「8月草津国際音楽祭」撮影・林喜代種

その距離感というのが大事だと感じています。

◆撮影時のこだわり

ストロボなどを使い綺麗にライティングされた写真をよく見ると思います。でも私はストロボを使わないんです。その場の雰囲気を大事にして撮りたいんです。よく私の写真は暗いと言われます。でも、無理に明るくしてもその人らしさが出てこないと思っています。シャッターを切るとすぐに写真を確認するカメラマンが多いと思います。私はあまり画面の確認をしません。ブレたりピントが甘くなったりする事もありますが、その時の味だと思っています。フィルム時代からの癖もあるのか、撮ってる時は画面確認する時間があるなら相手を見る事を大切にしたいと思っています。

(取材・撮影／出版広報委員：川上卓也)

林喜代種（はやし・きよたね）

大分県出身。大学卒業後に多摩芸術学園写真科に入塾して写真を学ぶ。1971年にカメラマンとして仕事を始める。『新譜ジャーナル』『深夜放送ファン』『音楽専科』等でフォーク、ロックの舞台撮影でディープ・パープル、デヴィット・ボウイ、ザ・フー



などの撮影を行う1974年にギター雑誌『ギター・ミュージック』ではじめてクラシックの撮影を始める。その後海外への取材も増え、国内では1980年に行われた第1回草津夏季音楽アカデミー&フェスティバルに参加。以後毎回撮影を担当して2019年には40回目の撮影を行っている。1980年初頭よりクラシック中心の舞台撮影家となり、今に至る。JPS会員。

キヤノン

デジタル一眼レフカメラのフラッグシップ機「EOS-1D X Mark III」を発売。キーデバイス一新により最高約20コマ/秒の高速連写と高精度AFを実現

「EOS-1D X Mark III」は、キヤノンにおける最先端技術や最高クラスの性能を備えたフラッグシップモデルのデジタル一眼レフカメラです。プロフォトグラファーはもちろん、動画も撮影するプロフェッショナルのニーズに応えるべく、高画質や高速連写、快適な操作性を高い次元で実現しています。

・新開発のフルサイズCMOSセンサー・映像エンジン「DIGIC X (エックス)」・AFセンサーを搭載

新開発の有効画素数約2010万画素フルサイズCMOSセンサーと、新映像エンジン「DIGIC X」やAF専用のセンサーなど、キーデバイスを一新し、基本性能が大幅に向上しています。これにより、AF・AE(自動露出制御)を追従させながら、光学ファインダー撮影において最高約16コマ/秒、ライブビュー撮影において最高約20コマ/秒の高速連写を達成しています。また、新たに開発したAFセンサー「High-res AFセンサー」を搭載し、最大191点(クロス測距点最大155点)の測距点から得られる高解像な信号を解析することで、光学ファインダー撮影時に高い合焦精度を実現しています。

・優れた動画性能

4K/60Pの高精細で滑らかな動画撮影に加え、YCbCr 4:2:2/10bit/Canon Logに対応しており、階調と色彩の再現性に優れた動画を内部記録することができます。

・プロのニーズに対応した通信機能と操作性

有線LAN機能や新製品の“ワイヤレスファイトランスミッター WFT-E9B”(別売り)を用いて、高速で安定した画像転送が可能です。また、カメラ本



体の外装部品に新構造を採用し、従来機種「EOS-1D X Mark II」(2016年4月発売)より約90g軽量化した質量約1,440gを達成しています。さらに、CFexpress用のダブルスロットを搭載しています。CFexpressカードの採用により、書き込み速度の向上とRAW+JPEGでも余裕ある連続撮影可能枚数を実現しています。

【問い合わせ先】

キヤノンマーケティングジャパン株式会社
キヤノンお客様相談センター

TEL: 050-555-90002

<https://canon.jp>

シグマ

世界最小・最軽量、フルサイズイメージセンサー搭載のミラーレス一眼カメラ SIGMA fp 発売



SIGMA fpはフルサイズミラーレスカメラとして、世界最小・最軽量。裏面照射型の35mmフルサイズ・有効2460万ベイヤーセンサーを採用し、高画質な撮影が可能です。堅牢性と熱伝導率の高さから前後カバーにアルミニウム合金を採用するとともに、本機の特徴にもなっているヒートシンク構造体、防塵防滴構造実現のため42ヶ所にシーリングを施すなど、あらゆる環境下での長時間使用に配慮した仕様になっています。小さなボディと高い適応性で、使うシーンに制約なくフルサイズ画質を楽しむことができます。

「いつでもどこでも、撮りたい時に撮れること」というコンセプト実現のためにメカシャッターレス構造を採用したことで、優れた静粛性を実現。限りなく無音に近い撮影が可能。これまでの一眼カメラではシャッター音がはばかられ撮影が難しかった場面でも、気兼ねなく撮影することができます。また、18コマ/秒での高速撮影でもシャッターショックは一切ないため、微細なブレまで排除した撮影が行えます。

加えて、連続的な作動によって性能変化が起きてしまう機械式シャッターが向かないことで、カメラ自体の信頼性も向上しています。

マウントにはショートフランジバック、大口径、高耐久性を特徴とするL

マウントを採用。交換レンズにはシグマの豊富なレンズ製品が選択できることに加え、ライカカメラ社、パナソニック株式会社とのLマウントアライアンスにより、他社のレンズ製品も撮影システムに組み込むことができます。さらに、SIGMA MOUNT CONVERTER MC-21を使用することで、SIGMA SAマウント、SIGMA製キヤノンEFマウントのレンズも利用でき、レンズ資産も有効に活用することができます。

Stillモード(静止画)とCineモード(動画)がスイッチひとつで瞬時に切り替え可能。各モードには専用に設計された操作系と画面が表示されているので、ストレスなくそれぞれの撮影に集中することができます。

SIGMA fp

価格: オープン

【問い合わせ先】

株式会社シグマ

担当: マーケティング部 桑山輝明

電話: 044-989-7432

メール: pr@sigma-photo.co.jp

製品情報

<https://www.sigma-global.com/jp/cameras/fp-series/>

ニコン

デジタル一眼レフカメラ D780、望遠ズームレンズ AF-S NIKKOR 120-300mm f/2.8E FL ED SR VR、Zマウント望遠ズームレンズ NIKKOR Z 70-200mm f/2.8 VR S を発売

D780は、像面位相差AFを採用しライブビュー撮影時のAF性能が飛躍的に進化した。光学ファインダー撮影時には、51点AFシステム・D5をベースにD780に最適化したAFアルゴリズム・最高約7コマ/秒の高速連続撮影などで快適な動画撮影を実現します。一眼レフカメラとミラーレスカメラのそれぞれ優れた部分を備えたデジタル一眼レフカメラです。1月24日発売。

AF-S 120-300mm f/2.8E FL ED SR VRは、ズーム全域で優れた光学性能・高い手ブレ補正効果・AF性能で、特にスポーツシーンでの撮影に最適です。2月発売予定。

NIKKOR Z 70-200mm f/2.8 VR Sは、約5.5段の手ブレ補正効果・開放でも周辺まで高い解像力・70mmでの最短撮影距離0.5mなど、Zマウントレンズならではの高い性能を備えています。発売予定日未定。

また、今回発売のレンズ2本には、青より波長が短い光を大きく屈折させる特性のSRレンズ(新開発)を採用し、高精度な色収差補正を実現しています。



【問い合わせ先】

株式会社ニコンイメージングジャパン
ニコンカスタマーサポートセンター ナビ
ダイヤル
TEL : 0570-02-8000
<https://www.nikon-image.com>

凸版印刷

「世界のブックデザイン 2018-19」
2020年3月29日(日)まで開催中

印刷博物館 P&P ギャラリーでは、
「世界のブックデザイン 2018-19」展を
開催中。

2019年3月に発表された「世界で
最も美しい本コンクール」の入選図書
11点に、日本をはじめ、ドイツ、オランダ、
スイス、オーストリア、カナダ、中国
7カ国のコンクール入選図書を加えた
およそ170点を展示しています。会場
では、各国のコンクール受賞作を実際
に手に取って確かめ、世界最高峰のブ
ックデザインと造本技術を楽しんでい
ただくことができます。

また2019年は日本とオーストリア
が国交を樹立して150周年にあたり、
これまでの受賞図書のなかから厳選し
た20点のオーストリアの本を紹介し
ています。



【開催概要】

会場：印刷博物館 P&P ギャラリー
入場料：無料

開館時間：10:00～18:00
休館日：毎週月曜日(2月24日は開館)、
2月25日(火)
アクセス：東京メトロ「江戸川橋駅」よ
り徒歩8分、JR、東京メトロ、都営地下
鉄「飯田橋駅」より徒歩13分、東京メ
トロ「後楽園駅」より徒歩10分

【問い合わせ先】

印刷博物館
東京都文京区水道1丁目3番3号
トッパン小石川ビル
TEL : 03-5840-2300(代表)
<https://www.printing-museum.org/>

ケンコー・トキナー

トキナー atx-m 85mm F1.8 FE

ケンコー・トキナーでは、トキナーレン
ズの新製品「atx-m 85mm F1.8 FE」を2



月7日(金)に発売いたしました。ソニー
Eマウントのフルサイズに対応するレン
ズで、メーカー希望小売価格(税別)
56,000円とお手頃価格を実現しながら
も、優れた描写性能や高品位な外装を実
現したレンズです。特に85mm F1.8とい
うスベックから、高いコントラストときれ
いな丸ボケを実現。フィルターサイズを
72mmと大口径に設定することで、画面
の隅まで口径食が少ないボケとしていま
す。レンズ前面にはトキナー独自のWR
(Water Repellent) コートを採用し、ホ
コリや水滴、指紋などがつきにくいよう
配慮。

AF駆動のモーターには、駆動音が静
かなステッピングモーターを採用するこ
とで、静かで早いAFを実現しました。外
装もトキナーらしいこだわりにより、金属
部品を多用した高級感のあるデザインと
しています。フォーカスリングのフィー
リングにもこだわりました。レンズ構成は7
群10枚、SDガラス(FK01)を後群に配
置することで色収差を補正しています。

CP+2020にも新製品として展示いた
しますので、ぜひご確認下さい。

【問い合わせ先】

株式会社ケンコー・トキナー
担当者：田原栄一
電話：03-6840-2970

FAX : 03-6840-2962
メール : etahara@kenko-tokina.co.jp
<https://www.kenko-tokina.co.jp>

イストテクニカルサービス

新賛助会員のご挨拶

イストテクニカルサービスは1989
年に設立され1996年よりカメラ修理
業務を開始致しました。会社名の由来
である「イスト」は、Pianist(ピアニ
スト)、Specialist(スペシャリスト)に用
いられる接尾語の「イスト<...ist>
=人」という意味が込められていま
す。企業は人なりと申しますが、扱う
物は機械でも、人にしか出来ない「気
持ちと心を込めて」仕事を進める事を
信条に全社員が努力し、邁進する会社
です。複数メーカーと認定契約を結び
メーカーの垣根を超えたメンテナ
ンス・リペアサービスを提供しており
ます。2019年12月よりJPSの賛助会
員に入会をさせて頂きました。一瞬の
時に勝負を賭ける写真家と機材に寄
り添い、微力ながら貢献できればと考
えております。

正規認定契約メーカー
Canon, Nikon, OLYMPUS
PENTAX, RICOH, Panasonic,
SIGMA, TAMRON, Profoto

【問い合わせ先】

イストテクニカルサービス株式会社



担当：伊藤
TEL : 03-5855-7577
FAX : 03-5855-7578
メール : info@isuto.co.jp
<http://www.isuto.co.jp>

(構成 / 出版広報委員：川上卓也)

「賛助会員トピックス」への寄稿ご案内

賛助会員の皆様には、会報に「賛助
会員のページ」を設け、トピックスやお
知らせなどの記事を掲載しています。
貴社のトピックスやお知らせなどがご
ざいましたら、紙面の都合上あまり多
くの文字数はとれませんが、貴社のニ
ュース並びにお知らせなどを寄稿下
さいますようご案内申し上げます。

進化を続けるカメラの 手ブレ補正機能を探る

手ブレ補正機能は、フィルム時代からカメラに搭載されてきたものであり、写真撮影に欠かせない技術のひとつだ。画素数が増えることにより手ブレ問題が大きく取り上げられ三脚必須ともいわれた。メーカーでも手ブレ補正を重視してどんどん進化してきている。手ブレ補正のメカニズムを理解することで、写真家の大きな武器になってくる。今後の手ブレ補正は、どのようになるだろう。

◆手ブレ補正機能のはじまり

フィルムカメラ時代から手ブレ補正は存在している機能であり、1994年にニコンフィルムコンパクトカメラ「ニコン ズーム 700 VRQD」、キヤノン双眼鏡「BINO 12 × 36 IS」などが手ブレ補正を搭載した。1995年にキヤノンが「EF 75-300mm F4-5.6 IS USM」一眼レフ用交換レンズで、はじめてレンズ内手ブレ補正を搭載した。

デジタル一眼レフでは、ボディ内手ブレ補正を、2004年にコニカミノルタが「α-7 Digital」で初めて内蔵 CCD シフト方式を搭載した。

◆手ブレ補正の種類

手ブレは、シャッターを押す時に身体とカメラと一緒に動いてしまい画像が鮮鋭に写らなくなる現象。また、最近では高画素化で1画素の大きさが小さくなり、拡大時に目立ちやすく、手ブレ対策が必要不可欠になってきた。

一般的にレンズの焦点距離分の1のシャッター速度で撮影するのが手ブレをしない基本といわれている。50mm レンズであれば1/60秒が目安とされている。50mm レンズでも1/30秒のシャッター速度になれば

ばブレる可能性が大きくなる。いろいろな場面においてそれが必ずしも見合っているといえない状況もあるが、その目安と自分の経験値から低限シャッター速度を決めるのが常識となっていた。手ブレはピンボケとは違いピントが合っている、合っていないに関係なく起こり、画像の鮮鋭さがなくなる。

手ブレと似ているが、同じブレでも被写体ブレがある。低速シャッター速度時に被写体の動きでブレるため、解決にはISO感度アップで対応するしかない。

●光学式

レンズや画像センサーを動かして手ブレを打ち消す方式だ。電子式手ブレ補正に比べて画像劣化が少ないのが特長である。

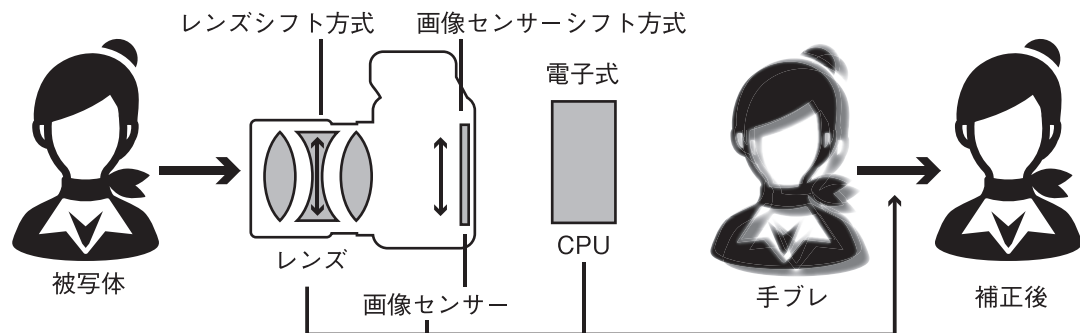
1) バリアングルプリズム方式

レンズと同じ屈折率の液体を2枚のレンズではさみ蛇腹状に動かしてブレ補正をしている。1992年にソニーの「ハンディカム CCD-TR900」に搭載している。

2) レンズシフト方式

レンズ本体にブレの動きを検知するジャイロセンサーを備えた補正レンズを組み込み、手ブレを打ち消す方向に補正レンズを動かすことにより縦・横の回転軸

手ブレ補正の基本的種類



のブレを補正する。ブレを補正された光がフィルムや画像センサーに届くことにより手ブレを解消している。1995年にキヤノン「EF 75-300mm F4-5.6 IS USM」がこの機能を搭載した最初の交換レンズとして登場した。

3) 画像センサーシフト方式

カメラ本体にジャイロセンサーを備え、手ブレを感知する。手ブレに応じて画像センサーを動かすことにより手ブレを補正する。

利点としては、どんなレンズを使用しても手ブレ補正が利用出来る反面、欠点として一眼レフなどの光学式ファインダーでは、ファインダー内でブレ補正の効きを確認出来ないことである。

画像センサーシフト式では手ブレ補正以外にも応用として埃を除去する機能や画像センサーを動かして複数枚画像データを取得して画素数を多くを多くした画像データを取得したりできる。GPSユニットと連動して星の動きを追いかける天体追尾撮影など各社各様に機能を持たせているのがおもしろい。2004年にコニカミノルタの「α-7 Digital」から始まり、オリンパス「OM-D シリーズ」、ソニー「α シリーズ」、パナソニック「G・S シリーズ」、ニコン「Z シリーズ」、ペンタックス「K シリーズ」など多くの機種に搭載されている。

4) レンズユニットスイング方式

ジャイロセンサーで手ブレを感知して、レンズと画像センサーまで含めたユニットごと動かして手ブレ補正する機能である。

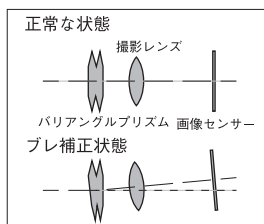
利点としては、ユニットごと動かすので光軸ずれや画質劣化がないことである。欠点はレンズ交換式カメラでは使用できないところや大型のユニットでは大掛かりになるので組み込むのが難しい。2005年コニカミノルタ「DiMAGE X1」に搭載されている。

5) レンズ・画像センサー併用型

レンズシフトと画像センサーシフトを併用してより強力な手ブレ補正を可能にしている。本体とレンズが両方とも対応している必要はあるが、かなり強力な手ブレ補正が実現される。デュアル手ブレ補正ともいわれ、大きな効果も得られるので、ミラーレス機では主流になりつつある。オリンパス「OM-D シリーズ」、パナソニック「G・S シリーズ」などが搭載している。

●電子式

撮影可能領域を一定のサイズに狭め、撮影の際にセンサー上の画像を一度メモリーに読み込み、次に撮影された画像と比較して像のズレを判断し、画素をずらすことで補正して記録する方式。メカ機能を必要としないためコンパクトに済むが、画像センサーの全ての領域を使えないという欠点がある。キヤノン「EOS R」(動画撮影時)などに採用されている。



1) バリアングルプリズム方式
液体部分が動く



2) レンズシフト方式例
縦回転軸・横回転軸



3) 画像センサーシフト方式例
縦回転軸・横回転軸・上下・左右・回転軸(5軸)



4) レンズユニットスイング方式
レンズユニットと画像センサーを一体で動かす。



5) 併用型例
縦回転軸・横回転軸・上下・左右・回転軸



電子式例
縦回転軸・横回転軸・上下・左右・回転軸(5軸)

メーカー・機種により様々な方式が採用されている手ブレ補正だが、これらの機能が撮影者の負担を大きく軽減し、画質向上に貢献しているのは疑いのないところだろう。

◆手ブレ補正の今後

手ブレ補正が搭載された初期のころは、望遠レンズの手ブレ補正をメインに考えられていたが、現在はカメラの高画素化によりブレが目立ちやすく手ブレ補正の要求度は高まっている。

今後手ブレ補正機能は、どのような進化が期待できるのだろうか。光学式では、ジャイロセンサーや機構部の進化でより強力な手ブレ補正が可能になるだろう。電子式の進化は、AI化による動体予測が可能になることも考えられる。また、画像処理に特化されたプロセッサーであるGPU搭載で演算能力が向上したソフトウェア処理がメインとなり、来たる8K動画撮影時の発熱なども考えると電子式の進化に期待するところも多い。

※写真・資料提供：キヤノン／オリンパス／パナソニック／ケンコー・トキナー

(記／出版広報委員：川上卓也)

セミナー研究会レポート

◆ 2019 年度第 1 回著作権研究会報告 ◆

写真著作権基礎講座 「もっと知ろう写真著作権」

2019 年 11 月 21 日 (木)

JCII ビル 6F 会議室 参加者 57 名

講師：上野善弘 (日本ユニ著作権センター相談員)

始めに、写真の著作権の変遷とその保護期間について解説され、日本で初めての写真に関する法律「写真条例」明治 9 年(1876 年)制定から明治 32 年(1889 年)旧著作権法制定、そして同年にベルヌ条約に加入し国際舞台にデビュー。その後、戦後の混乱の時代を経て現行著作権法昭和 45 年 (1970 年) が制定された。しかし、他ジャンルの保護期間が著作者死後 50 年に対し、写真の著作権は公表後 50 年とされ、保護期間の延長が大きな課題となる。延長問題は平成 8 年 (1996 年) の改正で他の著作物と同じ著作者の死後 50 年となった。その後条約 (TPP11 協定) により 2019 年(平成 31 年) 1 月施行から、著作者の死後 70 年になった。

これらの変遷が写真家たちの主張と運動によってなされていったと強調された。

次に写真家が著作権を強く主張した代表的な裁判を二例解説された。一つは白川義員氏が提訴した「パロディー、モンタージュ写真事件 (合成写真裁判)」をスライドを使い詳しく紹介した。複製権、同一性保持権、氏名表示権侵害事件として 16 年後 (1971 年から 1987 年) 決着。この裁判で、「引用」の具体的な要件を明示した最高裁判決を導き出した。

二つ目は黄建勲氏が提訴した「スイカ写真事件」をスライド写真を使い解説した。似たような写真を裁判所がどう判断したか、特異な事件で、東京地裁は請求棄却で侵害はないと判断、二審の東京高裁は複製権侵害とした。最高裁は上告棄却で、結果東京高裁判決が確定した事件である。一審の判断は二つの写真を比べて特段の事情がない限り、本質的特徴部分が共通するか否かを考慮して判断する必要があるが、翻案権侵害、同一性保持権侵害はないと判示した。それに対して二審は一審の判断を受け継ぎながらも著作権法上の保護に値する独自性が与えられる場合には被写体の決定自体における、創作的な表現部分も考慮しなければならないとし、被告写真は、原告(黄建勲)の改悪、すなわち改変で同一性保持権侵害とした。法的には複製権侵害となると解説された。実はこの判決については、一部の学者や写真家の間から、裁判所は言い過ぎなのではという意見があった。なぜなら、写真は複製による表現という宿命を負っている。そのすべてに創作的表現を求めるのは行き過ぎなのではという意見だ。



最後に質疑応答の時間を設け、講師が著作権相談員ということもあり、たくさんの方々から質問があり、法律解説本を読まずに著作権法が判る、聞いて覚える著作権法が実践できたと感じている。

(記／堀切保郎、撮影／佐藤昭一)

◆ 2019 年度第 1 回国際交流セミナー報告 ◆

「ポートフォリオレビューへの道」 海外での売り込みにチャレンジ!

2019 年 12 月 6 日 (金)

東京ウィメンズプラザ 1F 視聴覚室 参加者 30 名

講師：上原ゼンジ (実験写真家)

今回のセミナーは JPS 会員をはじめとする日本の写真家たちが「自分の写真作品を売りたい」と思いながらも、絵画などのファインアートのように写真を作品として売買する文化が成熟していない日本国内では思うようにいかない。欧米の方が写真を売るチャンスが大きいことは分かっているのだが「どのようにアプローチしたら良いのか分からない」といった疑問を解決することによって、少しでも海外ポートフォリオレビューのハードルを下げることを主旨としている。

上原氏のプレゼンテーションは、ご自身の体験談を基に、取り組んでいるプロジェクトや作品を織り交ぜながら進められた。元来、雑誌の編集者であった上原ゼンジ氏が写真を始めた契機にまで遡り、「超芸術トマソン」の探査に携わっていたことや、オリジナリティーの追求による「宙玉レンズ」や「万華鏡カメラ」の開発など興味深い話が続いた。

ポートフォリオレビューに参加するにあたり、どのような準備をするのか、申し込み方からレビューアーのリサーチ、航空券や宿の手配といった詳細まで解説があり、さらにはレビューアーとのやり取りを想定した会



話の練習までしていたことを話された。初めて参加されたときの失敗談を交え、オンライン英会話での勉強方法や Web を活用した翻訳の方法などを解説いただいた。また、実際に持参されたポートフォリオの作り方や資料の作り方など、プリントのティップスまでを含めて話していただいた。

つづいて実際のポートフォリオレビューがどのように進行するのか、レビューアー 1 人あたり 20 分という制限のある中で、いかに効果的にアピールすれば良いのか、また会場の雰囲気などを伝えていただき、レビューアーが求めているもの、どのような写真が評価されているのかなど、上原氏なりの分析とともに、実際に高額で取引されている作品を紹介いただいた。

最後に、ポートフォリオレビューに参加したことにより、レビューアーにアピールするだけでなく自分のプロジェクトを見直すことができ、海外の情報にアクセスすることにより、世界が広

がったとのこと。

単純なレポートに留まらない、上原氏のお話は非常に興味深く、聴講された方々には大変参考になるセミナーとなった。

(記・撮影／増田雄彦)

page2020 オープンイベント

◆日本写真保存センターセミナー◆

写真原板データベースとジャパンサーチとの連携

ー写真原板のより広い活用を目指してー

2020年2月5日(水)

池袋サンシャイン文化会館 7階 710号室 参加者：63名

講師：中川紗央里(国立国会図書館電子情報部)

電子情報企画課)

河原健一郎(日本写真保存センター調査員)

はじめに日本写真保存センター代表 田沼武能より、立ち上げから13年経った日本写真保存センターの現状と原板保存の必要性が語られ、活動への支援と協力をお願いする旨の挨拶があった。

今回のセミナーでは、日本写真保存センターが公開し



ているインターネット上のデータベース「写真原板データベース」が、2019年10月より国の分野横断統合ポータルである「ジャパンサーチ」と連携を開始したことについて、講演前半では「ジャパンサーチ」とはどのようなもので何を目的とした取り組みなのかを、現在試験版のシステムを運用している国立国会図書館電子情報部の中川紗央里さんが説明された。

「ジャパンサーチ」とは、様々な分野のデジタルアーカイブと連携して、我が国が保有する多様なコンテンツのメタデータを検索できる「国の分野横断統合ポータル」である。ジャパンサーチが集約したメタデータは、利活用しやすい形式で利用者に提供され、コンテンツの利活用を促進する基盤にもなるとのこと。メタデータとは、コンテンツの内容や所在等について記述したデータのことで、例えば図書館の書誌データや博物館・美術館の収蔵品の目録データなどのことを言う。写真では、いつどこで誰が何をどうした、といった画像に添えられた文字データにあたるものだ。

また、これは「知的財産推進計画」等に掲げられている国の取組であり、「デジタルアーカイブジャパン推進委員会・実務者検討委員会」(事務局：内閣府知的財産戦略推進事務局)の方針のもと、国立国会図書館が試験版(2019年2月公開)のシステムを運用している。今後の開発スケジュールとしては、2020年夏頃の正式版公開を目指し、現在、連携拡大、機能の開発・改善に取り組んでいる。

今回、日本写真保存センターの「写真原板データベース」と連携した事で、他館が公開している様々な資料とを同時に検索・閲覧することが可能になり、写真原板資料を今までよりも幅広い層の方に、様々な方法で利用いただけるようになるとのこと。

説明では、実際にキーワード検索から探した画像を基に、利活

用に向けたデジタルコンテンツの二次利用条件や著作権の扱いに関しても言及された。

また地方の市町村において、趣味で撮られた写真を集めて資料として保存する活動が各地で行われており、日本写真保存センターからノウハウや情報を提供していただければありがたいとの提案もいただいた。

休憩を挟んでの後半では、日本写真保存センター調査員の河原健一郎氏から「写真原板データベース」の特徴と、連携により見えてきた課題についての講演が行われた。

まず写真原板とはどのようなものかの解説から始まり、なぜ写真原板を収集・保存しているのか、について説明がされた。

日本写真保存センターでは、いつどこで誰が何をどうした、といった情報を大事にしていきたいという思いがある。写真は新聞や雑誌に利用されるにあたり、より記事に見合ったセレクトやトリミング・焼き込みなどがなされ、解釈が限定されて掲載されている場合が多々ある。対して、写真原板には撮影者と被写体との関係性や被写体の有りのままの状態が記録されている可能性が高いと言え、35ミリフィルムであれば選ばなかった一連のコマの中に別の貴重な情報を見ることもできるという。

次に「写真原板データベース」の特徴について説明し、検索機能について実際の画像を基に解説した。管理用データベースの説明では、「コマ情報」として、いつ、どこで、誰によって、書籍情報、被写体カテゴリー等を、「ホルダー情報」として、書かれた文字、フィルム種別、劣化情報等を、「資料群情報」として、来歴、現秩序、大まかな撮影内容、権利者情報等を管理しており、公開用「写真原板データベース」へはこの中の「コマ情報」をデータ変換して利用している。

「ジャパンサーチ」との連携では、管理用データベースのメタデータを変換して「ジャパンサーチ」にアップロードし、検索された画像は「写真原板データベース公開サーバー」の公開画像データとして画像参照することで利用することができる。

連携を通じて、公開データの表記の統一やデータクリーニングを行うきっかけとなったり、写真原板データベースへのアクセス数が連携前より増加したなど、情報公開の間口が広がった印象である。

連携をきっかけに写真原板資料の重要性や利用価値を広くアピールし、写真原板の保存と利活用の促進を図ってゆきたいと語った。

講演後の質疑応答では、非公開を希望する写真原板の収集に関する事項や収集・保存する作品・作家の選定について、将来的にデジタル画像データ収集・保存の可能性についての質問があり、活動に対する関心の高さがうかがえるセミナーであった。

(記・撮影／小池良幸)





Message Board



◆関 一也 (2019 年入会)

11月30日に『ポートレートRAW 現像入門』関 一也(著)がamazon、玄光社より発売されました。1クリックでかんたん・きれいな写真の作り方をテーマに「きれいな」効率的に仕上げるテクニクを紹介するものです。Adobe Lightroom Classic CC、Photoshopのソフトを使用し、ポートレートRAW 現像に使う時間を短縮し、プラスαのタッチテクニックを合わせて紹介しています。



(長野県中野市在住)

◆小橋健一 (1979 年入会)

地区まちづくりの施工が私たちの生活エリアにも目立つようになってきた。道路拡張工事が始まっている。10年と言われている工事だがここへ来て家屋の解体工事が顕著だ。その中で重機も入れず丁寧に手渡しで解体を進めている5人の作業員に出会う。聞きなれない言葉が飛び交っているのが主任に声をかけた。何処から?トルコだよ。僕、日本語大丈夫! 咄嗟にフレンドシップと返した。僕たちもと、切り返された。

明治23年、和歌山県串本町沖合でトルコのエルツールル号遭難の際多くの日本人に救助された事にトルコの人は感謝の念を抱いているという。彼らはその事を良く知っていて友好的である。これからはトルコ人だけでなく外国の勤労者と現場で会う機会が多くなる。ファミリーオブマンの精神で歓迎したい。(東京都江戸川区在住)

◆中田 昭 (1980 年入会)

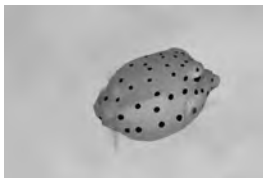
「生涯の撮影テーマ、祇園祭」
昨年(2019年)、日本三大祭りのひとつ「祇園祭」が始まって1150年の節目を迎えました。この八坂神社の祭礼が始まったとされる869(貞観11)年は、京都に疫病が大流行し、東北地方では先の東日本大震災のような大きな地震が起きるなど、不安や恐怖が全国に蔓延した年でした。そこで、平安京の「神泉苑」に、当時の諸国の数である66本の矛を立て、疫病退散や天変地異の鎮まることを願って「祇園御霊会」が行われたのが始まりとされています。京都の山鉦町内に生まれ育ったため、毎年夏に巡っ



てくる祇園祭をテーマに撮影するようになったのも自然のなりゆきでした。山鉦巡行と神幸祭を中心とし、ひと月も続く祭りの姿を写真と解説で『京都 祇園祭(改訂版)』として出版いたしました。(京都府京都市在住)

◆吉野雄輔 (2001 年入会)

8年ぐらいい止まっていた「幼魚大図鑑」が再スタートした。魚の成長段階、幼魚のステージを何段階も細かく出す図鑑です。A4で、700P、写真の使用点数は、6000~7000点ぐらいいになる。写真を撮るだけではなく、地球生命の星博物館の魚類学者・瀬能先生と同定作業もやっているから膨大な時間&エネルギーが かかっている。図鑑としての集大成という気持ちで、がんばっています。写真は、かわいい表情のミナミハコフグの赤ちゃん。(東京都世田谷区在住)



◆諸河 久 (1982 年入会)

『モノクロームの軽便鉄道』を上梓
2018年9月に「JCIフォトサロン」で「諸河久 作品展/軽便風土記」を開催した。開催前に「半世紀以上前に廃止された軽便鉄道など忘れ去られている」という疑念は、来場者の作品に注がれる熱い視線や、当時の体験談を熱心に聞き入る姿勢で払拭された。写真展開催中にもっと中身の濃い「軽便鉄道の写真集」の要望が数多く寄せられた。そんな愛好者の声援が励みになり、本書の上梓を思い立ち、2019年の暮れにイカロス出版から上梓の運びとなった。

全国の軽便鉄道を渉猟したのは学生時代だった。大半の作品はアマチュアの域を超えるものではないことは承知しているが、フィルム投影された絵柄は、かけがえない記録なのだ。当時のモノクロ作品を最良のコンディションで現在に蘇らせる。そのために「デジタルリマスター」の技術を磨いてきた。前出の写真展や本書は、デジタルリマスターの経験値を結実させた成果となった。(東京都中央区在住)



◆池 英文 (1968 年入会)

PICOの時代
1980年代の東京表参道に、名誉会員であった故伊藤則美さんの

gallerycafe PICOがあったことをどれだけの方が御存じでしょうか。

実は30年住んでいる古マンションを少し片付けたところ、1989年4月の小生の個展オープニングパーティーの写真ALBUMを見つけ、大変懐かしうこの文を記す事となりました。



PICOの正確な開店と閉店の日時は不明ですが(資料が小生の手元にあるはずですが出てきません)、ギャラリーの名誉ある1番バッターとして登場することを依頼されたのが初めてでした。

添付の集合写真に登場の方は以下のとおりです。(敬称略) 前列右から、BAKU 斉藤、望月剛、故高村規、和木光二郎、山口勝彦、池英文、三恵子、故藤川清、福永一興、故伊藤則美、福田文男、1人おいて2列目、故三輪徳二郎、鶴田照夫、2人おいて加藤夫人、故嶋田和門、鈴木實、竹上正明、1人おいて飯島幸永、3列目、加藤穰二(高校の同級生)、伊藤新一(クリエイト)、加納恒彦、神吉猛、森一六正、3人おいて、最後列、熊谷正、その他名前の不明の方、顔の良く見えない方ゴメンナサイ。

(東京都世田谷区在住)

◆今森光彦 (1986 年入会)

『光の田園』
比叡山と琵琶湖の間を真東西に横たわる棚田地帯を、「光の田園」と名付け写真撮影で頻りに訪れるようになったのは40年以上前のこと。そこには、田んぼ、雑木林、ヒノキ林、ため池、川などがそなわり、理想的な里山自然が息づいていました。

この本は、近年私自身が農家になり「光の田園」にある荒れ地を開墾し農地をとり戻そうと悪戦苦闘する話が軸になっています。また、それと並行して展開される環境活動についても触れています。

とどめなく続く里山への挑戦は、土地を愛し、生命を敬う気持ちのあらわれで、私にとっては、写真作品と同じように自己表現としての意味があります。(滋賀県大津市在住)



◆高砂淳二 (2015 年入会)

高砂淳二写真集『PLANET of WATER』日経ナショナルジオグラフィック社・2400円+税(2019年7月発売)

地球の2/3を被う水は、海水、雲、雨、雪、氷と形を変えながら循環し、地球に暮らす僕ら動植物の命を育んでいます。南極の巨大氷山から、



轟音とともに流れ落ちる瀑布、熱帯雨林に降り注ぐ豊かな雨…。そして、そんな水を味方につけて悠々と泳ぐクジラ、雪に守られて暮らすホッキョクグマ、しっとりと嬉しそうな鳥や植物たち…。美しい水の姿を、極地から熱帯まで追い求めてまとめたのが『PLANET of WATER』です。

僕ら人間の体の約2/3は水でできていて、いつも地球の水が入れ替わっています。地球と、そこで暮らす僕ら生き物にとって、地球上の水は自分の体液と同じであり、地球と僕らは一体な体なのだ、ということをも、肌で感じていただける1冊です。

(東京都渋谷区在住)

◆江成常夫 (1970 年入会)

「いのちの証」としての遺品と遺構
アジア太平洋戦争に写真の軸を決め、その文脈のもと広島に立って四半世紀になる。被爆体験者の亡くなった人々を弔う心に触発され、被爆地に死者の御霊(みたま)を重ね、『ヒロシマ万象』(新潮社・2002年)で原爆悪の視覚化を試みた。

広島、長崎の原爆資料館には膨大な数の遺品が収集されている。人類の存



亡のかかわる核兵器の廃絶は写真の普遍的テーマである。閃光で焼かれ、ぼろぼろになった衣服、溶けたガラスに付着した人骨―。原爆投下の目標とな

った軍都の広島、兵器工場の町、長崎の遺構。これらはみな被爆死した人たちの「いのちの証」と言っても過言ではない。今回の「被爆ヒロシマ・ナガサキのいのちの証」(小学館)では鎮魂をもって原爆悪のリアリティーに務めた。

(神奈川県相模原市在住)

◆増田彰久 (1971 年入会)

イギリスにはカントリー・ハウスと呼ばれ一群の建築がある。16世紀後半から20世紀初頭にかけて、貴族たちが自らの権力を誇示し、自分流の暮らしを楽しむために広大な領地に建てた邸宅のことである。

1989年から20年間にわたり、毎年のように英国貴族のカントリーハウスを訪ね、撮影の旅をやってきた。イングランドからスコットランドへと豪壮な数多くの邸宅を巡った。外観のみならず、グレート・ホール、サルーン、ロングギャラリー、ライブラリー、ダイニング、

ベッドルーム、そして、キッチン、ランドリーまで全てを自由に撮らせてもらった。これらの写真からイギリスが育んできた伝統文化の豊かさやその背後にあるものまで感じとっていただければ幸いである。



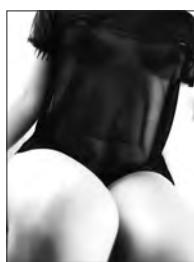
(東京都町田市在住)

◆秋田好恵 (1967 年入会)

「秋田好恵村尾昌美二人展」

3月23日～28日 銀座ギャラリー風
今回、私は「はたち」というテーマで海外のお嬢さんを撮影した作品を展示いたします。今の自分を残したいという彼女の思いは、ヌードもいとわない自由さと覚悟をもっておりました。

私は彼女が帰国するまでの一年の間、折々で撮影をしてきました。そのコラボレーションともいえる沢山の写真を使って、「はたち」をマスとして表現する展示にチャレンジいたします。どうか足をお運びいただけますようお願い申し上げます。



(東京都港区在住)

◆岡崎裕武 (2001 年入会)

「攀登者・クライマー」

1960年中国探検隊が、エベレストに登った時の過酷な体験の物語である。中国の山は中国人が自分で登らなければならないと言う国家プロジェクト究極の使命感の中国の登山チームが1960年世界で初めて北東陵からエベレストの登頂に成功したという実際にあった快挙を描いた物語である。

撮影場所は、中国天津市薊州区(けいしゅうく)郊外にある採石場で撮影した。人工雪、その他から体量の雪をコンテナで運んだ。スチールカメラマンの1日は1人で、A組早朝05時から19時、B組17時から翌朝05時まで撮影時間帯でA.B組をまたいで勤務時間と昼間の気温がマイナス12～15℃、夜中から朝方までが一番辛い時間と待機時間と振り直しをし、20回はザラ。撮影中には監督、助監督、演技指導

一部始終の記録を撮影。撮影中は休みはありません。撮影中は有名な俳優さん達の激励や差し入れには、励まし、力、暖かみを憶えました。

又ある日、ジャッキー・チ



エンさんのスタントマン一行が励ましにやって来てくれ毎年恒例の抽選会を開き500名からのスタッフ全員に喜びをくれました。ちなみに僕は、中国元2000元(日本31000円)が当たりました。

この撮影に参加出来た事は今振り返れば大変な仕事であったが貴重な経験でした。(埼玉県朝霞市在住)

◆水野克比古 (1976 年入会)

写真集『永観堂禅林寺』

青菁社 2,000 円 + 税

京都の永観堂禅林寺は、平安時代初期より紅葉の名勝地として知られる古刹です。東山山麓の起伏に富んだ広大な境内に、伽藍・庭園が広がり、本尊「みかえり阿弥陀仏」をはじめ諸仏・文化財が数多く存在します。水野克比古・秀比古・歌々の3名は2017年11月から2019年4月までの期間に200日近く訪れて、四季折々の風景、行事、仏像、文化財などを、各自の個性を生かしつつ、切磋琢磨して撮影に取り組みしました。

カメラは全てパナソニック社ルミックスを使用、その結果を1冊の本にまとめました。1000線相当の彩度豊かな超高精細印刷方式を採用し、特にルミックスカメラのハイレゾモード撮影の細密描写とのマッチングは、他には類を見ない素晴らしい出来上がりです。その結果、当寺の自然と人工とが織りなす美しい魅力を表現し得たと自負しております。どうかお手に取り、御高覧ください。

(京都府京都市在住)



■原田 寛 (1996 年入会)

鎌倉の自然や歴史、文化をテーマに、40年以上撮影を続けてきましたが、ここ20年ほどは、京都・奈良にも撮影エリアを広げてきました。三大古都を並行して撮影していると、それぞれの地勢や歴史・文化の違いが感じられて、鎌倉だけに集中していた時期とは被写体への接し方も微妙に違ってきているように感じます。昨年、三古都のサクラをテーマとした『古都櫻』を上梓し、東京と京都で写真展を開催いたしました。今年3月25日(水)～29日(日)の会期で、奈良県文化会館で開催することになりました。

日頃あまりお付き合いする機会のない関西地区の方々とも、この機会にお目にかかれればと期待しています。



(神奈川県鎌倉市在住)

JPS ブック レビュー

協会に寄贈された会員の出版物を到着順に掲載致します。
(2019・9月～12月)

- ①発行所 ②発行年月
③サイズ (タテ×ヨコ)、頁数
④定価 ⑤寄贈者
⑥電子書籍ストア



銀座ジャック 再び! 写真で銀座

編著・日本建築写真家協会

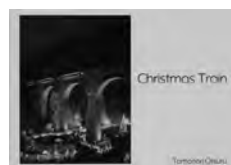
- ①鹿島出版会 ②2019年9月
③30.3×21.7cm、112頁
④3,000円 ⑤小川泰祐氏



・京・瞬・歓・

中田 昭

- ①京都新聞出版センター
②2019年10月 ③21×18.2cm、160頁 ④1,800円 ⑤中田氏



Christmas Train

大鶴倫宣

- ①大鶴倫宣 ②2019年11月
③18.2×25.7cm、60頁
④一円 ⑤大鶴氏



京の彩り 地

橋本健次

- ①青葙社 ②2019年10月
③14.8×20.3cm、112頁
④1,600円 ⑤発行所



Jolie Jolie

中村路人

- ①フォトアドバイス ②2019年9月
③28.8×21.7cm、104頁 ④3,800円
⑤中村氏



広告写真館

白鳥真太郎

- ①玄光社 ②2019年11月
③29.7×22.5cm、320頁
④5,300円 ⑤白鳥氏



丹波篠山

一美しき里の四季ー

山本治之

- ①山本治之 ②2019年11月
③25×25.7cm、120頁 ④2,600円
⑤山本氏



昭和の記憶

迫 幸一

- ①迫青樹 ②2019年9月
③25.7×18.2cm、120頁
④3,000円 ⑤迫青樹氏



日本夜景遺産 15周年記念版

丸々もとお、丸田あつし

- ①河出書房新社 ②2019年10月
③17.8×24.7cm、160頁
④2,600円 ⑤発行所



ドキュメント 朝鮮で見た<日本> 一知られざる隣国との絆

伊藤孝司

- ①岩波書店 ②2019年4月
③18.8×13cm、224頁
④2,200円 ⑤伊藤氏



モノクロームの軽便鉄道 写真で巡る1960年代

諸河 久

- ①イカロス出版 ②2019年12月
③25.7×18.2cm、168頁
④2,300円 ⑤発行所



THE CLIMBERS

撮影・岡崎裕武

①上海世紀出版集團 ②2019年9月
③23.5×15.5cm、360頁
④85元 ⑤岡崎氏



英国貴族の城館

増田彰久

①河出書房新社 ②2019年11月
③30.3×22.7cm、286頁
④15,000円 ⑤増田氏



広瀬川

一水は巡り 人は巡り会うー

大沼英樹

①プランニング・オフィス社
②2019年7月 ③18.2×25.8cm、
135頁 ④3,000円 ⑤大沼氏



未来へ架ける 世界の子ども

田沼武能

①クレヴィス ②2019年12月
③26.4×19.3cm、240頁
④2,500円 ⑤田沼氏

寄 贈 図 書

田中良知様.....SUPER OLD
狩野 萌様.....MARIA Y MEGUMI SOUTH AMERICA
金子裕昭様.....生きる強さ
百々俊二様.....空火照の街
金本凜太郎様.....junk foods
JCH フォトサロン様.....富山治夫・佐渡島
.....日本カメラ博物館 30 周年記念 JCH フォトサロンコレクション展
東京都写真美術館様.....イメージの洞窟：意識の源を探る
.....山沢栄子・私の現代
.....至近距離の宇宙 日本の新進作家 vol.16
交通新聞社様.....寺本光照・こんなに面白い！近鉄電車 100 年
.....加藤俊徳・脳にいい！通勤電車の乗り方

求龍堂様.....鳶谷典子・夢の翳 塩谷定好の写真 1899-1988
JAGAT 様.....印刷白書 2019
JAGDA 様.....シンボルマークの創作と法的保護
しまね文化振興財団様.....並河萬里撮影フィルム目録
日本写真協会様.....日本写真年鑑 2019
小学館様.....岡塚章子・金子隆一・説田晃大・
国宝ロストワールド 写真家たちがとらえた文化財の記録
日本写真作家協会様.....2019-2020「JPA 作品集」
オリンパス㈱様.....オリンパスの 100 年 1919-2019
日本カメラ社様.....T.T. たなか・
ENCOUNTERS V _ VI _ VII グアドループ・カリブ・ラトビア・台湾

受賞おめでとうございます。今後ますますの活躍をご期待申し上げます。



■「令和元年文化勲章」受章 2019年11月3日

受章者：田沼武能（1950 年入会）

永年にわたる写真家活動に対して。

■「2019 年度朝日賞特別賞」受賞 2020年1月29日

70 年にわたる写真家活動と、写真界への多大な貢献に対して。

Topics

1. Takeyoshi Tanuma received the Order of Culture.

November 3, 2019, Takeyoshi Tanuma, received the Japanese Order of Culture. He has been a photographer for more than 60 years, and he had served as chairman of Japan Professional Photographers Society for over 20 years. He has also been instrumental in the copyright movement of Japanese photographers. He became the first person in photographers who received the prestigious Order of Culture.



Courtesy of SANKEI SHIMBUN

2. Three honorary members of JPS passed away

In the last three months, we lost three honorary members of JPS, who made significant marks in the Japanese photography world after the war. Shiro Shirahata passed away on Nov. 30 at the age of 86. Toyoko Tokiwa passed away on Dec. 24 at the age of 91. Ikko Narahara passed away Jan. 19 at the age of 88. Shiro Shirahata, an alpine photographer, had pursued to capture Mt. Fuji, the most iconic landmark of Japan, Southern Alps, and other beautiful mountains. Toyoko Tokiwa was one of the pioneers of female photographers in Japan. Her book of text and photographs, *Kiken na adabana*, portayed the red-light district of post-occupation Yokohama with US was highly appreciated. Ikko Narahara made a new wave in the Japanese photography world. His masterpieces are "Human Land: Island without Green, Gunkanjima", "Kingdom/ Domains", and more. We appreciate our forerunners for their contributions to the Japanese photography world and pray their souls may rest in peace.

Text By Kuwabara Shisei (Director),

Translation by Masuda Takahiko (International Relations)

About the Japan Professional Photographers Society

The Japan Professional Photographers Society was established in 1950. Through its activities it strives to define the role of the professional photographer and secure copyright protection while working to develop photographic culture. In 2001 it received recognition as an Incorporated Body from the Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology, in March 2011 it was officially recognized as being a Public Interest Incorporated Association by the Prime Minister's office, and since April 1 of that year it has been active under the title, Japan Professional Photographers Society, Public Interest Incorporated Association.

Since its foundation, the society has succeeded in receiving an extension for the period of copyright protection (to 50 years after the death of the artist), held numerous exhibitions concerning photographic history and expression (*A Century of Japanese Photography*, *History of Japanese Contemporary Photography*, *Sixty Years of Japanese Children, Women, etc.*), and published numerous books on photographic history and collections of photographs. In order to contribute to the promotion and development of photographic culture, it holds the JPS Exhibition as an open exhibition, presents a nationwide Photography Study Pro-

gram for elementary school students, the Photo Forum that aims to develop photographic expression, Digital Photography Lectures for the advisors of high school photographic clubs, and presents the Yonosuke Natori Photographic Award to uncover and foster new talent. At the same time, it carries out a wide range of activities to contribute the development of photographic culture, such as: cultural exchange with overseas photographers, PR through publishing and information dissemination via the Internet.

Furthermore, it presents the Japan Professional Photographers Society Award in recognition of individuals or organizations who have achieved notable achievements in the development of photographic technology, education, or critique.

The Japan Professional Photographers Society has devoted itself to the establishment of photographic museums, such as the Tokyo Metropolitan Museum of Photography, and is currently actively working towards the creation of the 'Japan Photographic Preservation Center' (archive) for the collection and preservation of original photographs.

Japan Professional Photographers Society

JCII Bldg. #303, Ichibancho 25, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0082

Tel: +81-3-3265-7451 Fax: +81-3-3265-7460

E-mail: info@jps.gr.jp Web site: <http://jps.gr.jp/int/index-e.html>



白簾 史朗 名誉会員

2019年11月30日、腎不全のため逝去。86歳。

平成10年(1998年)入会、在籍21年。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

昭和26年、18歳の時より写真の道に入り岡田紅陽氏に師事、昭和37年には山岳写真家として独立宣言をされた。その後は日本及びネパールヒマラヤ、ヨーロッパアルプス、北米ロッキーなど世界各地で撮影を行い平成7年から5年間で日本百一名山を取材した。また、山梨県早川町、福島県松枝村その他に山岳写真館を開設している。日本を代表する山岳写真家の一人であり、山梨県から文化功労者表彰、県政特別功労者表彰を受ける。こうした功績を讃え名誉会員に推挙された。

白簾史朗さん追想

川口 邦雄

彼を語る上で、述べなければならない基調は南アルプス(日本)であろう。南アルプスをご承知の通り実に深々とした森林におおわれた巨峰群である。日本の高山でやや南方に位置するために有数の高峰を含むアルプス(高峻山岳)といえども深い森林におおわれている。ということは山稜(2,800m)に至るまで深々とした見通しのない森林帯を体験することを意味する。彼はこの山の撮影に没頭した。だからその登高はまさにそれは撮影は挑戦であってその根性的体力の強さは後日ヒマラヤ登山に於いても一目おかれるほどであった。つまり深い森林帯こそは作品制作の精神的要因の重要な意義であったにちがいない。この深々とした森林帯の意味は彼の心に深く達していたにちがいない。のちのTVインタビューの中で「南アルプスは地味な山というけれど、私はこれを滋味な山というべきですね」と語ったがこれはインタビュアーむけのわかりやすいコトバで、

実は彼は南アルプスの本当の意味をもっと心から知っていたにちがいない。いや当然知っていて滋味というにはもっと心的な深い深い森林感情があったはずである。実はその点をもっとハッキリと聞きたかった。彼の南アルプス心情のもっと先にあるのは、もっと山の深いコトバだっただろう。

今はそれを聞くことはできないが、もっと原生林の思考をもっと聞いてみたかった気持ちである。いずれはコトバで出てきたことだろうそれを聞けなかったのが心残りである。



常盤 とよ子 名誉会員

2019年12月24日、誤嚥性肺炎のため逝去。89歳。

昭和34年(1959年)入会、在籍59年。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

常盤さんは、1956年に銀座の小西六ギャラリーで写真展を開催、横浜の赤線地帯で働く女性たちを撮った作品を発表された。この写真展の作品は当時の社会に大きな衝撃を与えた。占領下の横浜で「働く女性」に焦点を当てた写真群は、時代を象徴する作品として評価され、横浜文化賞や文化庁長官賞などの栄誉に輝いた。こうした功績を讃え名誉会員に推挙された。

ハマの敗戦後、占領下の映像化の証言者 小川 忠宏

常盤さんとの出会いは、かなり前のことで、ヨコハマのある写真機店。当時は店先に「DPE」の看板がかならず出ている。そのお店にフィルム現像を持ちこんだ時であった。

店主から2階で、「写真の月例会をやっているから、のぞいてみたら」と言われて2階へ行ってみたのが、1956年の春のことであった。

そのころの彼女は、世の中ではまだめずらしい女性カメラマンとしての草分け的存在で、デビュー時期と重なり、スター的な日々を送っていた。そのころ世は、女性の進出が目立った時でもあり、働く女性をテーマに撮影が始まった。

焼野原になった横浜も占領軍のためカマボコ兵舎が数多くでき、街中には、セスナ機やヘリコプターまでもが発着するようになった。占領地には、風俗、サービス業も多く、これらを映像化したのである。

作品の中に「チャブ屋のお六さん」がある。「チャブ屋」とは、当時

のヨコハマ英語で、「食事をするところ」をチャブといい、チャブ・ハウス、チャブホテルなどと変化した。お六さんとは、仙台生まれで女学校卒と育ちの良い女性でしたが、結核が基で人生が大きく狂い始め、流れ流れて横浜・本牧のチャブ屋に六番目の女給として働くことになり、人々は「お六さん」と言うようになった。

ミナトの光景から、街中の占領現実にレンズをむけ、「働く女性」「危険な毒花」「チャブ屋のお六さん」と風俗、赤線シリーズは戦後のハマの風景であり、占領化された日本であった。

彼女も私もハマッ子であるためスムーズにお付き合いと進展した。その後、私はコマーシャル関連の仕事について、フィールドの違いはあったが長いお付き合いだった。電話があるといつも長電話で、内容はいつも技術的なこと。写真クラブでのレクチャー依頼でライティングや大型カメラの使い方などを何度となくサポートした。

長い時が去って行き、昭和の美女とお別れすることは、残念な事だ。



寺崎 瑞穂 正会員

2019年6月29日、呼吸不全のため逝去。88歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(昭和53年入会)

「さよなら瑞穂君」

田沼 武能

私の勤めていた会社は経営的には大変難しい戦後の時代をすごしていた。なにしろ7年たらずの間に3回も社名が変わったのである。寺崎瑞穂君は第2期目というか、サン写真通信社の時代に就職された。ニュース写真部門の仕事をしていた。アメリカのUPI通信社から送られてくる写真を日本の新聞社に配信する仕事で、寺崎君の考えていたようなドキュメントの写真を撮る仕事は行っていなかった。寺崎君は生来真面目な性格だったので、愚痴も言わず会社の仕事を黙々とこなしていた。自分の進むべき道と違っていると感じたのか、2年程してサン写真通信社を辞してソニーの前身である東京通信工業に就職した。この間寺崎君とは音信不通であったが、その後独立しダイヤモンドプロを設立し、教育用スライドの仕事始めた。その頃になると、ちょこちょこ、私のいたサンテレビフォト(サンニュースフォトスの名前を変更した3番目の会社)に顔を出すようになり、私の先輩三堀家義氏と毎日新聞写真部員(後にカメラ毎日の編集長になる)の佐伯啓三郎氏の推薦でJPSに入会した。私は世界を飛び回っていたのでいつも会社にいる三堀氏に推薦してもらったのだと思う。教育スライドの仕事は順調に進んでいたようにお聞きしていたが、ある日会社に来て、会社を大阪に移すと話された。大阪に移されてからはほとんど会う機会がなく、私が協会の仕事でJPS 展開西展のオープニングに出席した時に会うくらいになってしまった。

今回奥様のお話で関西に移ってから難病を患われていたことをお聞きし、お見舞いにも行かず申し訳なく思う次第です。生来戦後を生きぬいてきた芯の強い人なので愚痴は言わなかったのでしょうか。入会の推薦をした三堀家義氏も佐伯啓三郎氏もすでに彼岸の彼方におられるので、久しぶりに再会してつもる写真談義を交わしていることと思います。ご冥福をお祈りします。



田村 仁志 正会員

2019年9月9日、ガンのため逝去。64歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(平成24年入会)

田村仁志さんを偲ぶ

総務委員会

1955年、京都府生まれ。1985年関西学院大学大学院修士課程修了。1995年フリーランスとなり、「フォト・アート・オフィス」を設立する。その後1997年「田村仁志写真事務所」に改名。

1996年、京都写真家協会会員となる。

2008年4月から、佛教大学四条センターの写真講座講師となり、一眼レフ・デジタル写真講座を担当。

2015年12月、「琳派400年記念特別展・意匠のごとく」写真展開催(佛教大学四条センター)。

入会7年目の2019年9月9日ガンにてお亡くなりになりました。

ご冥福をお祈りいたします。

(田村さんと交流のあった会員の方がおられましたら事務局にご連絡ください)



鴨志田 孝一 正会員

2019年9月30日、悪性リンパ腫のため逝去。60歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(平成3年入会)

悼、鴨志田孝一

桑原 史成

鴨志田君と知り合ったのは1980年代の後半だった、と記憶する。彼は20年代の後半で、英国と米国を回ってきただけで、まだそう歳月は経ってはいなかった。いわゆる通常の留学では無く、「何でも見てやろう」の旅と語学の習得、と言ってやろう。

彼がJPSの会員に入会したのは、1991年である。年齢は30歳余で、僕が鴨志田君の20歳代の足跡を正確に語る事は出来ない。「少年新聞」(壁新聞)の写真を撮っていると話していたのを記憶する。ところで外国滞在中に身につけた語学力(会話)が、彼の仕事を誘導したように思う。それに海外で知り合った写真通信社との関係でGetty Images(米国)の特派員という身分で撮影に関わっていた。日本からの政治、経済、生活、スポーツ、芸能などのニュース写真を海外に配信する職務である。国内誌では、「女性自身」や「Flash」、「産経新聞」に寄稿していた。撮影業務は多忙であったが、彼が30歳代までの写真家としてのオリジナルな足跡(写真作品)には、特筆すべき作品は乏しかったと僕は彼に指摘した事がある。しかし、40歳代以降に足跡を残している。それは「KOIZUMI」(小泉純一郎写真集)である。発売は2001年であるが、撮影開始は1991年から2001年までの10年の歳月を費やしている。この1991年は、小泉純一郎氏が自民党の副総裁に就任した時で、鴨志田君が海外への配信で新副総裁を撮影したのが最初と考えられる。小泉氏との友好が深まり、2001年に小泉政権が樹立したところまでを編集している。この度、新環境相に就任した子息の進次郎氏が少年期(中学生の頃か)、父とキャッチボールをしている情景もある。この記録は彼が後世に残した貴重な記録と言えよう。満60歳で眠りについた鴨志田孝一君に哀悼の意を表したい。安らかにお休み下さい。



和田 靖夫 正会員

2019年11月17日、咽頭ガンのため逝去。60歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(平成17年入会)

和田靖夫さんと私

堀切 保郎

和田さんと初めて言葉を交わしたのは、JPS著作権委員会の会議の席上だと記憶しています。私の印象では、彼は「調べ魔」でした。一つの議題に対して、時間のある限り調べてくる異能な人でした。暫くして私が委員長になったとき、直ぐに副委員長に指名しました。この才能は法律を扱う委員会の特殊性と相性が良く、運営に貢献したと思います。当時の委員会では二つの課題がありました。一つは「卓上の議論ばかりしても意味がない、外に出よう」です。一期二年の委員会の間に東京地裁からストックフォト、音楽出版社、写真専門学校、公正取引委員会と嫌わず10名の委員がプロプロと行きました。調べは全て「調べ魔」の和田さんです。印象に残っているのは、和田さんの母校東京総合写真専門学校への出張著作権法講座です。事前に、何回も学校へ行き、取材してどんな内容の授業が良いか、学生が何を知らなかったのかまで調べ、講師は誰が適任か、あらゆる情報を集め、とうとう校長自らが学生を集めて、臨んだ授業でした。その時の満足そうな顔は忘れられません。

二つ目はユニークな所有権ブックスシリーズ「写真著作権」(太田出版)の「RAWデータ」の記述を第2版で改める問題です。「RAWデータ」は著作物か否かに始まり、執筆者の北村行夫顧問弁護士にどう説明するか、加筆で済むのか等、半年近く揉めに揉めました。その時も沢山の資料が提出され、一人一人自説を述べる形式で進行しました。しかし、この方法は提案者の和田さんと喧嘩状態になり、苦い経験となりました。結果は「RAW」に関する著作権委員会の見解としてJPS会報に掲載し、改訂版は新たに書き直す結果となりました。

和田さん、結果は文章として残ってますよ。喋りまくる貴方が懐かしい。

経過報告 (2019年6月～2019年12月)

◎6月19日～23日 第44回2019JPS展(名古屋)
愛知県美術館 ギャラリーE・F室 入場者1,022名
◎6月22日 イベント「ポートフォリオレビュー」入賞入選者の講評会、講演会「アザラシの赤ちゃんからシマエナガちゃん」
◎7月6日 2019年度第1回高校写真部顧問を対象とした「デジタル写真講座」AM9:30～17:00 岩手県・岩手県立盛岡農業高等学校 教師参加者19名
◎7月11日～17日 2019年新入会員展(東京)
アイデムフォトギャラリー「シリウス」 出品者42名、作品数84点、入場者数638名 ○「私の仕事」
◎7月13日 2019年度第2回高校写真部顧問を対象とした「デジタル写真講座」AM9:30～17:00 福岡県・福岡大学附属若葉高等学校 教師参加者11名
◎7月30日～8月4日 第44回2019JPS展(関西)
京都市美術館別館1F・2F 入場者1,338名
◎8月3日作品講評会、講演会「入賞作品と審査の現場から見た『写真の力』」、8月4日イベント「ZOOっとエンジョイ! オリジナル動物園写真集を作ろう!」
◎8月2日 JPS ビーパーティー
PM6:00～8:00 霞が関モンテゲート「銀座ライオン」 参加者71名
◎8月23日～29日 2019年新入会員展(大阪)
富士フィルムフォトサロン大阪 出品者42名、作品数84点、入場者数3,389名 ○「私の仕事」
◎8月26日 2019年第15回名取洋之助写真賞作品選考会
PM1:30～4:20 JCII会議室 15名
◎選考・飯沢耕太郎、清水哲朗、野町和嘉、応募者・33名35点、名取洋之助写真賞・和田拓海「SHIPYARD～翼の折れた天使たち」、奨励賞・藤本いきる「おじりなりてい」
◎9月2日 賛助会員との懇談会
PM5:30～7:30 JCII会議室 賛助会員25社35名、JPS28名
◎9月25日 日本写真保存センター2019年度第2回諮問委員会議
PM1:30～3:00 日本写真保存センター御徒町作業分室 13名
◎9月25日 日本写真保存センター第2回支援組織会議
PM3:30～4:30 日本写真保存センター御徒町作業分室 支援組織会員7社10名、JPS8名

◎10月22日 出版広報座談会
PM2:00～4:00 JCII会議室 8名
◎10月23日 東京ビジュアルアーツ写真学科セミナー
PM1:00～4:00、PM4:30～7:30 専門学校・学校法人東京ビジュアルアーツ 参加者174名 ○著作権・肖像権セミナー
◎11月14日 外部理事との懇談会
PM2:00～4:00 グランドアーク半蔵門 参加者12名
◎11月17日 第13回JPSフォトフォーラム
AM10:40～16:00 有楽町朝日ホール 参加者429名
○「撮るべき、時代。」 講演者・野町和嘉、パネリスト・大西みつぐ、HARUKI、熊切大輔
◎11月21日 第1回著作権研究会
PM2:00～4:30 JCII会議室 参加者57名
○写真著作権基礎講座「もっと知ろう写真著作権」
◎12月6日 第1回国際交流セミナー
PM6:30～8:00 東京ウイメンズプラザ1F視聴覚室 参加者30名
○「ポートフォリオレビューへの道」海外での売り込みにチャレンジ!
◎12月11日 第45回日本写真家協会賞贈呈式
PM4:30～4:45 アルカディア市ヶ谷
○受賞者・一般社団法人日本写真文化協会 ポートレートギャラリー
◎12月11日 第15回名取洋之助写真賞授賞式
PM4:45～5:05 アルカディア市ヶ谷 ○受賞者・和田拓海、藤本いきる(奨励賞)
◎12月11日 第3回笹本恒子写真賞授賞式
PM5:05～5:30 アルカディア市ヶ谷 ○受賞者・吉永友愛
◎12月11日 2019年度会員相互祝賀会
PM6:00～7:30 アルカディア市ヶ谷 参加者356名
◎12月19日～25日 第3回「笹本恒子写真賞」受賞記念展
アイデムフォトギャラリー「シリウス」 入場者数846名
○吉永友愛写真展「クリスチンの里・祈りの外海」

編集後記

◎今年JPSは創立70周年を迎えた。初期に入会した会員の訃報が多くなっており、今回は白旗、奈良原、常盤の名誉会員3氏が亡くなった。今年の特集は保存センターが行っている収蔵フィルム作品のアーカイブを国の分野横断統合ポータル「ジャパサーチ」との連携による取組を紹介した。JPS保存センターの収蔵写真原板の内容を広く知らせ、利用されるようにしたいと願っている。「著作権研究」は写真著作権協会の「教育目的や新アーカイブ」について、チャレンジの頁では「日本製鉄音楽賞 特別賞」を受賞した舞台写真家の林喜代種氏にご登場いただいた。(田沼)

◎2020年の暮が開き、今年は東京オリンピックだけでなく、JPSにとっても記念すべき年で、1950年5月12日の創立総会から70周年を迎えます。今号からJPS会報の表紙に「JPS70」のロゴを表記しました。70の文字は文化勲章受章者田沼武能さんに毛筆で書いていただきました。(小池)

◎会報の編集では、長年「名取洋之助写真賞」の受賞作品のレイアウトを担当してきたが、今回初めて受賞写真展の会場で受賞者にインタビューの機会を得た。30枚の受賞作品を背にインタビューに答える姿に、自分の道を突き走る若いエネルギーを感じた。自分にも同じような情熱の時代があったはずだが……。『オレの情熱の時代よ、カムバック!』(飯塚)

◎例年、箱根駅伝を登山鉄道の踏切脇で見ている。あれは電車を運行する側も、電車を停めるか先に行かせるか、現場で中継を見ながら難しい判断をしています。今年は水害で電車が運休。来年は是非踏切での見学を復活させたいもの。次の駅伝まで、えっと、あと何日だ? (池口)

◎会報誌173号が届く頃にはCP+が行われている時期である。年に数度の写真界の大きな展示会、今年は新型コロナウイルス問題もあり中止となった。この後はオリンピックもあり、早く終息してほしい。ここ最近、時間が経つのが早く感じて、仕事の進みが早く感じられない、トホホな歳になってきた。(川上)

◎日本建築写真家協会「銀座ジャック 再び!」の写真展が5月に開催されます。昨年出版の写真集を展示するものです。銀座通り1～8丁目の昼景・夕景パノラマ写真と銀座スナップ写真がちりばめられます。2018年の撮影から2年越しで、ようやく協会20周年の行事が完結します。(小野)

◎仕事相手が全員自分よりも1世代以上年下という環境で仕事をするのが当たり前になり、コミュニケーションの手段もSNSやメッセージ等が中心となり、電話はもろんですがEメールですらレガシーな手段になりつつあり、スマホの未読表示が気になりました。(小城)

◎イギリスのEU脱退、オーストラリアの大規模火災、フィリピンのタール火山の噴火、そして武漢肺炎の蔓延と年頭から世界を揺るがすニュースばかり。CP+も中止になった。モノと人の動きが制約され、近いと思った世界がまた遠くなった。さて5月に開催予定のフォトキナはどうなるのだろうか。(柴田)

◎日本写真協会(PSJ)の理事・大平さんが昨年末に亡くなられた。突然の知らせに、本当に驚いた。PSJ事務局はJPSの上の階にあり親しい関係だ。大平さんは、お酒が好きで、オープンバーティー後の2次会も何回もご一緒した。アジアの写真家の面倒も見られていて、偲ぶ会には日本以外の写真家の参加も多かった。大平さん天国から我々の活動を見守ってください。合掌(伏見)

◎ついに来た。2000年生まれと話していたら、フィルムを知らず、ネガフィルムの画像をググって見せても、見たことがないという。中古車のカセットデッキにスマホを差し込んだり、きつぶを買えないひとが増えているとも聞く。この調子だと現金知らない若者もでてくるな、きつと。(桃井)

◎写真家によるYouTubeチャンネル(動画投稿サイト)が流行っています。内容は機材、撮影テクニック、写真論、写真集紹介から人生論までさまざま。写真家の語り口に引き込まれてついつい見入ってしまいます。そして「あなたがスマホを見ている時間は、先週より〇〇%増えました」と警告が。(山縣)

日本写真家協会会報 第173号 (年3回発行) 2020年2月20日 印刷・発行 ©編集・発行人 野町和嘉

URL <https://www.jps.gr.jp/> Email info@jps.gr.jp 本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます

頒価 1カ年・3回 3,500円(消費税・送料共込)

編集・広報委員 田沼武能(理事)、小池良幸(委員長)、池口英司(副委員長)、飯塚明夫、小野吉彦、川上卓也、小城崇史、柴田 誠、伏見行介、桃井一至、山縣 勉

発行所 公益社団法人日本写真家協会 (JPS)

〒102-0082 東京都千代田区一番町25番地 JCIIビル303 電話 03(3265)7451(代表) FAX 03(3265)7460

印刷所 株式会社光邦

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3丁目11番18号 飯田橋 MKビル 電話 03(3265)0611(代表)



20mm F/2.8 Di III
OSD M1:2
(Model F050)



24mm F/2.8 Di III
OSD M1:2
(Model F051)



35mm F/2.8 Di III
OSD M1:2
(Model F053)



単焦点を、もっともっと面白く。

NEW

風景からスナップまで、“寄れる”が広げる写真表現。
最大撮影倍率1:2、単焦点シリーズ。

※最短撮影距離：0.11m (Model F050)、0.12m (Model F051)、0.15m (Model F053)

TAMRON

www.tamron.co.jp

for Sony full-frame mirrorless

ソニーEマウント用 Di III:ミラーレス一眼カメラ専用レンズ



Zでなければ、会えなかった自分がいる。



ニコン史上最高画質
フルサイズミラーレス

Z 7

Z 6

オールラウンド
フルサイズミラーレス

狙った瞳を逃さない。高精度な「瞳 AF」※1 新搭載。

- | | | | | |
|------------------------------|-------------------------|---------------------------|------------------------|---------------|
| [Z 7] | ■有効画素数 4575万画素 | ■常用感度 ISO 64-25600 | ■高速連続撮影 最高約 9コマ / 秒※2 | ■493点像面位相差 AF |
| [Z 6] | ■有効画素数 2450万画素 | ■常用感度 ISO 100-51200 | ■高速連続撮影 最高約 12コマ / 秒※2 | ■273点像面位相差 AF |
| [Z 7・Z 6 共通] | | | | |
| ■画像処理エンジン EXPEED 6 | ■有機 EL パネル採用電子ビューファインダー | ■タッチパネル採用チルト式 3.2 型画像モニター | | |
| ■ボディー内手ブレ補正 (計 5 軸、約 5.0 段分) | ■4K UHD 動画 | ■Wi-Fi・Bluetooth 内蔵 | ■記録媒体 XQD カード (別売り) | |

※1 静止画撮影、オートエリア AF (AF-S、AF-C) 時 ※2 拡張時 ●NIKKOR Z 58mm f/0.95 S Noct は開発発表製品です。

CAPTURE TOMORROW



ニコンカスタマーサポートセンター
0570-02-8000

一般電話からは市内通話料金でご利用いただけます。営業時間 9:30~18:00 (年末年始、夏期休業等を除く毎日) ●ナビダイヤルがご利用
いただけない場合は、(03) 6702-0577 におかけください。●ファクシミリでのご相談は、(03) 5977-7499 へご送信ください。

www.nikon-image.com | 株式会社 ニコン・株式会社 ニコン イメージング ジャパン

1.1 億本
NIKKOR



1/400, F5.0, ISO 100, EV-1.0, WB: 太陽光, IC / ハートモ / トーン

RICOH
imagine. change.

株式会社リコー / リコーイメージング株式会社 www.ricoh-imaging.co.jp

GR

写真家に知っておいていただきたい著作権のこと

あなたが写真を撮った瞬間に、
写真の著作権はあなたの**財産**となります。
そのために何の**登録**も必要としません。

あなたの写真は、著作権というとても**強い権利**で、
あなたの**死後70年**に渡って守られます。
しかし、著作権を**譲渡する契約**が交わされた写真は、
その**権利を失い**、回復することは**困難**です。

写真家はでき得る限り、
「写真の著作権を**保持するべき**である」
と私たちは考えます。

写真著作権を大切に



一般社団法人
日本写真著作権協会

<https://jpca.gr.jp> 〒102-0082 東京都千代田区一番町 25 JCII ビル403

〔正会員団体〕 公益社団法人日本写真家協会／公益社団法人日本広告写真家協会／一般社団法人日本写真文化協会／日本肖像写真家協会／一般社団法人日本写真作家協会／全日本写真連盟
一般社団法人日本スポーツプレス協会／一般社団法人日本自然科学写真協会／日本風景写真協会／公益社団法人日本写真協会／一般社団法人日本スポーツ写真協会

この広告は、公益社団法人日本複製権センターからの分配金による公益事業の一環として制作されています。

長年の信頼 HCLファインアートプリントサービス

作品のイメージを極限まで表現した「ファインアート・プリント」を国内外有数のアーティスト用紙でご提供します。



イルフォード ゴールドファイバーシルク

高い鮮鋭度、広い色再現域、優れた長期保存性、
往年の白黒写真のようなシルキーな黒と
クリーミーな白を再現できます。
クリエイティブなテクニックを可能にし、
創作力を最大限に発揮した作品制作ができます。



**ILFORD
CERTIFIED PRINTER PARTNER**
イルフォード 認定ラボ



ハーネミュレ ファインアート バラिता

深い色合い、上質な光沢と質感、広い色再現域、高
い最大濃度と滑らかなグレーの階調表現で、
特にモノクロ写真に最適です。



伊勢和紙 芭蕉

伊勢和紙は、インクジェットプリント用の
厚手和紙の特性を活かし、
柔らかな優しい印象を持ったプリントです。
滑面と粗面があり、制作意図に応じて
どちらの面でもプリントが可能で
違った風合いを表現できます。



ハーネミュレ フォトラグ

精細で滑らかな面質により多目的に使い、
モノクロとカラー写真のどちらにも適し、
深みを感じる絵画的な作品に仕上がります。

〈画像は全てイメージです。〉

このほかにも条件により各種ファインアートペーパー出力の対応が可能ですのでご相談ください。

フォトイメージングセンター フォトアート課
東京都千代田区神田小川町2-6-14
☎(03)6854-9581

フォトイメージングセンター 営業課
東京都渋谷区神宮前3-41-6
☎(03)3479-5351

関西営業部 営業課
大阪府大阪市北区万歳町3-17
☎(06)6313-2351

株式会社 **堀内カラー**

ファインアートプリントサービスの詳細はこちら▶
webからも注文できます! horiuchi-color.co.jp/



ヨドバシカメラの ゴールドポイントカードが M&石井スポーツ ART SPORTS でも ご利用いただけるようになりました。

1ポイント = **1**円として
ご利用いただけます!



石井スポーツ / アートスポーツで
ご購入いただいた商品も

10%ポイント還元

※ポイント還元率はお支払い方法により異なります。
※一部商品により還元率が変更となります。



新規会員募集中 日本写真家協会 会員様専用の
ゴールドポイントカード

12%ポイント還元

※現金・デビットでのお支払時。一部対象外商品ございます。



専門知識豊富な販売員が親切丁寧にご案内いたします!

ヨドバシカメラ

www.yodobashi.com

新宿西口本店
〒160-0023
新宿区西新宿1-11-1
☎03(3346)1010

マルチメディア新宿東口
〒160-0022
新宿区新宿3-26-7
☎03(3356)1010

マルチメディアAkiba
〒101-0028
千代田区神田花岡町1-1
☎03(5209)1010

マルチメディア錦糸町
〒130-8580 (駅ビルテナ1・2・3階)
墨田区江東橋3-14-5
☎03(3632)1010

マルチメディア上野
〒110-0005
台東区上野4-10-10
☎03(3837)1010

マルチメディア町田
〒194-0013
町田市原町田1-1-11
☎042(721)1010

八王子店
〒192-0082
八王子市東町7-4
☎042(643)1010

マルチメディア吉祥寺
〒180-0004
武蔵野市吉祥寺本町1-19-1
☎0422(29)1010

マルチメディア川崎ルフロ
〒210-0024
川崎市川崎区日進町1-11
☎044(223)1010

アウトレット京急川崎
〒210-0007
川崎市川崎区駅前本町21-12
☎044(221)1010

マルチメディア横浜
〒220-0004
横浜西区北幸1-2-7
☎045(313)1010

マルチメディア京急上大岡
〒233-0002 (京急百貨店1・8・9階)
横浜区港南区上大岡西1-6-1
☎045(845)1010

マルチメディアさいたま新都心駅前店
〒330-0843
さいたま市大宮区吉敷町4-263-6
☎048(645)1010

千葉店
〒260-0015
千葉市中央区富士見2-3-1
☎043(224)1010

マルチメディア新潟駅前店
〒950-0901
新潟市中央区弁天1-2-6
☎025(249)1010

マルチメディア宇都宮
〒321-0964 (ラスクエア6・7・8階)
栃木県宇都宮市駅前通り1-4-6
☎028(616)1010

マルチメディア郡山
〒963-8002
福島県郡山市駅前1-16-7
☎024(931)1010

マルチメディア仙台
〒983-0852
仙台市宮城野区榴岡1-2-13
☎022(295)1010

マルチメディア札幌
〒060-0806
札幌市北区北6条西5-1-22
☎011(707)1010

マルチメディア梅田
〒530-0011
大阪市北区大深町1-1
☎06(4802)1010

マルチメディア京都
〒600-8216
京都府京都市下京区京都駅前 京都タワー横
☎075(351)1010

マルチメディア名古屋松坂屋店
〒460-8430
名古屋市中区栄3-16-1
☎052(265)1010

マルチメディア博多
〒812-0012
福岡市博多区博多駅中央街6-12
☎092(471)1010

ヨドバシカメラの
インターネットショッピング
www.yodobashi.com
ケータイでいつでもどこでも簡単ショッピング!
<http://m.yodobashi.com>

お電話で1本ですぐにお届け!
テレフォンショッピング
☎0120-141405
受付時間: あさ10時~よる9時 365日年中無休



Twilight ——— 細田満夫

FUJIFILM X-Pro2 XF18mm F2 R



インスタ映えを求めて —— 服部辰美

FUJIFILM X-Pro2 XF18-55mm F2.8-4 R LM OIS



岐阜地歌舞伎・楽屋にて——— 林 義勝

FUJIFILM X-T2 XF18-55mm F2.8-4 R LM OIS

撮る悦びの原点へ。



フォトグラファー | 高桑正義 SEIGI TAKAKUWA

X-Pro3 + XF14mmF2.8 R

被写体を見つける、
ファインダーで狙いを定める、
シャッターを切る——。
ただ純粹に撮ることだけを楽しめる
ミラーレスカメラ。
シャッターを切った後、
意識は既に次の被写体へ。

X-Pro3

チタニウムの外装にデュラテクト™加工を施し、
上質な品位と高い信頼性を両立。
光学式と電子式を切り替え可能な世界唯一の
ハイブリッドビューファインダーが
より高解像・高輝度に進化



※「デュラテクト」はシチズン時計株式会社の商標または登録商標。



Photo Takeshita Takumi